

Agilent EEsof EDA
Advanced Design System
ADS 2003C (Rev.301)
アップデート/インストール手順書
for Windows 2000 / NT 4.0 / XP

(注意) この手順書はシステムマネージャー向けに書いてあります。一通りお読みになったうえ、内容を十分ご理解された後、作業を始めてください。

また、このマニュアルは、Advanced Design System 2003C (Rev.301) を元に書かれています。

この手順書には、Advanced Design System 2003C を PC にインストールする手順が書いてあります。詳細については以下の冊子をご覧ください。

Agilent ADS 2003C
Installation on PC Systems
Part No.E8900-90497

新製品、不具合情報はホームページでご覧いただけます。

<http://www.agilent.com/find/eesof-support-japan>

2004年3月1日 作成
アジレント・テクノロジー株式会社
電子計測本部 第四営業部
EDA テクニカルサポート課 発行

EDAテクニカルサポートの電話番号・FAX 番号・ E-Mail アドレスを再度ご確認ください

名 称	: EDAテクニカルサポート
〒192-8510 東京都八王子市高倉町 9-1 アジレント・テクノロジー株式会社 八王子本社 MS C3-1-6	
電話番号	: 0120- 560- 119
FAX 番号	: 0120- 890- 119
E - Mail	eesof-japan_support@agilent.com

なお、EDAテクニカルサポートにご質問をいただく場合は、必ずお客さまのシステムハンドル番号を受付にお伝えください。また、EDAテクニカルサポートでは、OS (HP-UX, Solaris, Windows) に関するご質問は承っておりませんので予めご了承ください。

EDAテクニカルサポートへご質問の FAX を送信する場合は、本手順書の 9- 2節 EDAテクニカルサポートサポート依頼 FAX シートをご利用いただくと便利です。

次の問題確認項目を参考にいただくとより早いご回答が期待できます

- (1) 何をしようとしていましたか。
- (2) どうなるはずだ、またはどうなって欲しいと考えていますか。
- (3) 何が起きていますか。
- (4) どんなエラーメッセージ、エラー番号が出ていますか。
そのエラーメッセージはOS側のものでしょうか、それともソフトウェア側のものでしょうか。
そのエラーメッセージはどこに表示されていますか。
データベースで検索するため、エラーメッセージは正確にお知らせください。
- (5) この問題はいつから発生していますか。
- (6) この問題はときどき発生しますか、または必ず発生しますか。
- (7) ときどき発生する場合は、どんなときに発生しますか。
- (8) 今まで正常に動作していましたが、または今回が初めてのご使用ですか。
- (9) 問題発生前に、何か変更なさいましたか。(ハードウェア、ソフトウェア、設定など)
- (10) すでに何かの問題解決の手を打たれましたか。その結果はどうでしたか。

Agilent EEsof EDA

Advanced Design System

ADS 2003C (Rev.301)

アップデート/インストール手順書

for Windows 2000 / NT 4.0 / XP

2004年3月1日 作成
アジレント・テクノロジー株式会社
電子計測本部 第四営業部
EDA テクニカルサポート課 発行

UNIXは、X/Open Company Limitedの登録商標です。
MS-DOSは、Microsoft Corporationの登録商標です。
Windows 2000, Windows NT 4.0, Windows XP,は、Microsoft Corporationの商標です。
Sentinel Driverは、Rainbow Technologies, Inc.の商標です。
FrameViewerは、Adobe Systems Incorporatedの登録商標です。

その他、会社名、製品名は各社の商標および登録商標です。

目次

1章 トピックスと手順の概要	1
1 - 1 トピックス.....	1
1 - 2 ADS 2003C の重要な注意事項情報.....	2
1 - 3 インストール/アップデートの流れ.....	3
1 - 4 このマニュアルの見方.....	4
1 - 5 用語説明.....	6
2章 インストール前の準備	7
2 - 1 梱包物の確認.....	7
2 - 2 必要なハードウェア/ソフトウェア.....	8
2 - 3 ハードウェアスペックの確認.....	9
3章 インストールの実施	11
3 - 1 概要とアップデートの注意.....	11
3 - 2 ローカル/ネットワークインストール.....	12
3 - 3 セットアップの起動.....	14
3 - 4 インストール作業.....	22
3 - 5 ネットワークインストール.....	35
3 - 6 セットアップの終了.....	44
3 - 7 参考；後から一部のファイルセットをインストールする方法.....	45
4章 ライセンスの設定	46
4 - 1 概要.....	46
4 - 2 FLEXlm の概念.....	47
4 - 3 セットアップの手順.....	49
4 - 4 FLEXid ドライバのインストール.....	50
4 - 5 ハードウェアキーの接続と確認.....	52
4 - 6 ライセンスファイルの作成と設置.....	56
4 - 7 環境変数の設定/確認.....	61
4 - 8 ライセンスデーモン(lmgrd)とは？.....	63
4 - 9 lmgrd の起動および停止の方法.....	65
4 - 10 lmgrd の自動起動.....	69
4 - 11 ライセンスクライアントの設定.....	76
4 - 12 UNIXライセンスサーバの利用.....	77
4 - 13 ライセンスを追加する方法.....	79
4 - 14 参考；FLEXlm でよくあるご質問とその回答(FAQ).....	81
5章 プリンタの設定	82
5 - 1 プリンタの設定.....	82
6章 ネットワークアナライザの設定	85
6 - 1 サポートしている GPIB(HP-IB) インターフェース.....	85
6 - 2 GPIB(HP-IB) インターフェースのインストール.....	86

6 - 3	測定セットアップ (Instrument Server の設定).....	87
7 章	動作確認.....	88
7 - 1	ユーザ設定の確認.....	88
7 - 2	アプリケーションの起動.....	90
7 - 3	ADS 2003C が起動しない時.....	92
7 - 4	サンプルファイルでの動作確認.....	94
8 章	付録.....	96
8 - 1	ファイルシステムの共有.....	96
8 - 2	TCP/IP,IPX/SPXプロトコルのインストール.....	99
8 - 3	複数個の lmgrd を自動起動する方法.....	102
8 - 4	GPIB(HP-IB)ボードのインストール.....	106
8 - 5	Advanced Design System プログラムの消去 (アンインストール).....	107
8 - 6	複数のバージョンの ADS を使用する方法.....	108
8 - 7	起動時の作業フォルダの設定を変更する方法.....	111
8 - 8	プロセスの停止.....	112
8 - 9	デバッグモードでの起動方法.....	113
8 - 10	FLEXlm ユーティリティ.....	114
8 - 11	リモートシミュレーションの設定.....	128
9 章	コードワード発行依頼とEDAテクニカルサポートのご利用案内.....	139
9 - 1	コードワード発行依頼の方法.....	139
9 - 2	EDAテクニカルサポート・サポート依頼 FAX シートの使い方.....	143
9 - 3	EDAテクニカルサポートを有効にご利用いただくために.....	144

1章 トピックスと手順の概要

1- 1 トピックス

Advanced Design System (ADS) 2003C は、従来以上に MMIC設計フローにおける機能の強化をはじめ、数多くのアップデートを実施しており、通信関連製品の開発効率に貢献します。

新デバイス・モデルへの対応を始め、デザインキット・メンテナンス性の向上、レイアウト機能の追加と改善等、数々のアップデートが行われました。ADS 2003C では回路図入力、レイアウト、シミュレーション、電磁界解析、統計解析、また測定器とのリンクによる Connected Solutions による設計検証が統合環境で可能であり、MMIC設計において、よりシームレスな設計フローを提供します。

Advanced Design System (ADS) 2003C は、モデルから始まり、ファンダリ・デザインキット、回路図、シミュレーション、データ・ディスプレイ、レイアウト、回路図とレイアウト間のデザイン同期、そして製造移管を容易にするための検証機能に至るまで、ADSの全分野に 対して改良がなされています。

Advanced Model Composer は、スパイラル・インダクタ、薄膜抵抗、MIMコンデンサーおよびマッチング回路のパラメータ化された受動モデルを生成することができます。最初に、ADS Momentum を実行し、その結果は Advanced Model Composer によってパラメータ化されたモデルに変換されます。これにより高速で正確な回路シミュレーションが可能となります。

Automated Verification Modeling (AVM) は、精度の損失を最小限に抑えつつ、シミュレーション速度を100倍以上速くします。Automated Verification Modelingでは、トランジスタレベルの正確さを保ちながら、トップレベルのピヘイピア・ブロック・モデル並みのシミュレーション速度を実現します。

その他、ADS 2003C での変更などの詳細につきましては、以下の WEB サイトをご覧ください。

ADS 2003C What ' s New (日本語)

<http://eesof.tm.agilent.com/products/ads2003cj.html>

1- 2 ADS 2003C の重要な注意事項情報

(1) サポート OS の一部変更

Windows のサポートバージョン

ADS 2003C は、Windows 2000 (SP3) / NT 4.0 (SP6a) / XP (SP1) をサポートしています。
Windows 95 / 98 / Me では動作いたしません。また、ライセンスサーバとして使用することもできません。

(2) ライセンスの注意事項

ADS 2003C 用のライセンス

注意 ADS 2003C には ADS2003A,2003C 専用のライセンスが必要です。それ以前のバージョンの ADS 用ライセンスでは動作しません。

ADS 2003A,2003C 用のライセンスをお持ちでないお客様が ADS 2003C をご使用になる際は、弊社までライセンスのご請求をお願い致します。

ADS の各バージョンと、使用できるコードワードのバージョンの関係は以下のようになっています。

		発行されたコードワードのバージョン			
		ADS 2003A,2003C	ADS 2002,2002C	ADS 1.01-2001	SeriesIV / MDS
動 作	ADS 2003A,2003C	*1	×	×	×
	ADS 2002,2002C	×	*2	×	×
	ADS 1.01-2001	×	×	*3	×
	SeriesIV / MDS	×	×	*4	

(*1) ADS 2003A と ADS 2003C は、共通のコードワードで動作します

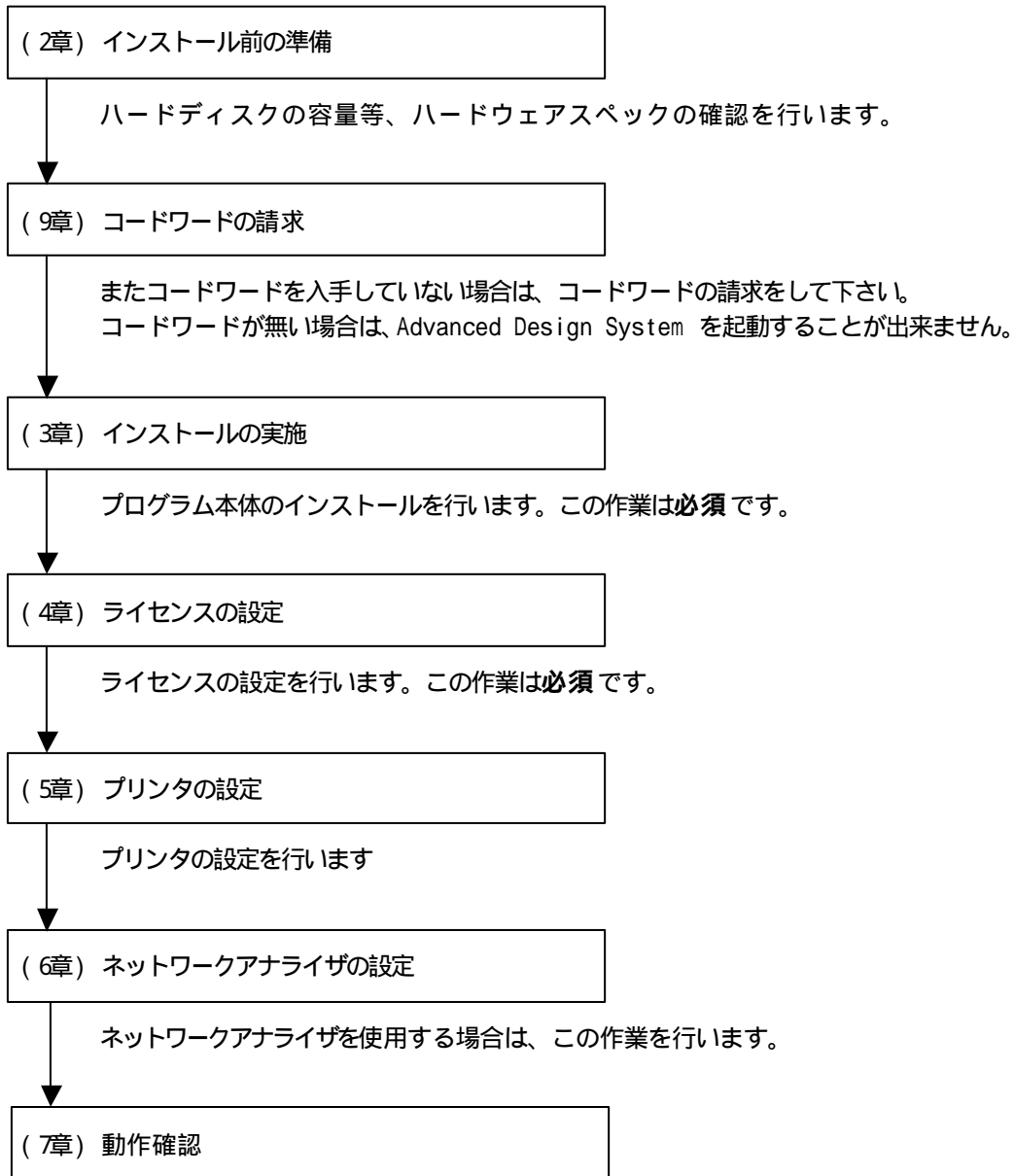
(*2) ADS 2002 と ADS 2002C は、共通のコードワードで動作します

(*3) ADS 1.01, 1.1, 1.3, 1.5, 2001 は、共通のコードワードで動作します

(*4) ADS 1.01-2001 のコードワードは、クロスライセンスにより SeriesIV / MDS も動作します

1- 3 インストール/アップデートの流れ

セットアップの流れと本書の構成の関係を下図に表します。Advanced Design Systemをインストールして、使用できるようになるまでには、基本的に以下の作業が必要になります。



実際に Advanced Design System を起動して、動作確認を行います。

1- 4 このマニュアルの見方

このマニュアルで使われている表現・用語について解説します。

(1) 動作

■ クリックする

マウスの左ボタンを一回押すことを示します。

■ ダブルクリックする

マウスの左ボタンを二回すばやく押すことを示します。

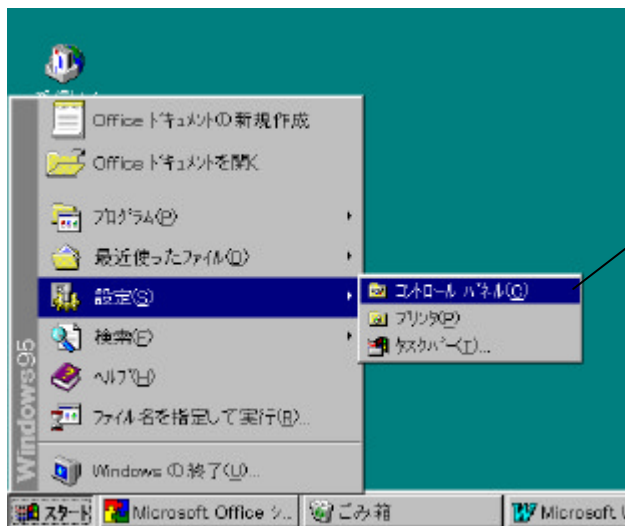
■ 選択する

目的の場所にカーソルを合わせて、マウスの左ボタンを一回押すことを示します。

この場合、次のボックスがすぐに現れる場合と、選んだ項目等が反転するような場合(下図)とあります。

■ [スタート] > [設定] > [コントロールパネル] を選択


このような表現があったときは、以下の図の場所にマウスカーソルを合わせてマウスの左ボタンをクリックします。



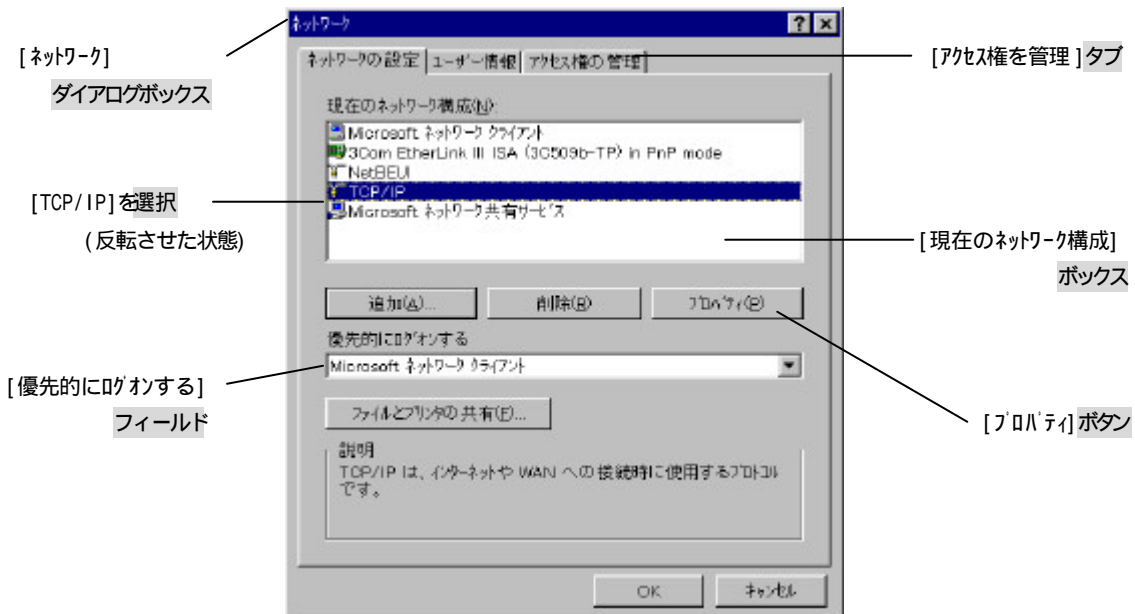
この場所にマウスポインタを合わせます。

(2) 各部名称

■ [スタート]ボタン

Windows 2000 / NT 4.0 / XP のタスクバーの左にある  スタート を示します。

■ 以下の図でダイアログボックス関係の各部の名称を示します。



(3) ドライブ、ディレクトリの指定

■ <Drive>:

目的とするドライブ名を示します。

例えば、ハードディスク、CD-ROMドライブがそれぞれ一台ずつ接続されたコンピュータの場合、それぞれのドライブ名は以下のようになります。

	<Drive>:
ハードディスク	C:
CD-ROMドライブ	D:

■ <Installation directory>

ADS 2003C のインストールされているディレクトリを示します。

通常は “C:¥ADS2003C” ディレクトリです。

インストール時に任意のディレクトリを指定した場合、そのディレクトリになります。

1- 5 用語説明

- TCP/IP (Transmission Control Protocol / Internet Protocol)
インターネットで用いられているネットワークプロトコル。
事実上のネットワーク標準プロトコルである。
- DNS (Domain Name Service)
ネットワークのアドレス、ホスト名などを管理するもの。
ホスト名からIPアドレスへの変換などに用いられる。
- DHCP(Dynamic Host Configuration Protocol)
DHCPサーバのあるネットワーク環境では、DHCPサーバがネットワーク内のコンピュータに動的にIPアドレスを指定する。個々のコンピュータでIPアドレスの設定をする必要が無い。
- IRQ (Interrupt ReQuest)
ディスク、ネットワークカード、サウンドカードなど周辺機器が CPU に対してデータの送受信の準備ができたことを知らせる割り込み番号。
各々の周辺機器に異なった IRQ番号を割り当てなければならない。
- DMA (Direct Memory Access)
CPUを介さないデータ転送。
専用のハードウェアが制御するのでCPUへの負荷が小さく、転送速度が速くなる。

2章 インストール前の準備

2-1 梱包物の確認

(1) 付属 CD-ROM

ADS 2003C の製品パッケージ(アップデートパッケージ)には、計6枚の CD-ROM が同梱されています。6枚とも揃っているか、最初に必ず確認してください。また、CD-ROM の内容は以下のようになっています。

- Advanced Design System Release 2003C Agilent EEsof EDA
UNIX Disk 2
Part No.E8900-10213
- Advanced Design System Release 2003C Agilent EEsof EDA
Solaris 7/8/9 Program Disk
Part No.E8900-10214
- Advanced Design System Release 2003C Agilent EEsof EDA
PC Setup Program Disk 1 Windows NT 4.0, Windows 2000, Windows XP
Part No.E8900-10215
- Advanced Design System Release 2003C Agilent EEsof EDA
PC Setup Program Disk 2 Windows NT 4.0, Windows 2000, Windows XP
Part No.E8900-10216
- Advanced Design System Release 2003C Agilent EEsof EDA
HP-UX 11.0/11i Program Disk
Part No.E8900-10217
- Advanced Design System Release 2003C Agilent EEsof EDA
Red Hat Linux 7.2/7.3
Part No.E8900-10218

(2) 付属冊子

ADS Ver.2003C OSB Kit には、以下の計2冊の冊子が付属しています。

- Installation on UNIX Systems (P/N:E8900-90496)
- Installation on PC Systems (P/N:E8900-90497)

これらの付属物は、製品(パッケージ)の出荷時期によって予告無く変更される場合がありますので、ご注意下さい。不審な点等ございましたら、弊社窓口までお問い合わせ下さい。

2- 2 必要なハードウェア/ソフトウェア

ADS 2003C をインストール/実行するために必要なハードウェアの構成を示します。

OS	Microsoft Windows NT 4.0 ServicePack 6a Microsoft Windows 2000 ServicePack 3 Microsoft Windows XP ServicePack 1 !注意 Windows 95 / 98 / Me はサポートしていません
ディスプレイ	ハイレゾリューションカラー (SVGA, 800 × 600, 15インチ) 以上 <推奨 :1024 × 768, 17インチ>
メモリ(RAM)	128Mバイト以上 <推奨 :512Mバイト以上>
仮想メモリ	300Mバイト以上 (大規模なデザインを取り扱う場合は、より多くの仮想メモリが必要となります。NT 4.0 では、メモリの扱いの不具合を回避するため、仮想メモリは常に実メモリより大きくとる必要があります) <推奨 :512Mバイト以上>
ハードディスク容量(最大)	最小インストール時 約 335MB 標準インストール時 約 1.7GB フルインストール時 約 2.7GB
ハードウェアキーID	ノードロックライセンス/ネットワークライセンスのサーバとして使用する場合は、パラレル(プリンタ)ポート / USBポートに接続するハードウェアキー(Globetrotter社 FLEXid セキュリティーキー)か、Ethernet LAN カードID が必要
プリンタ/プロッタ	OS がサポートするプリンタ / プロッタ(ただし、HP JaserJet 3100 は、ハードウェアキーと競合が起こり使用できない場合があります)
メディア	CD-ROM
CPU	Intel Pentium シリーズ 200MHz以上 <推奨 :Pentium III 750MHz以上>
コンパイラ (ユーザモデル開発キット 使用時)	Microsoft Visual C++ Ver.6
HDL シミュレータ (HDL コ・シミュレーション 使用時)	ModelSim/Plus™ EE V5.2e Verilog XL Version 3.11 NC-SIM Version 3.2
GPIB (HP-IB)ボード	Agilent Technologies 社・Hewlett-Packard 社・National Instruments社のインターフェイスボードに対応 (対応機種は 6- 1節に掲載)

参考 扱うデータ量が大きくなり、RAMの容量では足らなくなると、データがディスクに書き込まれます(スワップ)。ディスクへの書き込み/読み出しに必用な時間(アクセスタイム)は RAMに比べ非常に大きいので、スワップが増えると PC の処理速度が非常に遅くなります。メモリはできれば、ご使用になっているコンピュータの最大まで搭載することをお勧めします。推奨される RAM サイズは 512M バイト以上です。

2- 3 ハードウェアスペックの確認

(1) メモリ (RAM) の確認

最低 128MB のメモリが必要です。快適に作業をするためには、より多くのメモリを用意する必要があります。メモリの大きさはコンピュータが起動するときに画面に表示されます。

コンピュータを再起動させずにメモリの大きさを調べるには、デスクトップ上の「マイコンピュータ」のアイコン (Windows XP の場合は、[スタート] > [マイコンピュータ]) を開き、メニューから、[ヘルプ] > [バージョン情報] を選択すると、[Windows が使用できる物理メモリ] 欄に搭載メモリがキロバイト単位で表示されています。

(2) ハードディスクのフリーエリアの確認

必要とされるハードディスクの容量は、フルインストールの場合で、約 3.0GB 程度必要になります。ハードディスクはインストールするファイルセットの容量分以外にも、仮想メモリの分として、最低 400MB は必要となります。

ディスクのフリーエリアが少ない場合は、インストールするコンポーネントの選択時に必要なディスク容量が表示されていますので、そちらを参考にしながら必要な最小のシステムをインストールするようにしてください。

コンピュータを再起動せずにハードディスクの容量を調べるには「マイコンピュータ」のアイコン (Windows XP の場合は、[スタート] > [マイコンピュータ]) を開き、[表示] > [詳細] メニューを選択すると、[空き領域] の項目が見えますのでこちらでご確認ください。

(3) OS のバージョンの確認

現在使用している OS のバージョンを確認する方法です。

デスクトップ上の「マイコンピュータ」のアイコン (Windows XP の場合は、[スタート] > [マイコンピュータ]) を開き、メニューから、[ヘルプ] > [バージョン情報] を選択すると、確認できます。

(4) 仮想メモリの確認

ADS 2003Cでは、最低 300Mbyte の仮想メモリが必要となります。また、回路の規模によっては、それ以上の仮想メモリを必要とする場合もありますので、ご注意ください。仮想メモリは最大に設定しても、ハードディスクの残り容量分までしか確保できません。

現在の仮想メモリの大きさを確認するためには、

■ Windows 2000

1. [コントロール パネル] の [システム] アイコンをダブルクリックして [システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます
2. [詳細] タブを選択し、[パフォーマンス] ボタンをクリックします。
3. [パフォーマンス] ダイアログボックスが開き、[仮想メモリ] の項目に現在の仮想メモリの大きさが表示されています。
4. 変更が必要な場合は、[変更] ボタンを押して、[初期サイズ] のフィールドに、新しい仮想メモリのサイズを入力した後、[設定] ボタンを押します。

■ Windows NT 4.0

1. [コントロール パネル] の [システム] アイコンをダブルクリックして [システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます
2. [パフォーマンス] タブを選択すると、[仮想メモリ] の項目に現在の仮想メモリの大きさが表示されています。
3. 変更が必要な場合は、[変更] ボタンを押して、[初期サイズ] のフィールドに、新しい仮想メモリのサイズを入力した後、[設定] ボタンを押します。

■ Windows XP

1. [スタート] > [コントロール パネル] の [パフォーマンスとメンテナンス] を開き、[システム] アイコンをクリックして、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
2. [詳細設定] タブを選択し、[パフォーマンス] の [設定] ボタンをクリックします。
3. [パフォーマンス] ダイアログボックスが開き、[詳細設定] タブを選択すると、[仮想メモリ] の [すべてのドライブの総ページング ファイルサイズ] に現在の仮想メモリの大きさが表示されています。
4. 変更が必要な場合は、[変更] ボタンを押して、[初期サイズ] のフィールドに、新しい仮想メモリのサイズを入力した後、[設定] ボタンを押します。

どのドライブを使っても、十分な仮想メモリが確保できない場合は、不要なファイルを削除して容量を確保するか、ドライブを増設する必要があります。

仮想メモリについて詳しいことは、Windows のマニュアルか、ご使用になっている OS のヘルプを参照してください。

3章 インストールの実施

3-1 概要とアップデートの注意

この章では、ADS 2003C のファイルセットのインストール方法について解説します。
一通りお読みになり、内容をよくご理解の上、手順通りに実行してください。

インストールはセットアッププログラムを用いて行われます。CD-ROM からハードディスクにファイルセットがコピーされますので、インストール前にディスクスペースが十分かどうか、もう一度ご確認ください。

古いバージョンの Advanced Design System がインストールされている場合は、その環境変数が残っていないかをご確認ください。環境変数 HPEESOF_DIR に、例えば ADS 2002 の設定 (HPEESOF_DIR=C:\%ads2002 など) が残っていると、インストーラが正しく起動しません。



インストール時は、環境変数 HPEESOF_DIR を削除するようお願いいたします。

また、古いバージョンの Advanced Design System をアンインストール(削除)したい場合は、[スタート]>[プログラム] (Windows XP の場合は[スタート] > [すべてのプログラム])メニュー内の、Advanced Design System のプログラムグループの中に [Uninstall ADS] がありますので、このメニューを選択すると起動できます。ADS 2002 の場合は、[スタート] > [プログラム] > [Advanced Design System 2002] > [Uninstall ADS] (Windows XP の場合は、[スタート] > [すべてのプログラム] > [Advanced Design System 2002] > [Uninstall ADS])を選択することになります。

アンインストールにつきましては、8 - 5 節「Advanced Design System プログラムの消去(アンインストール)」で詳しく述べていますので、そちらを参照ください。

重要 ADSのプロジェクト(Schematic、Layoutなどを含む)は上位互換です。ただし、一度ADS 2003C で開いてしまったプロジェクトは以前のADS (ADS 2002C / 2003A)などでは開くことができません。このため、アップデートを行う前に使用しているプロジェクトのバックアップをとることを強くお勧めいたします。

また、ADS 2003C を起動するにはインストール後、ライセンスの設定が必要です。ADS 2003A / 2003C からは、新しいライセンスが必要になり、ADS 2002C / 2002 / 2001 / 1.5 / 1.3 / 1.1 / 1.01 のライセンスでは起動できません。ライセンスについては以下の項目に示してありますので、こちらも必ずご覧ください。

■ 第4章 ライセンスの設定

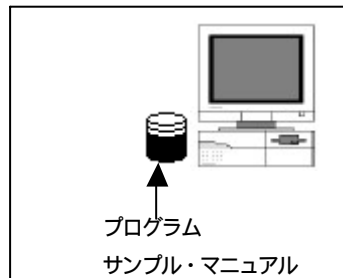
3- 2 ローカル/ネットワークインストール

(1) ローカルインストールとネットワークインストール

ADS 2003C ファイルセットのインストール方法には大きく分けて、二種類の方法があります。ハードディスクに余裕が無い場合以外は、通常の方法(ローカルインストール)を選びます。

■ ローカルインストール (図A)

通常のインストール方法で、CD-ROM から使用するマシンのハードディスクに全てのファイルセットをコピーします。



図A：ローカルインストール

■ ネットワークインストール

注意 ネットワークインストールの場合、サーバマシンが動いており、かつサーバマシンの ADS 2003C のインストールされているハードディスクが、クライアントマシンから共有接続できなければ、クライアントマシンで ADS を起動することはできません。
また、共有ドライブを一度切断した場合は、次の時も同じドライブ名に同じ共有を復元する必要があります。

注意 ネットワークインストールの場合、共有するフォルダは ADS のインストールフォルダの親(ひとつ上の階層)フォルダで共有することを推奨しています。ADS のインストールフォルダを共有した場合には、データディスプレイにて問題が起こる可能性があります。

注意 ネットワークインストールを行う時は、サーバマシンのインストールでコンポーネントを選択する時に“LAN Server files for Clients”を必ずインストールしておいて下さい。

注意 ネットワークサーバ/クライアントシステムは、ライセンスサーバ/クライアントシステムとは関係ありません。

ネットワークインストールは二つの方法があり、ご使用になっているコンピュータの使用環境によって選択することが出来ます。

二つの方法とは、部分的ネットワークインストールと、完全ネットワークインストールです。

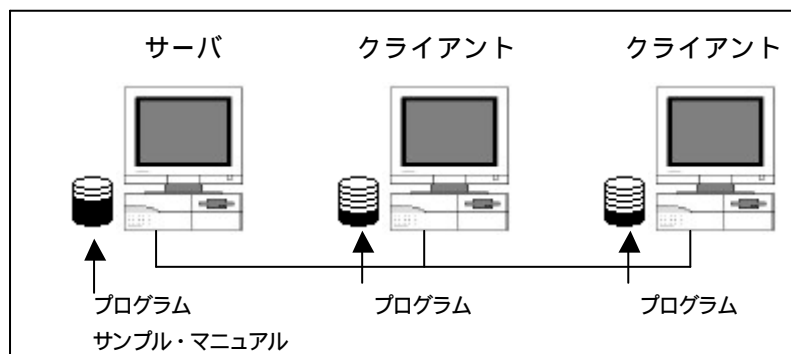
以下の表で違いを示します。次ページには詳しい特徴を述べます。

インストール方法		サーバ	クライアント	特徴
ネットワークインストール	部分的	約3.0GB	約350MB	実行速度は速い。クライアントのディスク容量の節約が出来る
	完全	約3.0GB	約10MB	実行速度が遅い。クライアントのディスク使用容量が最小

□ 部分的ネットワークインストール(推奨)

マニュアルとライブラリのみサーバマシンのものを利用し、プログラムファイルは全てのマシンにインストールする方法です。

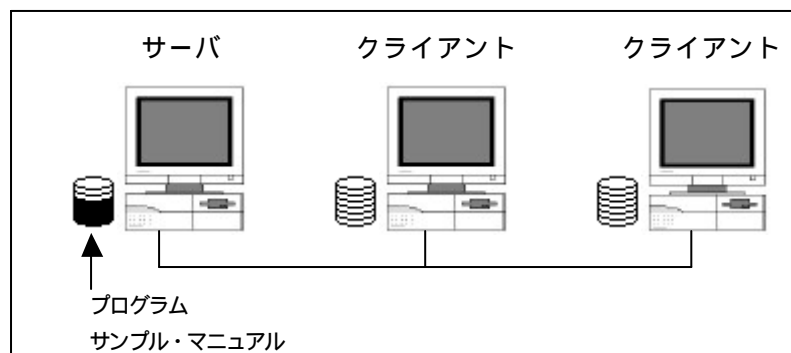
プログラムファイル等の頻繁に使用するファイル群は、ローカルディスクにインストールされています。



□ 完全ネットワークインストール

全てのファイルセットをサーバマシン一台から利用する方法です。

この場合、ADS 2003C の処理速度が非常に遅くなってしまいますので、ディスクの容量不足でインストールができない時以外は、お勧めできません。



ネットワークインストールの実際の手順については、以下の項目をご覧ください。

■ 3 - 5 ネットワークインストール

3- 3 セットアップの起動

(1) セットアッププログラムでの操作

セットアップをはじめる前に、セットアッププログラムと、ダイアログボックス中で行える共通の操作を以下に示します。



前の画面に戻る 次の画面に進む インストールの中止

■ インストールを中止するには

ダイアログボックス上の [Cancel] ボタンをクリックしてください。ダイアログボックスは、インストールを再び始めるかセットアップを中止するか聞いてきます。セットアップの中止を選ぶとプログラムはインストールされません。

■ ひとつ前のセットアップスクリーンやダイアログボックスに戻るには

ダイアログボックス上の [Back] をクリックしてください。

■ 次のセットアップスクリーンに進むには

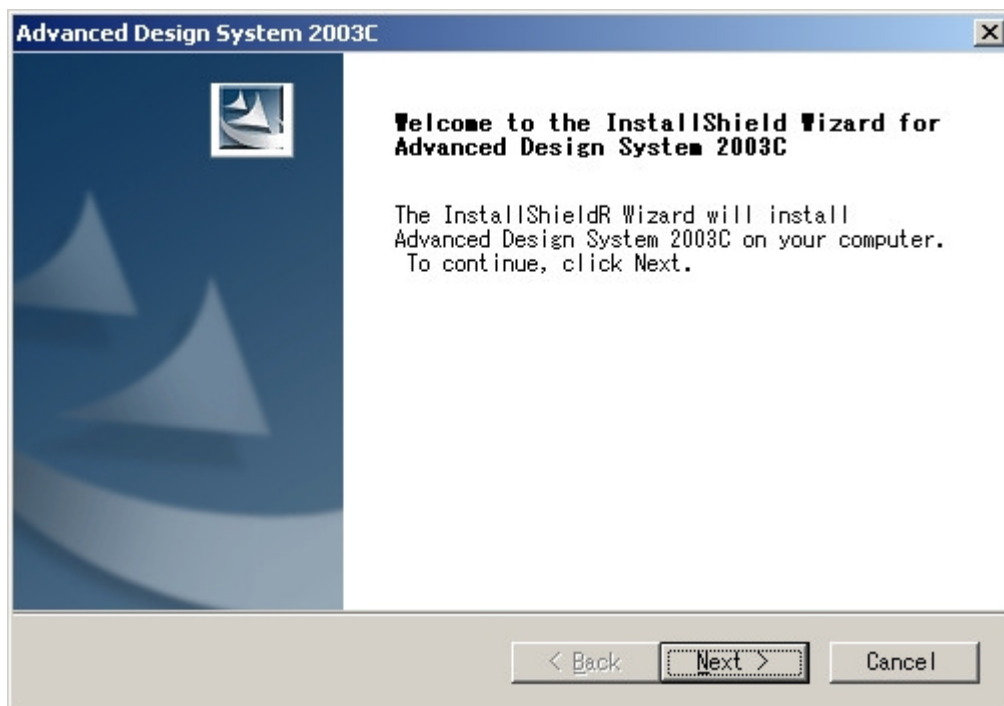
1. 選択を要求されている場合は、目的のボタンをクリックします。
2. ダイアログボックスの [Next] をクリックしてください。

(2) セットアッププログラムの起動

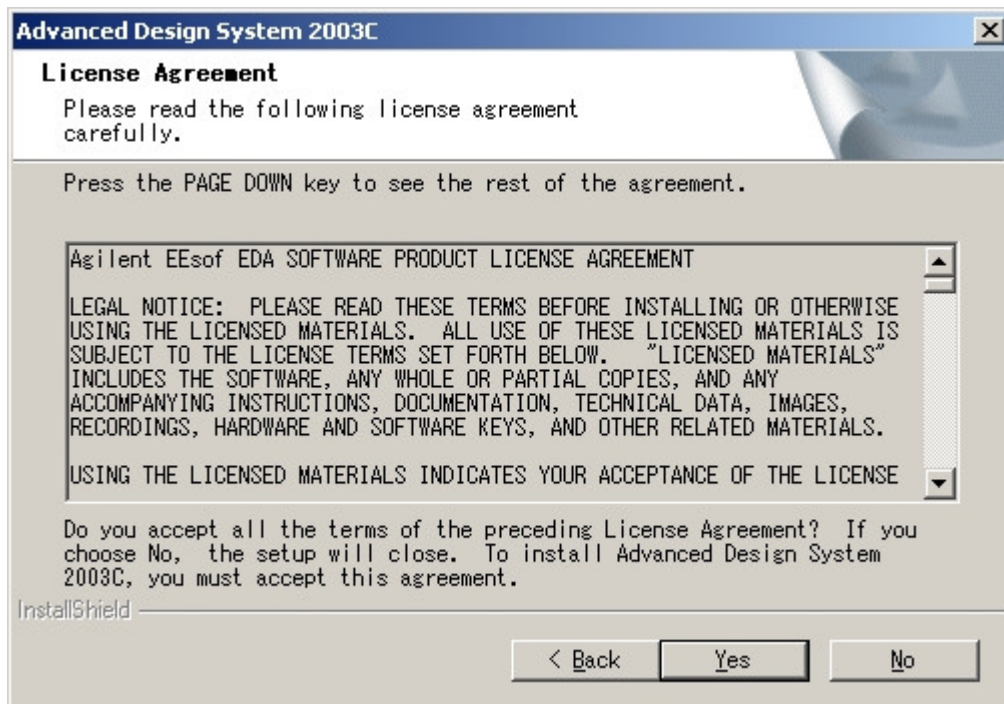
セットアッププログラムを起動します。PC版のセットアッププログラムは、ADS 2003C PC Setup Program Disk 1 に収録されています。

セットアッププログラムは、CD-ROM をドライブに挿入すると自動的に起動するようになっています。オートラン機能を停止しているなどの理由で自動的に起動しない場合は、CD-ROM ドライブのルートディレクトリにある “setup.exe” を実行することによって起動できます。次の説明は起動方法の一例です。セットアッププログラムの起動はどのような方法で行っても構いません。

1. コンピュータ上で動作しているアプリケーションプログラムを全て終了させます。
2. ADS 2003C PC Setup Program Disk 1 (P/N E8900-10215) を CD-ROM ドライブに挿入します。しばらくすると、セットアッププログラムが自動的に起動しますので、5. の手順に進みます。自動的に起動しない場合は、以下の 3. 4. の手順で起動させます。
3. セットアッププログラムを起動します。ここでは、ファイル名を指定して実行を行います。スタートボタンから、[スタート] > [ファイル名を指定して実行] を選択します。
4. セットアッププログラム名を入力します。CD-ROM のドライブ名が “D:” の時は、“D:¥setup.exe” と入力します。
5. ウェルカムボックスが現れますので、[NEXT>] をクリックして先に進みます。



(3) ライセンス使用許諾の確認

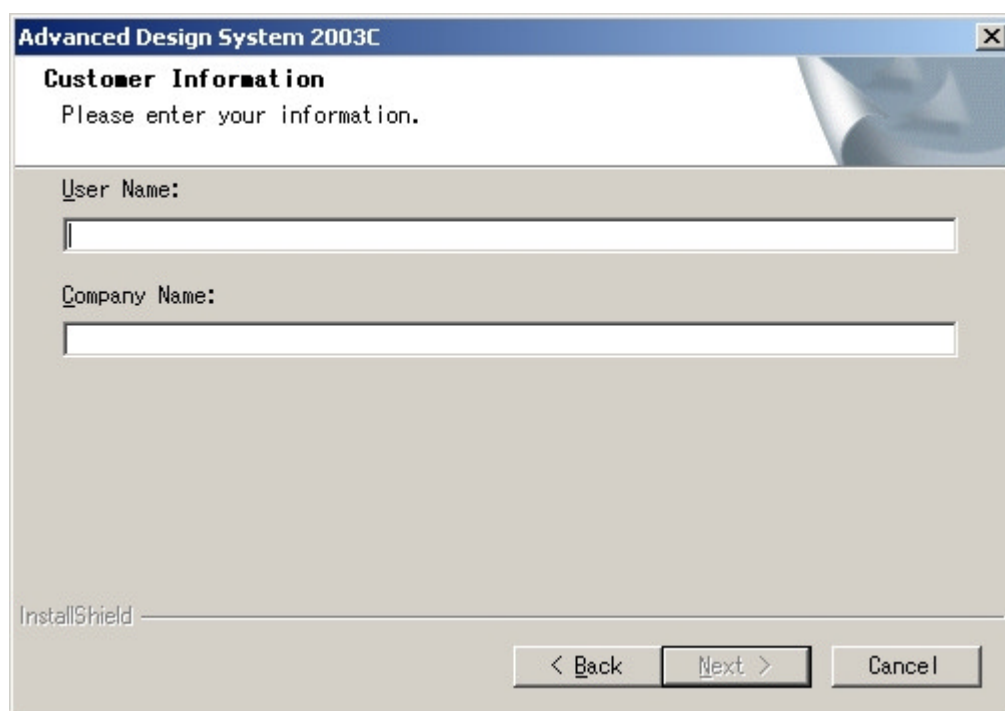


[License Agreement] ボックスが現れます。必ずよく読み、同意できる場合のみ[Yes]をクリックしてください。また、このライセンス使用許諾書は ADS を起動するために必要であるライセンス(コードワード)とは、関係がありません。ライセンス使用許諾ボックスは最初にインストールを行うときと、ADS のアンインストールを行った後再びインストールする際にのみ現れます。

(4) 登録情報入力

セットアップを起動したら、登録情報の入力を行います。ただし、登録情報の設定画面は最初にインストールを行う時のみしか現れません。

1. 登録情報ボックスが現れます。

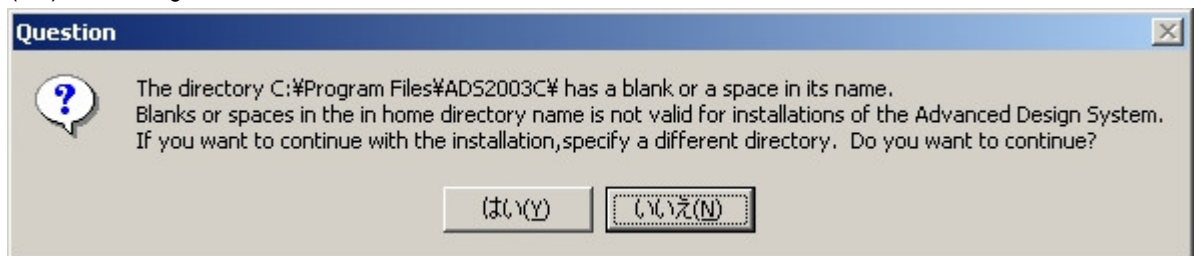


2. ユーザ名と会社名を入力し [Next>] をクリックします。ここでの入力はライセンス等の情報と関係はありません。お好きな名前やイニシャルなどを入力してください。
3. 入力確認のためのボックスが現れます。間違いがなければ [Yes] をクリックします。間違いがあり、訂正したいときは [No] をクリックし、もう一度やり直します。

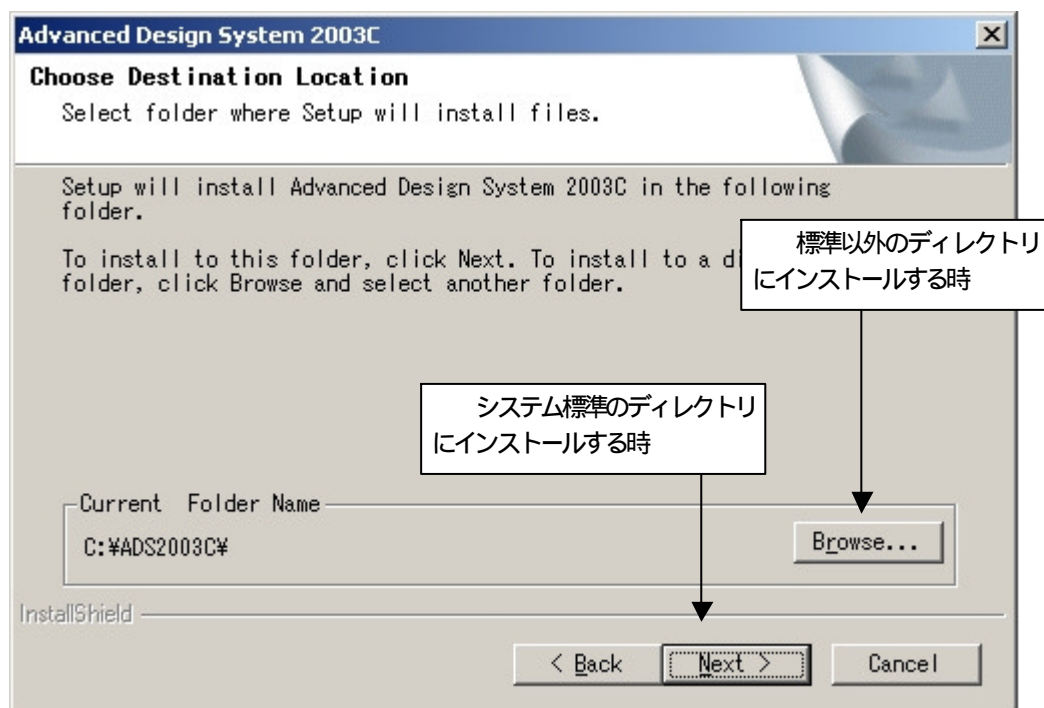
(5) インストールディレクトリの指定

[Choose Destination Location] ボックスが現れます。ここでは、ファイルセットのインストール先を指定します。

注意 インストールディレクトリのパスには日本語やスペースが含まれないようにご注意ください。日本語やスペースが含まれている場合には、ADS 2003C が正しく動作しません。
(例) 「C:¥Program Files¥ADS2003C」など



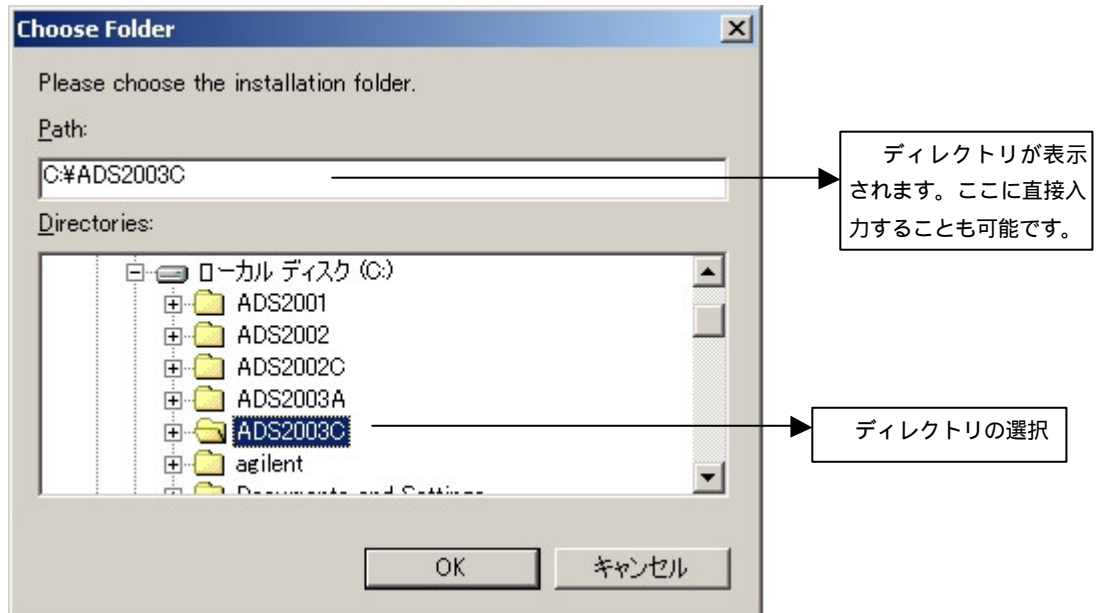
- 1) インストール先のディレクトリを決定します。[Destination Directory] に正しいインストール先が表示されていれば [Next >] をクリックしてください。システム標準ディレクトリにインストールする場合はそのまま [Next >] をクリックします。



システム標準のディレクトリに、ADS 2003C をインストールする時は、そのまま [Next >] をクリックします。標準ディレクトリは “C:¥ADS2003C” です。

それ以外のディレクトリ(すでに存在するディレクトリ・新規ディレクトリ・ネットワークドライブ)にインストールするには、[Browse] をクリックします。[Choose Directory] ダイアログボックスが現れます。なお、ADS 2003C 以前のADSが存在している場合には、そのインストールディレクトリにADS 2003C をインストールしないようにご注意ください。

- 2) 標準以外のディレクトリにインストールする場合の手順は以下のようになります。



[Directories:] フィールドのスクロールバーを用いて、インストールしたいディレクトリを探し、ディレクトリ名をクリックして選択します。

[Path:] フィールドに目的のパス名が現れたら [OK] をクリックします。(もしディレクトリが無い時は、ここにディレクトリ名をキーボードで直接入力してください。その場合ディレクトリは新しく作られます。)

指定したパスがハードディスク上に存在しない時は、自動的にディレクトリが作成されます。このとき確認メッセージ等はでてきませんのでご注意ください。

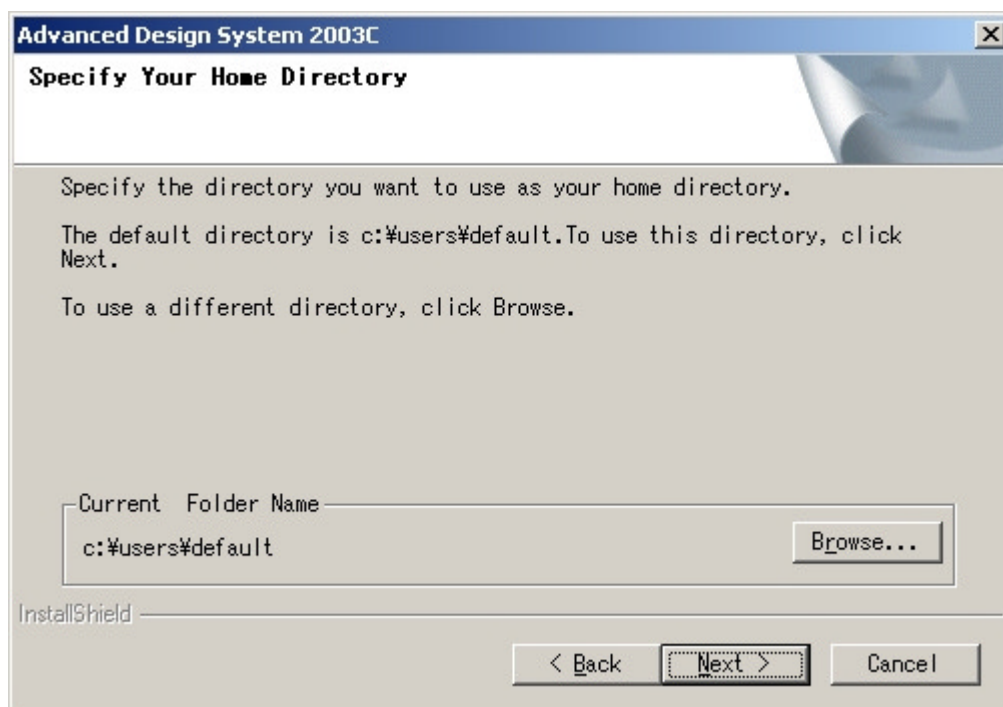
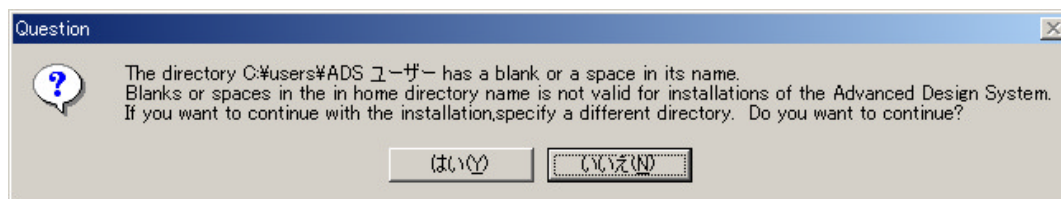
(6) ホームディレクトリの指定

次に、ホームディレクトリを指定するために、[Specify Your Home Directory] ボックスが現れます。ホームディレクトリとは、ADS 2003C の設定データを、ユーザ毎に個別に保存するためのディレクトリです。それぞれのユーザが設定したデータはそれぞれホームディレクトリ内の異なるディレクトリに保存されます

システム標準のホームディレクトリとして、“C:\users\default” が表示されています。ここでも、インストール先のディレクトリを指定した時と同じように、ホームディレクトリを指定することができます。[Browse] ボタン等の使い方については、(4)を参照してください。異なるバージョンのADSを使用する場合には、このホームディレクトリを各バージョンごとに作成してください。

注意 ホームディレクトリのパスには、インストールディレクトリのパスと同様、日本語やスペースが含まれないようにご注意ください。日本語やスペースが含まれている場合には、ADS 2003C が正しく動作しません。

(例) 「C:\users\ADS ユーザー」など



ホームディレクトリをシステム標準に戻す場合や、任意のディレクトリに設定するには、 [< Back] で一つ前に戻って、もう一度手順を繰り返します。

[Next >] をクリックすると、ハードディスクの残り容量の計算が行われ、インストールファイルセットの選択画面に進みます。

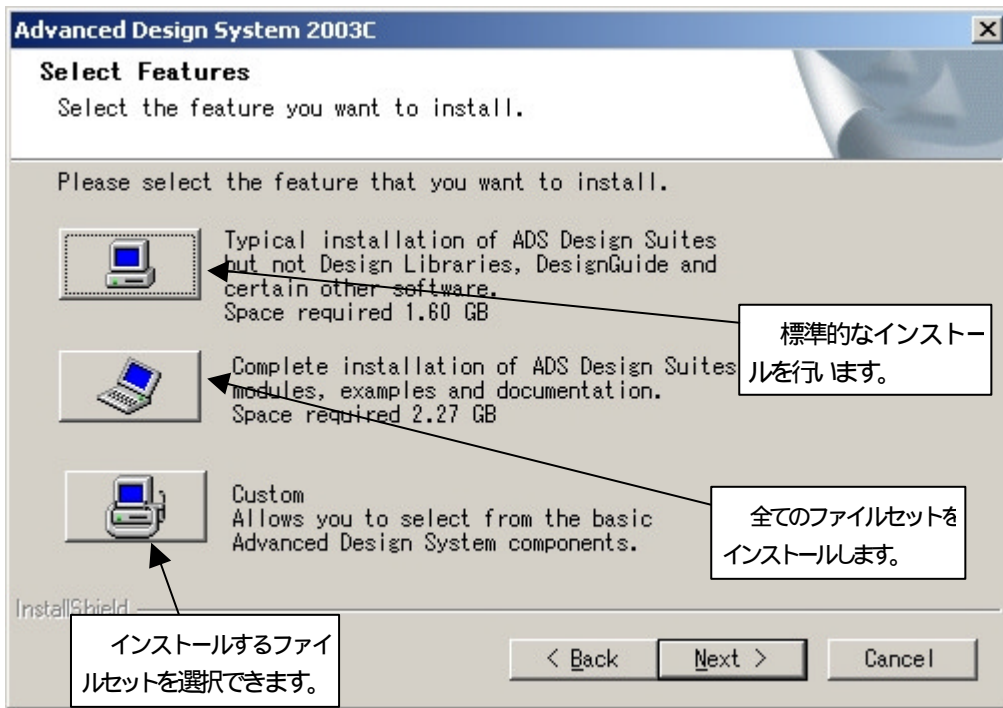
注意 ホームディレクトリには、ネットワークドライブを指定しないことをお勧めします。ネットワークドライブを指定した場合は、ADS 2003C の動作が極端に遅くなる場合があります。

3- 4 インストール作業

(1) インストール方法の選択

[Select Features] ダイアログボックスで、インストール方法の選択を行います。

ここではインストール方法を三つの中から選ぶことができます。



Typical installation of ADS Design Suites

ADS 本体, Momentum electromagnetic simulator, Digital Filter Designer, Vendor Component Libraries などの重要なモジュール群, サンプルファイル, ドキュメントファイルがインストールされます。約 1.60GB 必要です。

インストールされるファイルセットの種類は、(3) 表3-1 を参照してください。

Complete installation of ADS Design Suites

ADS 2003C の全てのファイルセットをインストールします。

約 2.27GB 必要です。

Custom

インストールするファイルセットを自由に選択することができます。

こちらを選んだ場合は、(2)のインストールファイルセットの選択に進んでください。

インストールできるファイルセットの種類は、(3) 表3-2 を参照してください。

注意 どのファイルセットもインストールすることはできませんが、ライセンスをご購入いただいた製品しか使用することはできません。

(2) ファイルセットの選択 (Custom インストールの場合のみ)

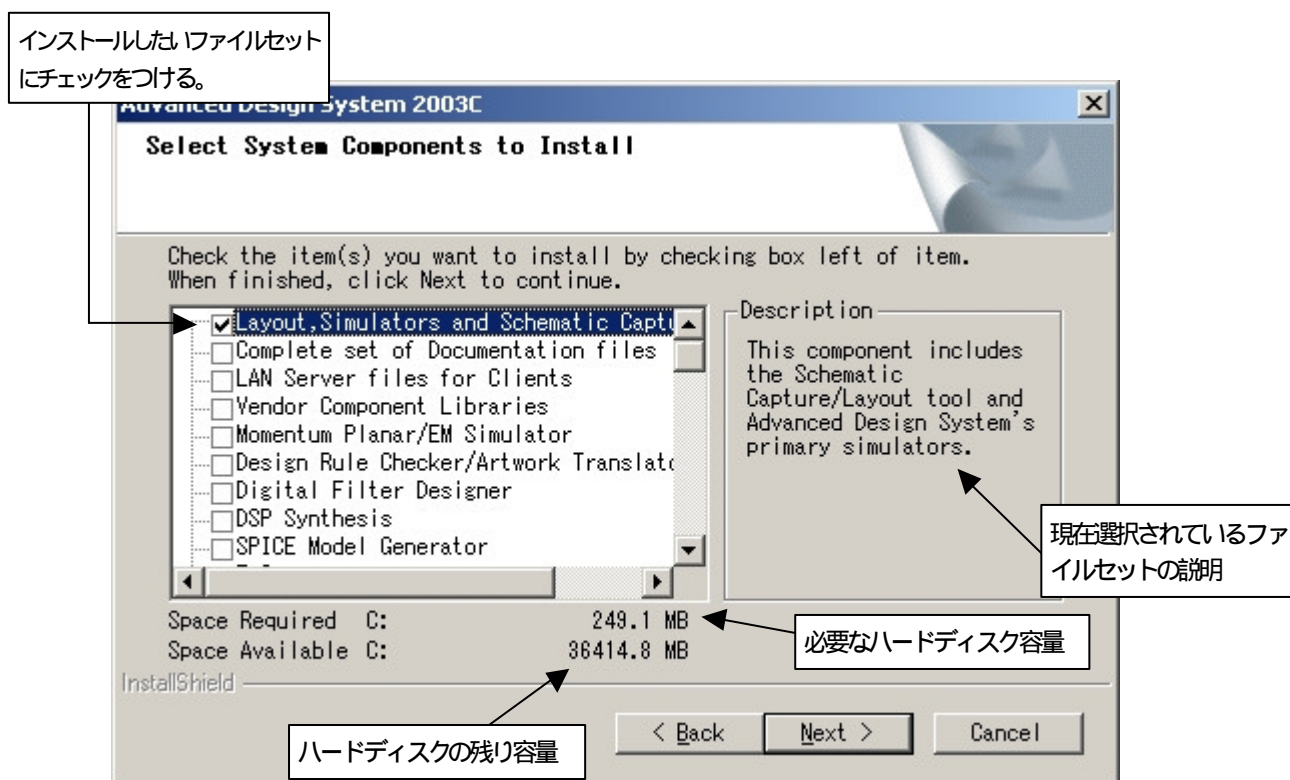
(1) で、Custom を選ぶと、[Select System Components to Install] ダイアログボックスが現れます。

[File Set] フィールドに、チェックボックス・ファイルセット名の順に表記されていますので、この中から必要な全てのファイルセットのチェックボックスをチェックします。(3) 節で各コンポーネントの簡単な説明をします。

[Description] エリアには、[File Set] で選択(色が反転)しているファイルセットの簡単な説明が表示されます。

ダイアログボックス下部には、チェック済みのコンポーネントの使用ディスク容量の合計 [Space Required] と、インストール先のディスクの残り容量 [Space Available] が表示されています。

チェックが全て終了したら、[Next>] をクリックして次に進みます。



注意 “Layout, Simulators and Schematic Capture” がインストールされていない場合は、ADS 2003C を起動することができません。FLEXlm ライセンスサーバのみをインストールしたい場合など特別な場合でなければ、このファイルセットは必ずインストールしてください。

注意 オンラインマニュアル、ヘルプ、サーチエンジンを含んだドキュメントはハードディスクにインストールされます。オンラインマニュアルとヘルプはインストールされているコンポーネントと関連付けられています。インストールされているコンポーネントの数により異なりますが、最大560.3MBの空き容量が必要となります。また、ADS 2003C はHTMLベースのドキュメントを使用しているため、表示するためにウェブブラウザ (Netscape version4.5以上、Microsoft Internet Explore version4.0以上) を必要とします。

(3) コンポーネントの種類

Typical Installation でインストールされるファイルセット(表3-1)

ファイルセット	概要	サイズ
Layout, Simulators and Schematic Capture	ADS の基本コンポーネント。Design Environment, Data Display, Analog/RF Systems, Signal Processing simulator が含まれます	249.1 MB
Complete set of Document Files	ADS 2003C オンラインマニュアルと、検索ツールです。HTML でかかれていますので閲覧するためには WEB ブラウザが必要になります	527.6 MB
Design Rule Checker/Artwork Translators	レイアウトや MTOOLS(Gerber, DXF), IGES, GDSII などの正当性をチェックするツール	11.6 MB
Digital Filter Designer	ユーザの要求仕様に見合った広帯域 FIR, IIR フィルタを合成	4.3 MB
DSP Synthesis	DSP デザインを ASIC, FPGA にも適用させます	27.8 MB
E-Syn	集中定数, 分布定数を用いてフィルタを合成	1.1 MB
LineCalc	伝送線路の計算ツール	1.6 MB
FLEXIm license files	FLEXIm ライセンス管理ソフトウェアです。このコンポーネントのみを選ぶことにより、ライセンスサーバにFLEXIm ファイルセットのみをインストールする事もできます	0.8 MB
Momentum Planar EM Simulator	Momentum Planar EM シミュレータ	88.4 MB
Series IV and MDS to ADS Translators	Series IV, MDS から ADS へのプロジェクト変換ツール	11.9 MB
SPICE Model Generator	S-パラメータデータから、SPICE モデルへの変換ツール	0.3 MB
Vendor Component Libraries	RF Transistor Library や Analog Parts Library などの部品関係のライブラリ	160 MB
Examples	ADS のサンプルプロジェクト	598.4 MB

Custom Installation で選択できるファイルセット(表3-2)

ファイルセット	概要	サイズ
Layout, Simulators and Schematic Capture	ADS の基本コンポーネント。Design Environment, Data Display, Analog/RF Systems, Signal Processing simulator が含まれます	249.1 MB
Complete set of Document Files	ADS 2003C オンラインマニュアルと、検索ツールです。HTML でかかれていますので閲覧するためには WEB ブラウザが必要になります	527.6 MB
LAN Server Files for Clients	ネットワークインストールするために必要なファイルです。ネットワークインストールする場合には、必ず選択してください	502.6 MB
Vendor Component Libraries	RF Transistor Library や Analog Parts Library などの部品関係のライブラリ	160.0 MB
Momentum Planar EM Simulator	Momentum Planar EM シミュレータ	88.4 MB

Design Rule Checker/Artwork Translators	レイアウトや MTOOLS(Gerber, DXF), IGES, GDSII などの正当性をチェックするツール	11.6 MB
Digital Filter Designer	ユーザの要求仕様に見合った広帯域 FIR, IIR フィルタを合成	4.3 MB
DSP Synthesis	DSP デザインを ASIC, FPGA にも適用させます	27.8 MB
SPICE Model Generator	S-パラメータデータから、SPICE モデルへの変換ツール	0.3 MB
E-Syn	集中定数, 分布定数を用いてフィルタを合成	1.1 MB
LineCalc	伝送線路の計算ツール	1.6 MB
FLEXIm license files	FLEXIm ライセンス管理ソフトウェアです。このコンポーネントのみを選ぶことにより、ライセンスサーバにFLEXIm ファイルセットのみをインストールする事もできます	0.8 MB
RFIC Dynamic Link	Cadence の回路図を ADS でシミュレーションするためのフレームワーク	0.3 MB
Series IV and MDS to ADS Translator	Series IV, MDS から ADS へのプロジェクト変換ツール	11.9 MB
HDL Cosimulation	HDLシミュレータとPtolemyのコシミュレーション・インターフェース	0.7 MB
Agilent VEE Link	測定ソフトウェア VEE とのリンク・インターフェース	0.9 MB
ISS Cosimulation	ISSシミュレータとPtolemyのコシミュレーション・インターフェース	1.2 MB
Design Libraries	Design Libraries デザインライブラリの一括選択	473.5 MB
	cdma2000-Compliant Design Library TIA/IS-2000 スタンダードに準拠した、ビヘイビアモデルのデザインライブラリ	45.7 MB
	TD-SCDMA Design Library TD-SCDMA用デザインライブラリ	48.9 MB
	Digital TV Design Library 日本方式 (ISDB-T)と欧州方式 (DVB-T)用のデジタルTV用ライブラリ	47.3 MB
	CDMA Design Library IS-95用デザインライブラリ	38.3 MB
	GSM Design Library GSM用デザインライブラリ	35.8 MB
	3GPP W-CDMA Design Library W-CDMA用デザインライブラリ	132.2 MB
	EDGE Design Library EDGE用デザインライブラリ	19.0 MB
	WLAN Design Library IEEE802.11a/b用デザインライブラリ	81.3 MB
	1xEV Design Library 1xEV DO用デザインライブラリ	24.9 MB
Design Guides	Design Guides デザインガイドの一括選択	461.8MB
	Linearizer Design Guide リニアライザ・デザインガイド	84.6 MB
	Oscillator Design Guide 発振器デザインガイド	21.3 MB
	Passive Circuit Design Guide パッシブ回路デザインガイド	5.6 MB
	Phase-Locked Loop Design Guide PLLデザインガイド	32.6 MB
	Amplifier Design Guide パワーアンプ・デザインガイド	43.3 MB

Design Guides	Ultra Wideband Design Guide UWBデザインガイド	44.1 MB
	Bluetooth Design Guide Bluetoothデザインガイド	40.1 MB
	CDMA2k Design Guide CDMA2000デザインガイド	29.4 MB
	Mixer Design Guide ミキサ・デザインガイド	28.4 MB
	RF System Design Guide システム設計デザインガイド	117.2 MB
	Filter Design Guide 集中定数のフィルタ・デザインガイド	2.4 MB
	Design Guide Developer Studio カスタム Design Guide を作成するためのツールセット	12.8 MB
Application Guides	Application Guides アプリケーションガイドの一括選択	338.3 MB
	Analog/Digital Converters Application Guide A/D、D/Aコンバータ・アプリケーションガイド	84.6 MB
	RADAR Application Guide レーダー・アプリケーションガイド	84.6 MB
	Loadpull Application Guide ロードプル・アプリケーションガイド	84.6 MB
	Wireline Application Guide ワイヤライン・アプリケーションガイド	84.6 MB
Examples	The complete set of Example files サーチエンジンを含むすべての Example 一括選択	598.4 MB
	Communications System Examples コミュニケーション・システム関連の Example	88.9 MB
	Digital Signal Processing Examples DSP 関連の Example	8.0 MB
	Microwave Circuit Examples マイクロ波回路関連の Example	75.2 MB
	Momentum Examples Momentum 関連の Example	138.5 MB
	RFIC Examples RFIC 関連の Example	27.1 MB
	RF Board Examples 高周波基板関連の Example	56.7 MB
	Tutorial Examples ADS の基本的な使い方などの Example	62.7 MB
	Behavioral Models Examples ビヘイビア(システム)モデルを用いた Example	62.7 MB
	Training Examples トレーニング用の Example	78.5 MB

“LAN Server Files for Clients” は、ネットワークインストールを行うためのファイルセットです。現在インストール中のコンピュータをネットワークインストール・サーバにする場合は、このコンポーネントを必ず選択してください。
ネットワークサーバ/クライアントインストールの概要については、3 - 2 節 「ローカル/ネットワークインストール」を参照してください。

(4) ADS 2003C を使用するユーザ範囲の指定

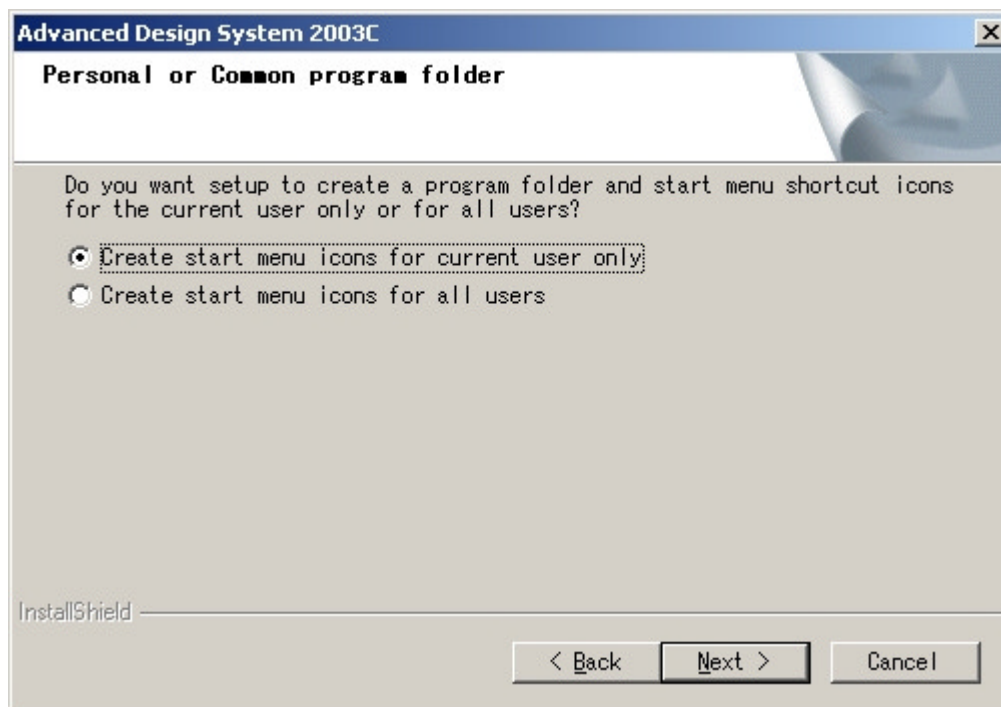
[Personal or Common program folder] ダイアログボックスが現れます。ここでは、ADS 2003C のプログラムフォルダとショートカットアイコンを作るユーザを、インストールを実行するユーザのみか、その PC を使用するの全てのユーザかを指定します。

■ Create start menu icons for current user only

現在インストール作業を行っているユーザのみ、ADS 2003C のプロジェクトフォルダとショートカットアイコンを作成します。

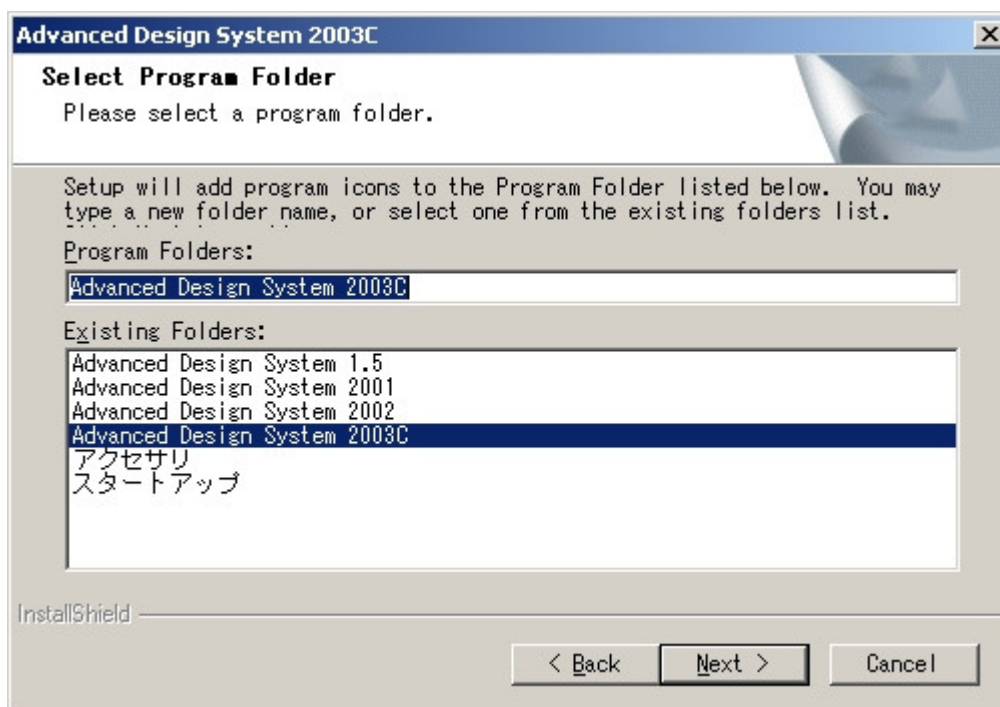
■ Create start menu icons for all users

こちらを選択した場合、そのコンピュータ上のどのユーザにもADS 2003C のプロジェクトフォルダとショートカットアイコンを作成します。ただし、こちらを選ぶにはコンピュータの「管理者権限のあるユーザ」(Administrator など)で行う必要があります。



(5) プログラムフォルダの指定

Typical インストールまたは、Complete インストールを選択した場合、Custom インストールで “Layout, Simulators and Schematic Capture” をチェックした場合は、[Select Program Folder] ダイアログボックスが現れます。ここでは、ADS 2003C プログラムの起動メニューが作成されるフォルダ名を指定します。

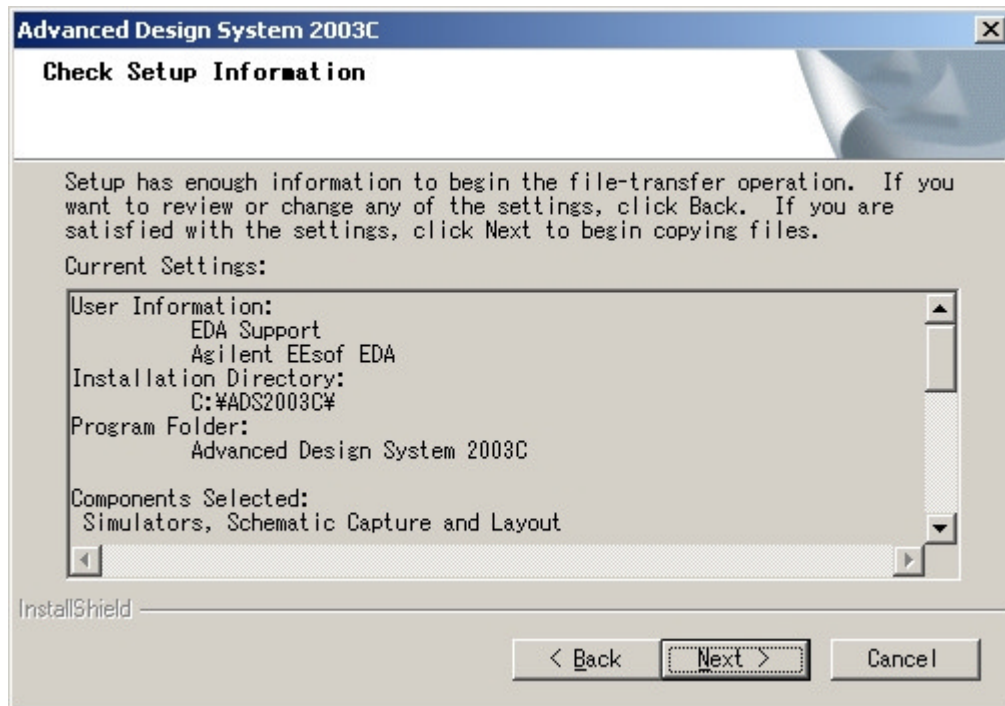


上図の場合は、[スタート] > [プログラム] > [Advanced Design System 2003C] フォルダにアプリケーションのショートカットが作成されることとなります。

[Existing Folders:]欄には、既にプログラムフォルダに入っているショートカットメニューの一覧が出ています。

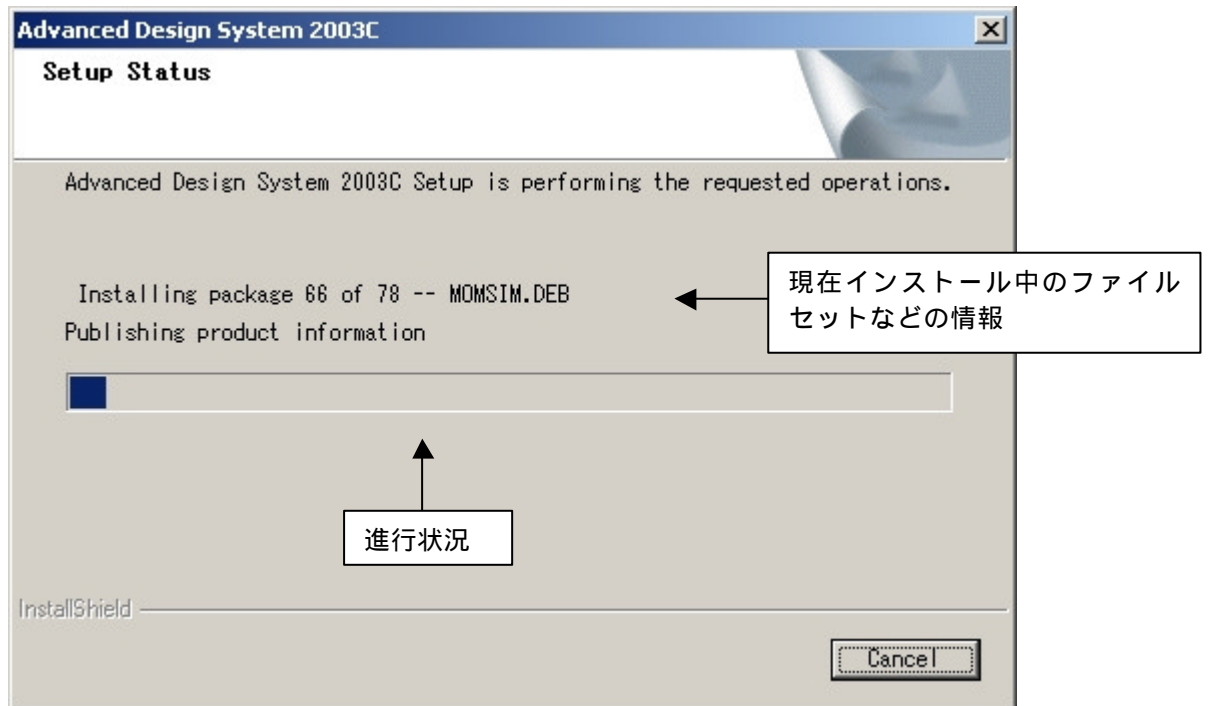
(6) セットアップ情報の確認

コンポーネントの選択が終わると、[Check Setup Information]ダイアログボックスが現れます。ここでは、セットアップ情報の確認を行います。問題が無ければ、[Next>] ボタンをクリックして、インストールを開始します。



(7) インストール作業の開始

以上が終わるとインストールが始まります。[Setup Status] ダイアログが現れ、インストールの進行状態を表示します。(途中、コマンドプロンプトが立ち上がる場面がありますが、これはインストール作業の正しい動作ですので、ウインドウを消したりせずにそのままにしておいてください。)



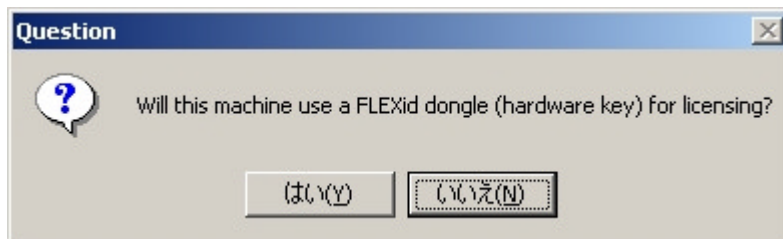
(8) ライセンス取得の注意

ここまでの作業が終わると、最後に [License Required] ボックスが現れます。ここでは ADS 2003C を使用するためには、コードワードファイルを取得する必要がある旨のメッセージが表示されています。内容を確認したら、[OK] をクリックしてください。



(9) FLEXid ドライバのインストール

続いて、FLEXid ドライバのインストール実行に関するダイアログボックスが表示されます。

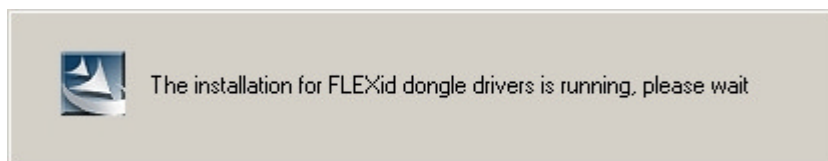


FLEXid ドライバは、ノードロックライセンス製品やライセンスサーバとして使用する場合は、ハードウェアキー(sentinel key, dallas key, USB key)を認識するためのドライバです。

ハードウェアキーを接続する場合は、必ずインストールが必要です。

また、既に以前のバージョンの ADS で FLEXid ドライバを導入済みである場合でも、ADS 2003C 付属ドライバのインストールを推奨いたします。

通常はここで **[はい(Y)]** を選択してください。下記のようなメッセージが表示され、FLEXid ドライバのインストールが自動的に行われます。

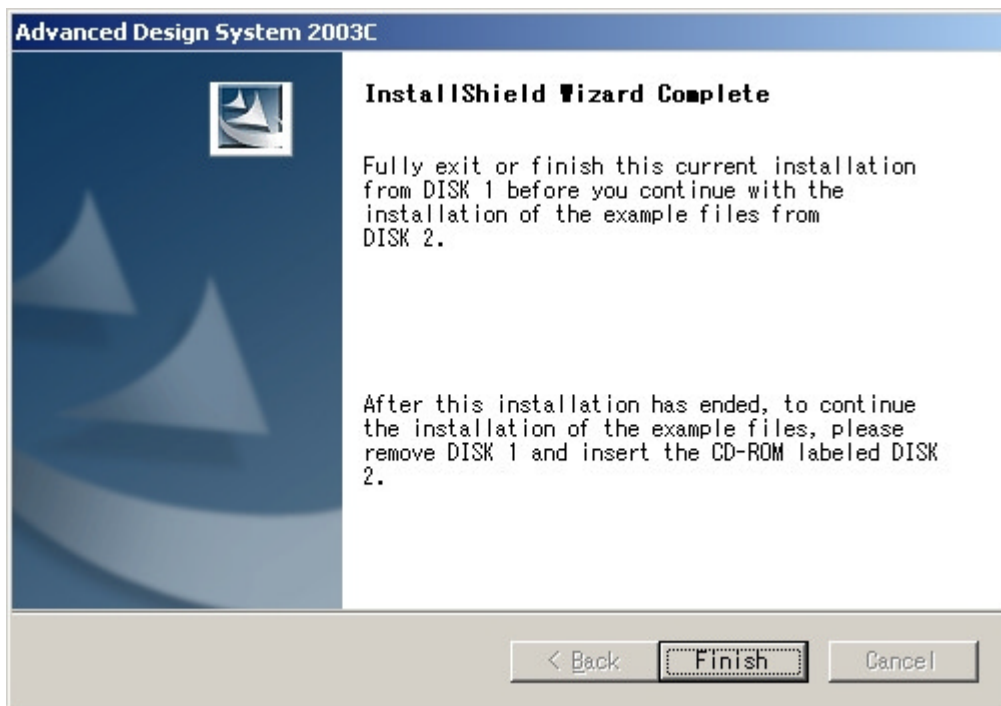


[いいえ(N)] を選んだ場合でも、4 - 4 節「FLEXid ドライバのインストール」の手順で、手動にてインストールする事ができます。

なお、ハードウェアキーの詳細については、4 - 5 節「ハードウェアキーの接続と確認」に掲載しています。

(10) ADS 2003C PC Setup Program Disk1 のインストール作業の終了

すべてのインストールが終わると、[InstallShield Wizard Complete]ダイアログボックスが表示されます。[Finish] をクリックしてください。



最後に下記のダイアログボックスが表示されますので、[OK] をクリックしてください。



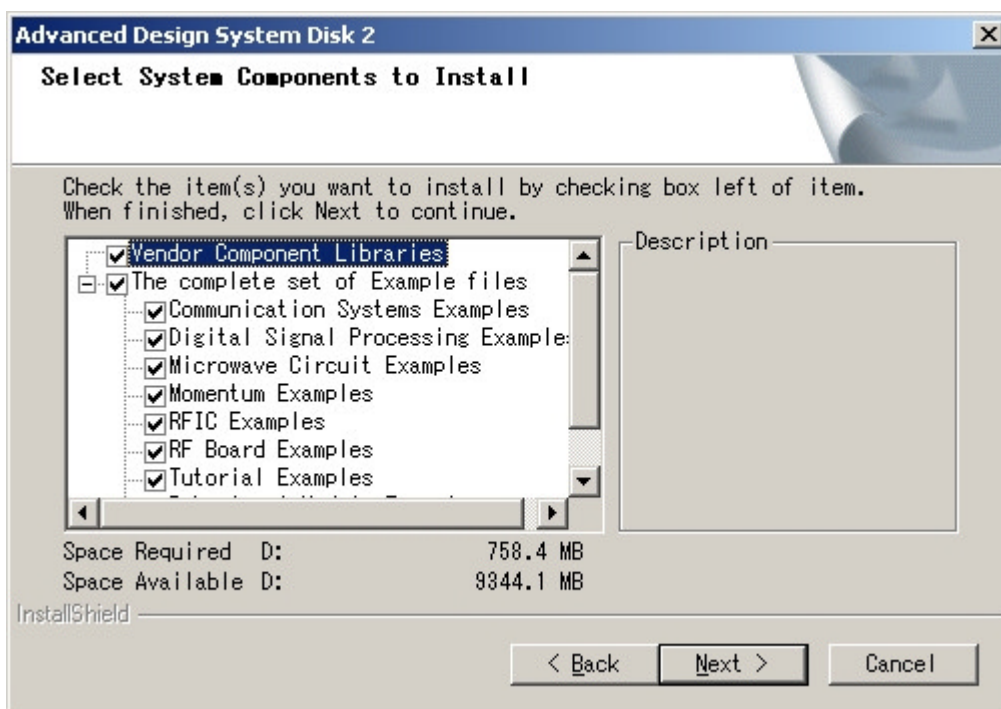
Completeインストールを選択した場合は、続けてADS 2003C PC Setup Program Disk 2 を入れ、Example をインストールします。

Typical、Customを選択した場合は、必要に応じてADS 2003C PC Setup Program Disk 2を入れ Example をインストールしてください。

(11) ADS 2003C PC Setup Program Disk 2 のインストール

ADS 2003C PC Setup Program Disk 2 (P/N E8900-10216) をセットし、セットアッププログラムを起動します。具体的な起動方法は、(2) をご覧ください。

セットアッププログラムが起動すると、[Select System Components to Install]ダイアログが現れますので、インストールしたいExampleファイルセット、および、必要であれば Vendor Components Librariesを選択し、[Next>] をクリックします。

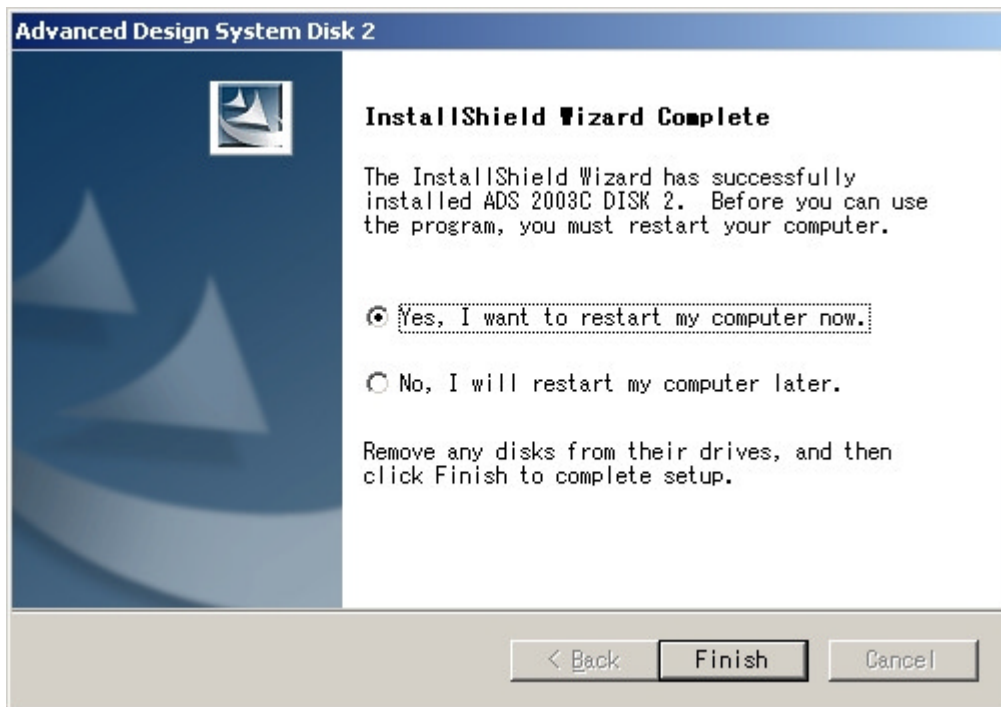


インストールが始まると、Disk1 と同様に [Setup Status] が現れ、インストールの進行状況を表示します。

(12) インストール作業の終了

すべてのインストール作業が終了すると、[InstallShield Wizard Complete] ダイアログが表示されます。

このダイアログボックスでは、コンピュータの再起動を即時行うか、後程手動で実行するかの選択が必要です。通常は再起動を行う (Yes を選択する) ことをお勧めします。



再起動を行う場合は、他の作業中のプログラムは全て終了させてください。

Yes を選択した場合は、[Finish] ボタンを押すとコンピュータの再起動が実行されます。
No を選択した場合は、インストーラが終了します。

- ネットワーク・サーバクライアントシステムを構築する場合
3- 5節「ネットワークインストール」に進んでください。
- インストールを完了する場合
3- 7節「インストール後の注意と手順」に進んでください。

3- 5 ネットワークインストール

ADS 2003C では、ネットワーク・サーバ/クライアントシステムを構築することができます。この場合の、インストール作業について説明します。

注意 どのファイルセットもインストールすることはできますが、ライセンスをご購入いただいた製品しか使用することはできません。

(1) ネットワークインストール サーバの確認

ネットワークインストールのサーバマシンになるには以下の二つの条件が必要となります。

- ADS 2003C がインストールされていて、インストールオプションで “LAN Server files for Clients” ファイルセットが選択されている。

サーバマシンには、ADS 2003C が既にインストールされている必要があります。まだ、インストールが終了していない場合は、3章のはじめに戻って、インストールを行ってください。

注意 “Typical Installation”、または、“Complete Installation” を行った場合、“LAN Server files for Clients” ファイルセットはインストールされていません。3 - 7 節を参考にして、必ず “LAN Servers files for Clients” を追加インストールしてください。

インストールオプションに “Custom Install” を選んだ場合は、インストールするファイルの選択画面で (3- 4 節 (2)参照) で、上から 3 番目のオプション、“LAN Server files for Clients” を必ず選択してください。

このファイルセットをインストールしますと、“<Installation Directory>%setup” (通常は “C:¥ADS2003C¥setup”) ディレクトリに、クライアントマシン用のセットアッププログラムがインストールされます。

- ADS 2003C がインストールされたディレクトリを共有接続することが可能になっている。

ネットワークインストールを行うには、サーバマシン上で ADS 2003C のインストールされているディレクトリが、共有接続可能になっている必要があります。ディレクトリの共有については、8 - 1 節「ファイルシステムの共有」も参照してください。より詳しいことは、お使いになっている Windows OS のヘルプを参照してください。

以上の手順が終了していない場合は、クライアント側へのインストールは実行することができません。サーバ側での、全ての手順を完了させてから、次の節に進んでください。

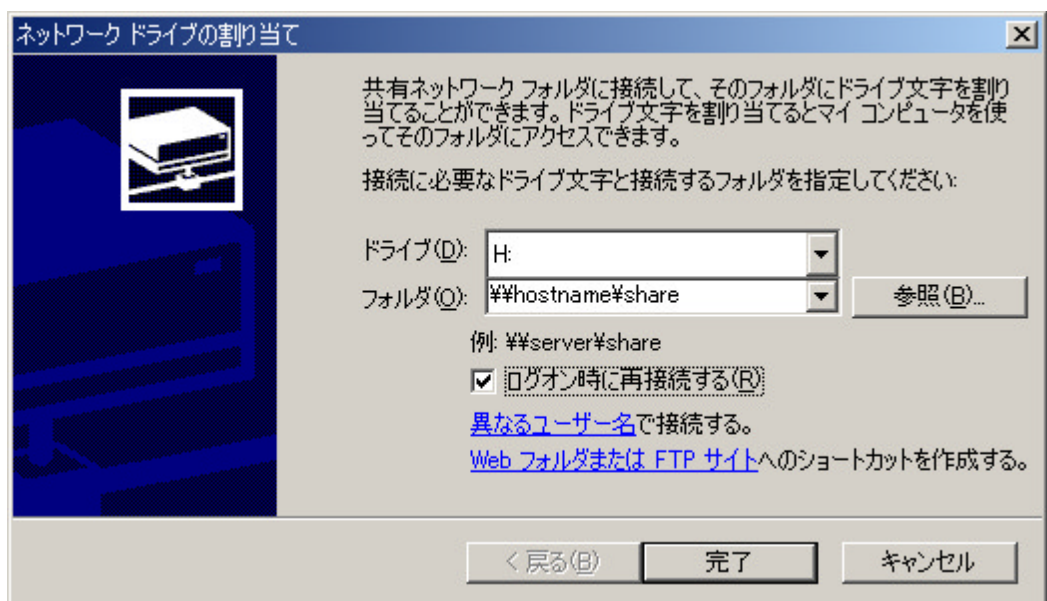
(2) クライアント側のインストール準備

(1) のサーバシステムの構成が終わっていることを確認してください。そしてサーバマシン上の ADS 2003C がインストールされているディレクトリが共有可能になっていることを確認してください。(ディスクの共有についての詳細は 8-1 節を参照してください)

クライアントマシンへのインストールは、サーバマシン上のインストーラ(setup.exe)を用いて行われます。そのため、クライアントマシンから、サーバマシンの共有ディスクへの接続を行います。

■ Windows 2000

[スタート] メニューの [プログラム] > [アクセサリ] > [エクスプローラ] を選択して、エクスプローラを起動します。[ツール] メニューの [ネットワークドライブの割り当て] を選択します。



■ Windows NT 4.0

[スタート] メニューの [プログラム] > [Windows NT エクスプローラ] を選択して、エクスプローラを起動します。[ツール] メニューの [ネットワークドライブの割り当て] を選択します。

■ Windows XP

[スタート] メニューの [すべてのプログラム] > [アクセサリ] > [エクスプローラ] を選択して、エクスプローラを起動します。[ツール] メニューの [ネットワークドライブの割り当て] を選択します。

クライアントマシンで、サーバマシン上の ADS 2003C がインストールされているドライブに接続します。

ここでは、サーバマシンの “D:¥share” ディレクトリ(共有名 “share”)を、クライアントマシンの “F:” ドライブに割り当てたとします。また、サーバマシンには、“D:¥ADS2003C” ディレクトリに ADS 2003C がインストールされているとします。

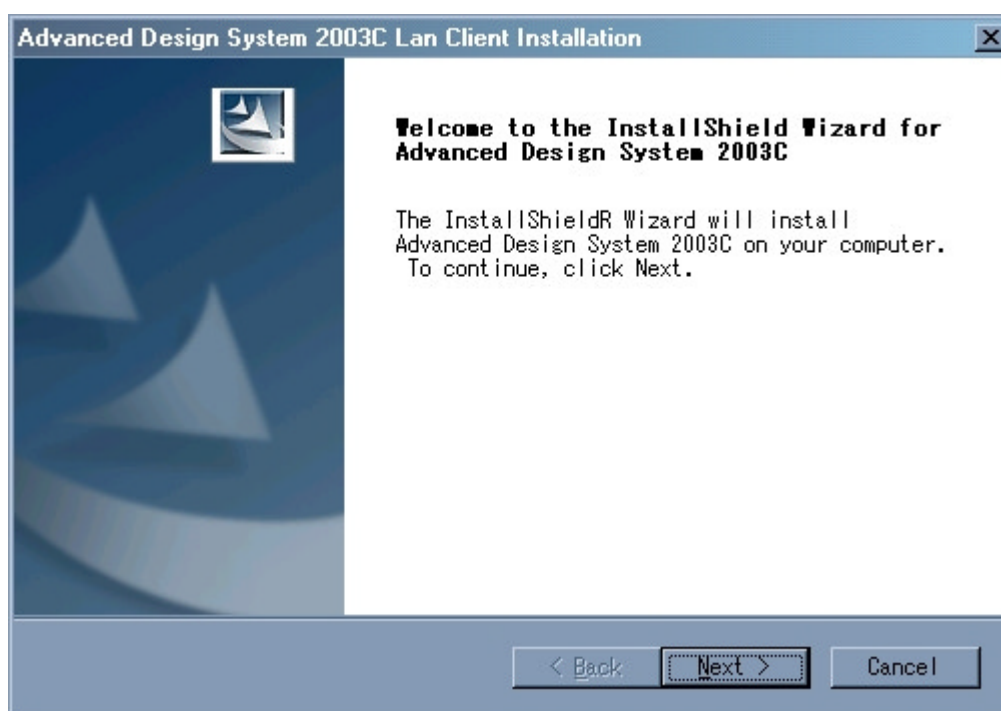
(3) セットアップの起動

クライアントマシンで、接続したドライブの“setup” ディレクトリにある“setup.exe”を実行します。

エクスプローラを起動し、共有ドライブの“¥ADS2003C¥setup” ディレクトリの、“setup.exe”もしくは、“setup”を起動します。

“Advanced Design System 2003C Lan Client Installation というタイトル画面に、“Welcome to the InstallShield Wizard for Advanced Design System 2003C” というウインドウが現れます。

ウェルカムボックスの説明を読んでから、[Next] をクリックして、次に進みます。



(4) ライセンス使用許諾の確認

[License Agreement] ボックスが現れます。必ずよく読み、同意できる場合のみ[Yes]をクリックしてください。また、このライセンス使用許諾書はADSを起動するために必要であるライセンスコードワードとは、関係がありません。

(5) ホームディレクトリの指定

[Specify Your Directory] ボックスが現れ、システム標準のホームディレクトリとして、“C:¥users¥default” 表示されます。ホームディレクトリとは、個々のユーザ毎の設定ファイルを保存するためのディレクトリです。このディレクトリは、クライアント側固有の設定ですので、クライアントPCのローカルディスク上に作成する事をお勧めします。異なるバージョンのADSを使用する場合には、このホームディレクトリを各バージョンごとに作成してください。

注意 ホームディレクトリのパスには、インストールディレクトリのパスと同様、日本語やスペースが含まれないようにご注意ください。日本語やスペースが含まれている場合には、ADS2003C が正しく動作しません。

(例) 「C:¥users¥ADS ユーザー」など

(6) インストール方法の選択

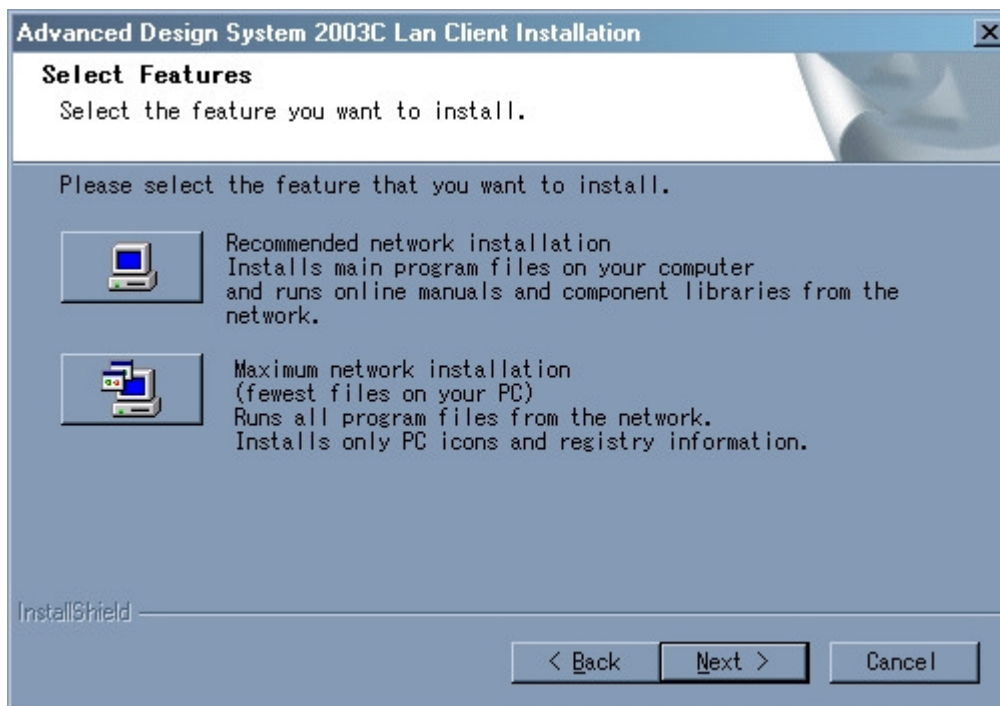
ADS 2003C のネットワークインストールには、二通りの方法があります。

■ Recommend network installation

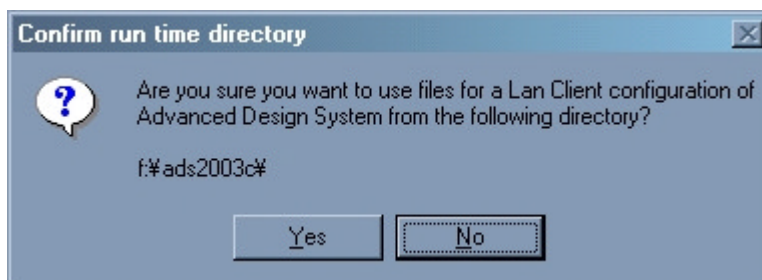
オンラインマニュアル・ライブラリはサーバ上のものを使い、実行形式ファイルは、ローカルのディスクにインストールします。実行形式ファイルがネットワーク上にある場合、プログラムの起動が極端に遅くなる場合がありますので、この問題を回避するために推奨されるインストール方法です。

■ Maximum network installation

アイコンとレジストリエントリの作成のみを行い、ファイルセットは全てサーバ上のものを使用します。ディスク容量はほとんど必要無くなりますが、シミュレータの実行速度が極端に遅くなる場合があります。



インストール方法を選択すると、ネットワークドライブのパスの確認が行われます。



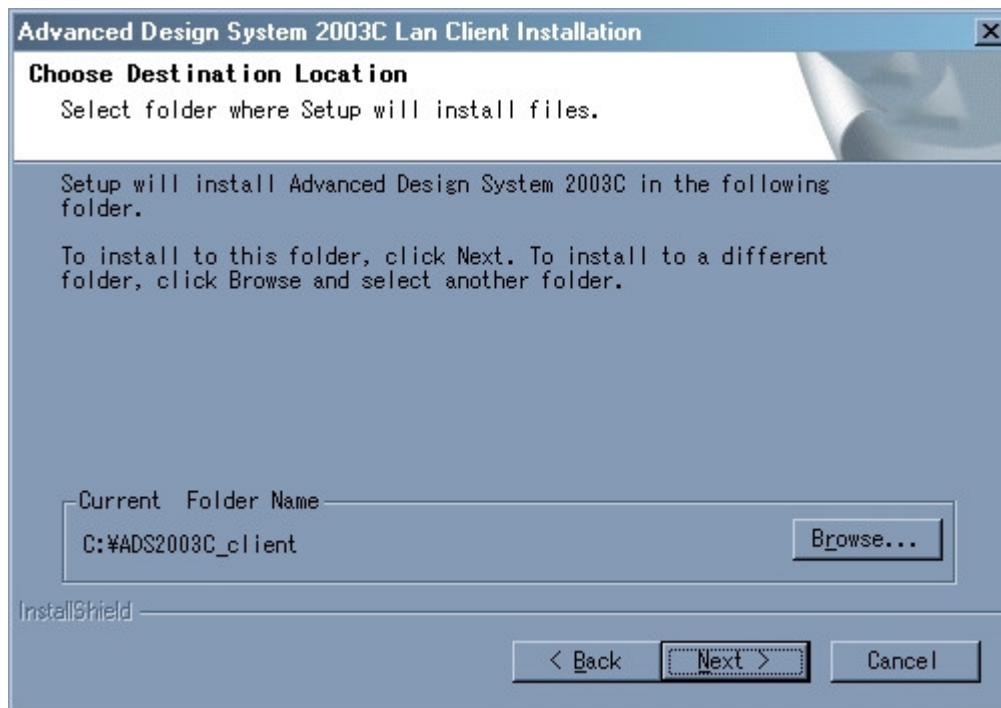
クライアントマシンで ADS 2003C を起動するときは、常にこの共有接続が確立されている必要があります。

このままでよい場合は、[Yes] を押して次に進みます。

パスを変えたい時は、[No] を押して、ネットワークドライブの接続からやり直してください。(セットアッププログラムは終了します。)

(7) インストール先の指定

Recommended network installation を選択した場合は、ファイルセットのインストール先をここで指定します。

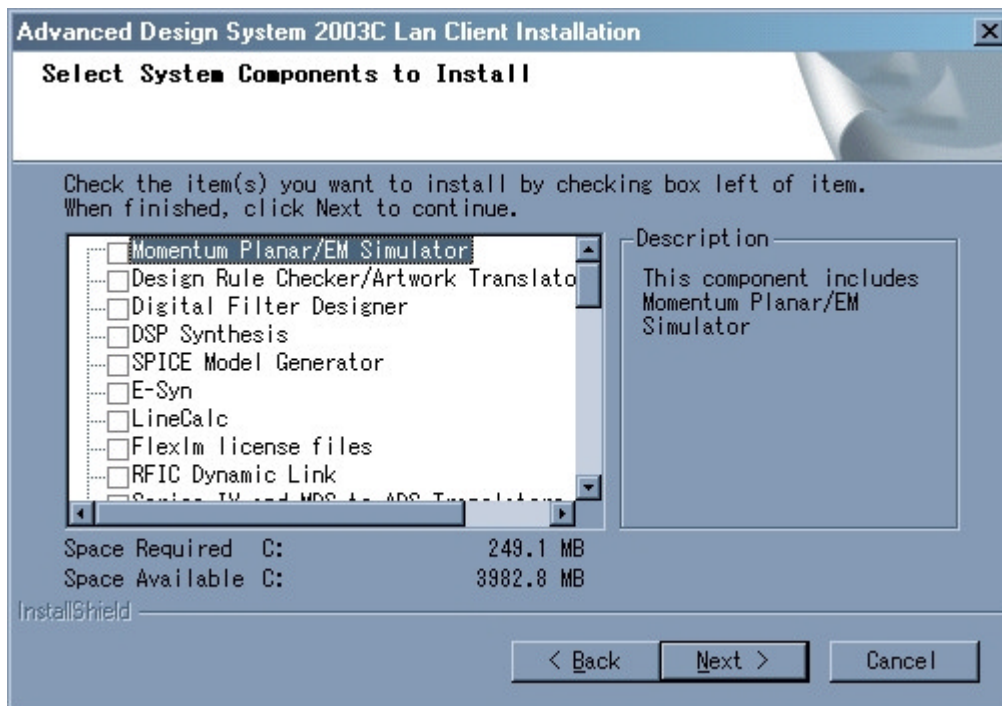


指定方法は、3 - 3 節 (5) と同様ですので、詳細はそちらを参照してください。

(8) ファイルセットの選択

Recommended network installation を選択した場合は、クライアントマシンにコピーするファイルセットを選択します。

E-Syn、LineCalc等、ADSの一部の機能は、実行ファイルをクライアントマシンにコピーしないと、ご利用いただくことができません。



(9) ADS2003C を使用するユーザ範囲の指定

ADS2003C を使用するユーザ範囲の指定をします。

指定方法は、3 - 4 節 (4) と同様ですので、詳細はそちらを参照してください。

(10) プログラムフォルダの指定

ADS 2003C 起動用のプログラムフォルダを作成するために、プログラムフォルダ名を指定します。

指定方法は、3 - 4 節 (5) と同様ですので、詳細はそちらを参照してください。

(1 1) セットアップ情報の確認/インストールの開始

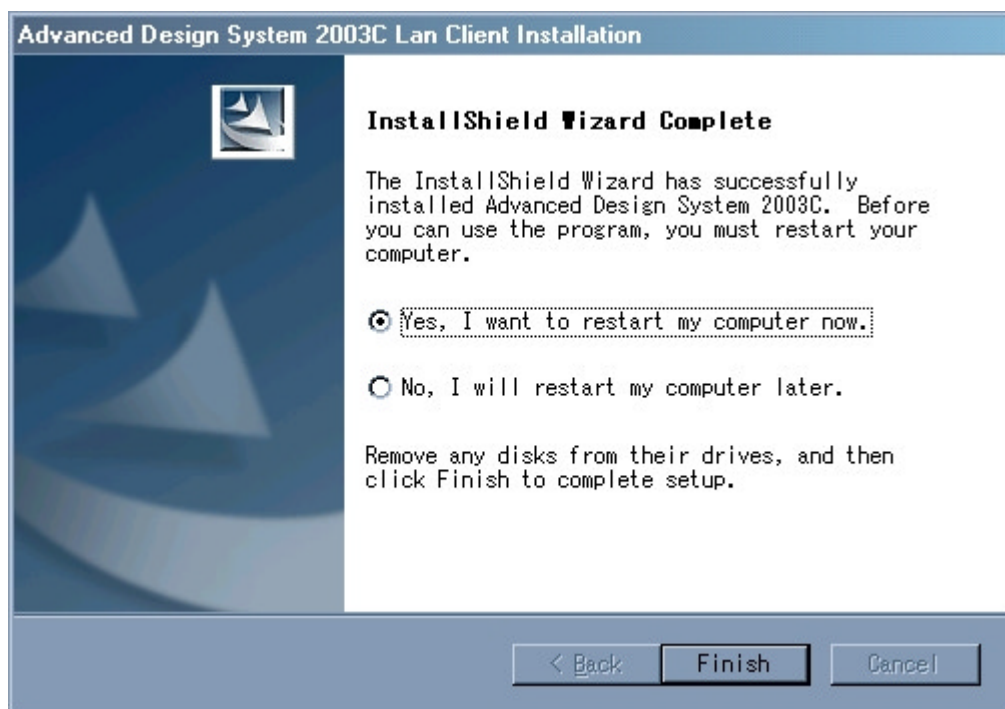
“Check Setup Information” ボックスが現れます。インストール方法・インストール先等が正しければ、[Next >] を押してください。インストールが開始されます。

参考 インストール途中で、“Repaintind while Draggind Turned OFF” というウインドウが出る場合があります。 [Yes] , [No] のどちらを選んでも、インストールには差し支えありません。どちらかを選択して、インストールを続行してください。
[No] を選択した場合は、最後の “status” ウインドウのタイトル表示がおかしくなる場合があります。

(1 2) ネットワークインストール・セットアップの終了

インストールが完了すると、“InstallShield Wizard Complete” ダイアログボックスが表示されます。

このダイアログボックスでは、コンピュータの再起動を即時行うか、後程手動で実行するかの選択が必要です。通常は再起動を行う (Yes を選択する) ことをお勧めします。



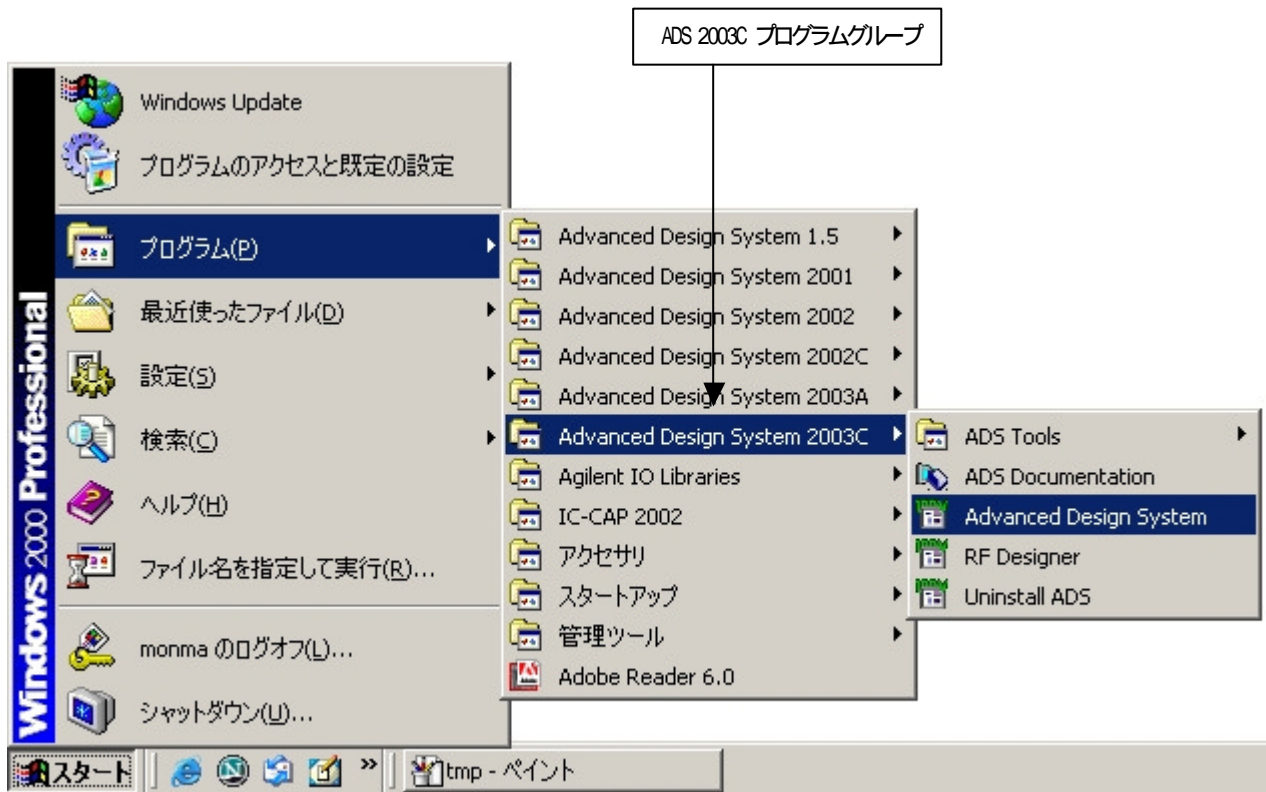
再起動を行う場合は、他の作業中のプログラムは全て終了させてください。

Yes を選択した場合は、[Finish] ボタンを押すとコンピュータの再起動が実行されます。
No を選択した場合は、インストーラが終了します。

以上でネットワーククライアントの構築が終了しました。クライアントマシンが複数台ある場合は、全てのコンピュータで、3 - 5 節(2) ~ (10) までの手順を繰り返してください。

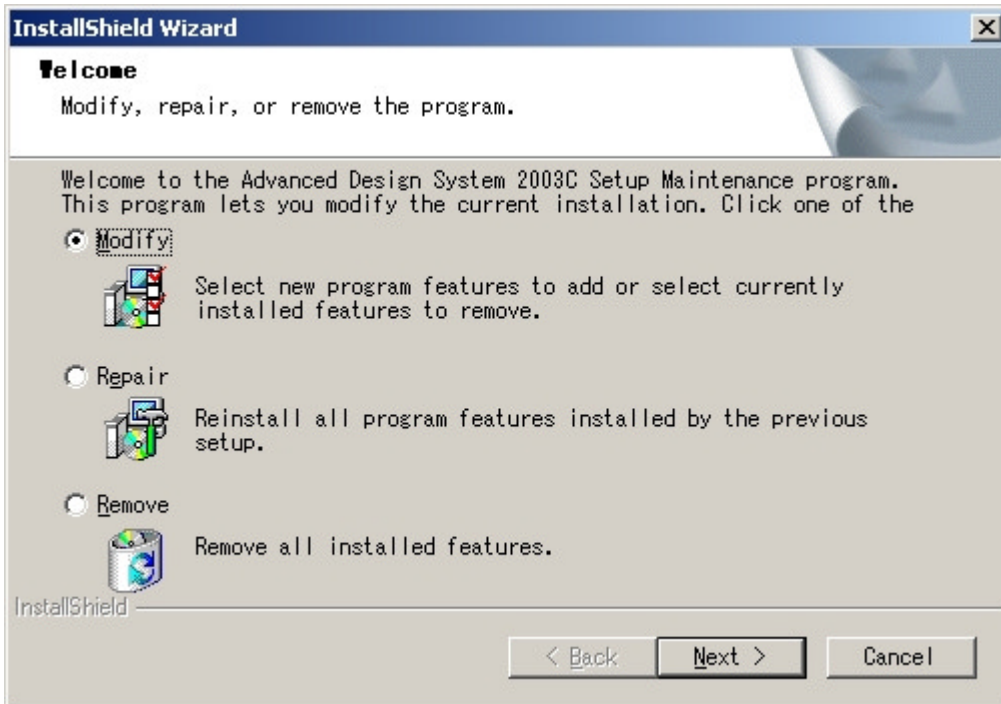
3- 6 セットアップの終了

ファイルセットのインストール作業が終わっても、プログラムを正しく起動するためにはライセンスの入力を行う必要があります。ライセンスの入力については、4章で詳しく述べていますので、こちらの作業も必ず行ってください。3 - 5節までの状態では ADS 2003C は起動できません。



3- 7 参考 後から一部のファイルセットをインストールする方法

ADS 2003C PC Setup Program Disk 1 をCD-ROMにセットし、"setup.exe"を起動します。
ADS 2003CがすでにインストールされているPCの場合には、下図のような [Welcome] ボックスが現れます。
Modifyを選択し、[Next>] をクリックするとインストールするファイルセット一覧が表示されますので、インストールを行いたいものをチェックし、インストールを行います。



4章 ライセンスの設定

4-1 概要

ソフトウェアのインストールが終了したら、ライセンスの設定を行います。

注意 ADS 2003C は ADS 2003A, 2003C 用のコードワード(ライセンスファイル)が必要です。
 ADS 2003A,2003C 用のコードワード(ライセンスファイル)をお持ちでない場合は、8 - 1 節「コードワード発行依頼の方法」をご参照になり、弊社までご請求ください。ADS 2002C 以前のライセンスファイルでは、ADS 2003C は動作しません。

コードワードと動作するアプリケーションのバージョンごとの対応

		発行されたコードワードのバージョン			
		ADS 2003A,2003C	ADS 2002,2002C	ADS 1.01-2001	SeriesIV / MDS
動作	ADS 2003A,2003C	*1	×	×	×
	ADS 2002,2002C	×	*2	×	×
	ADS 1.01-2001	×	×	*3	×
	SeriesIV / MDS	×	×	*4	

(*1) ADS 2003A と ADS 2003C は、共通のコードワードで動作します

(*2) ADS 2002 と ADS 2002C は、共通のコードワードで動作します

(*3) ADS 1.01, 1.1, 1.3, 1.5, 2001 は、共通のコードワードで動作します

(*4) ADS 1.01-2001 のコードワードは、クロスライセンスにより SeriesIV / MDS も動作します

ADS 2003A,2003C での変更点

	ADS 2003A,2003C	ADS 2002,2002C	ADS 2001
ベンダーデーモン名	agileesofd	agileesof	hpeesofd
ベンダーデーモン行	VENDOR 行		DAEMON 行
FLEXIm バージョン	8.2a	7.2h	7.0g
ライセンスファイル名	license.lic		license.dat
ライセンス製品名	ads_schematic、 sim_linear		Schematic、 Circuit_linear

4- 2 FLEXImの概念

FLEXIm はアメリカ合衆国 GLOBEtrotter Software 社(現在は、macrovision 社)が開発したライセンス管理ソフトウェアの名称です(<http://www.macrovision.com/>)。

(1) FLEXIm のライセンスの形態 (種類)

ライセンスの形態(種類)は、「ノードロックライセンス」、「ネットワーク(フローティング)ライセンス」の2種類があります。以下にそれぞれの説明を簡単に行います。
基本的な設定方法は「ノードロックライセンス」でも「ネットワーク(フローティング)ライセンス」でも同じです。

ノードロックライセンス

ある限定されたコンピュータでのみアプリケーションソフトを実行できます。

ネットワーク(フローティング)ライセンス

任意のコンピュータでアプリケーションソフトを実行できます。ただし、ライセンスサーバは限定されたコンピュータになります。

また、同時に実行できるアプリケーションソフトの数(本数)は、取得したライセンスの本数までになります。

(2) FLEXIm で使用されるプログラム/ファイル

次に、FLEXIm で使用されるプログラム/ファイルを簡単に説明します。

FLEXIm では、「ライセンス管理デーモン」「ベンダデーモン」「ライセンスファイル」の3つが使用されています。以下にそれぞれの説明を簡単に行います。

ライセンス管理デーモン (Imgrd)

ライセンス管理デーモン(Imgrd)は実行形式のプログラムです。

ベンダデーモン(agileesofd)と協力してライセンスを管理します。ネットワーク(フローティング)ライセンス の場合、Imgrd はライセンスサーバでは必ず実行させなければならないプログラムです。

同一のコンピュータで、複数の Imgrd を実行することも可能(ただし、それぞれのポート番号を変更させる必要があります)ですので、agileesofd 製品以外のソフトウェアが FLEXIm を使用していても問題はありません。

ベンダデーモン (agileesofd)

ベンダデーモン(agileesofd)は実行形式のプログラムです。

ライセンス管理デーモン(Imgrd)と協力してライセンスを管理します。agileesofd はライセンスサーバでは必ず起動していなければならないプログラムです。

同一のコンピュータで、複数の agileesofd を実行することはできません。ベンダデーモン名は使用するアプリケーションソフトで異なりますが、MDS B.07.X、Series IV 6.X、agilent HFSS 5.X、IC-CAP 5.X および ADS 2001 では、ベンダデーモン名はすべてhpeesofd、IC-CAP 2001,2002 / ADS 2002,2002C は agileesof、ADS 2003A,2003C では agileesofd になっています。

ライセンスファイル (license.lic)

ライセンスファイル (license.lic) はテキストファイルです。テキストエディタで編集したり、プリンタに出力することができます。
以下が、ライセンスファイル (license.lic) の例です。

(3) ライセンスサーバとライセンスクライアント

ここでは、「ライセンスサーバ」と「ライセンスクライアント」の違いについて説明します。

ライセンスサーバ

ライセンスサーバとは、ライセンスを供給するコンピュータを指します。前述の license.lic ファイルの中では SERVER で始まる行に決定されています。これは、ライセンス発行時のみ指定可能で、ユーザが後から変更することはできません。

ライセンスサーバ・コンピュータでは、前述した Imgrd と agileesofd が実行されている必要があります。もし、SERVER 行が複数個あれば、それぞれのコンピュータで Imgrd を実行する必要があります (冗長ライセンスサーバと呼びます)。

ライセンスクライアント

ライセンスクライアントとは、ライセンスサーバからライセンスを受け取って実際にアプリケーションを実行するコンピュータを指します。

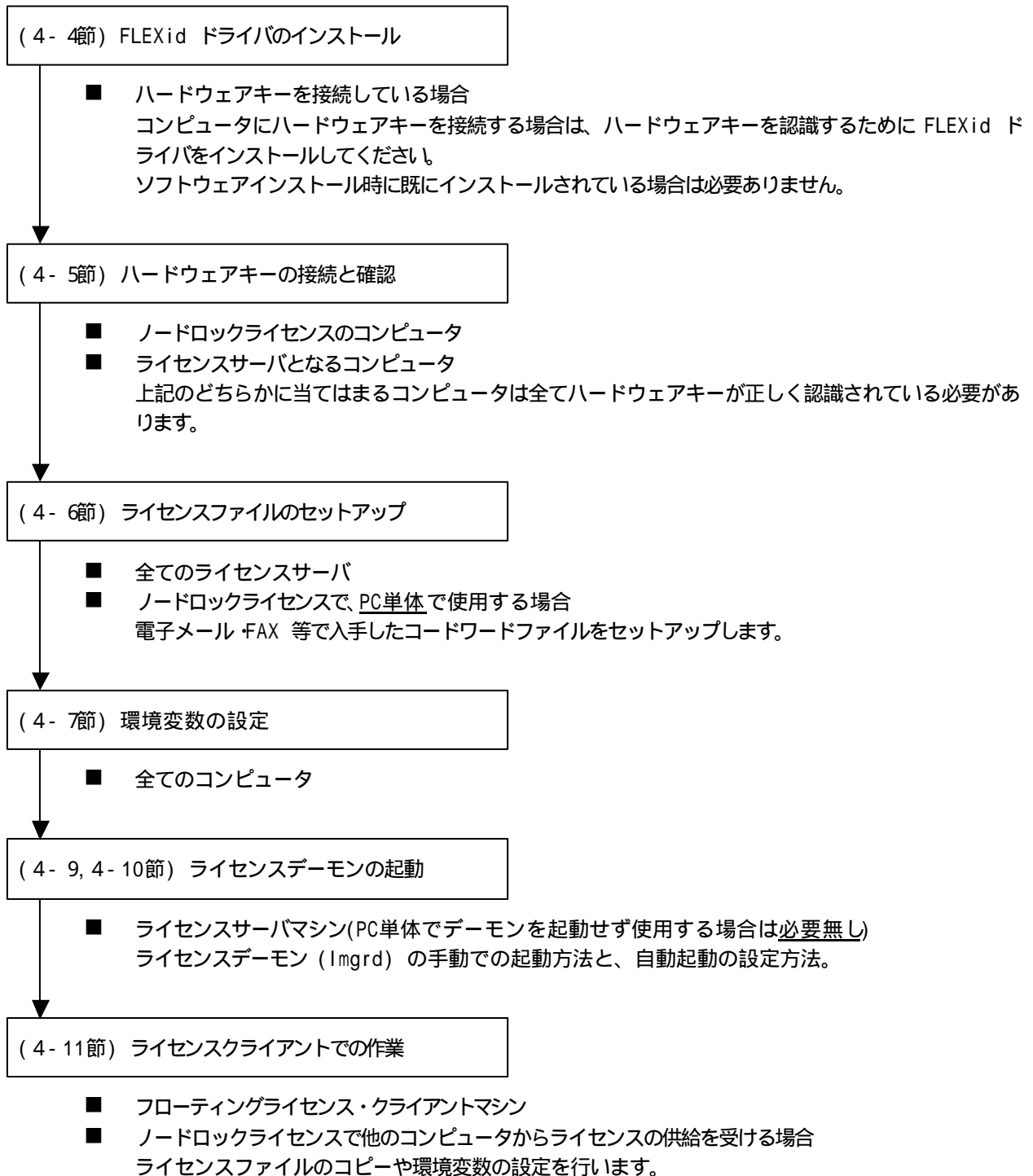
ノードロックライセンスの場合、前述した license.lic ファイルの中の INCREMENT 行の HOSTID= で指定されています。ネットワーク(フローティング)ライセンスの場合は、ライセンスファイルに記述する必要はありません。

ライセンスクライアントでは、前述した Imgrd と agileesofd を実行してはいけません。

注意 ネットワーク(フローティング)ライセンスにおける、ライセンスサーバ/ライセンスクライアントは、3章で説明した“ネットワークインストール”とは関係ありません。例えばネットワークサーバ/クライアントシステムを構築したクライアントマシンは、ノードロック、フローティングライセンスのどちらでも利用できます。

4- 3 セットアップの手順

ライセンス関連のセットアップの手順について示します。



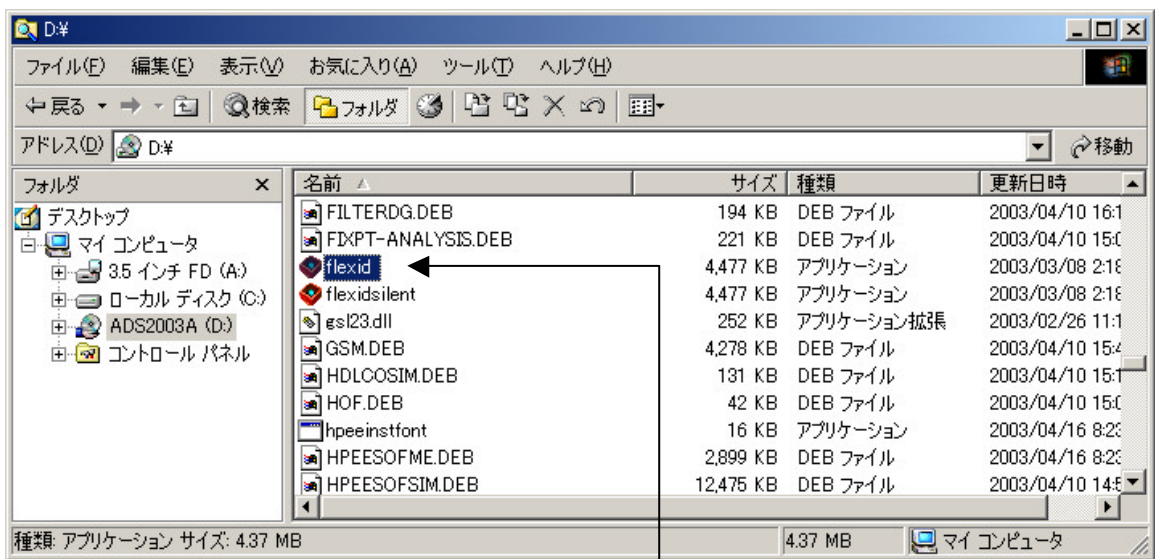
4- 4 FLEXid ドライバのインストール

ハードウェアキーを使用する場合は、ハードウェアキー検出のために、PC に FLEXid ドライバをインストールする必要があります。FLEXid ドライバは、ADS 2003C PC Setup Program Disk1 に入っています。

重要 ADS 2002C 以前のバージョンですでにハードウェアキー (sentinel キー; 水色でキー番号が “FLEXID=7- ” で始まるもの) を利用しているお客様で、既に flexid ドライバが PC にインストールされている場合でも、今回は新たに FLEXid ドライバをインストールする必要があります。ADS 2003C を使用する場合は、必ずインストールしてください。FLEXid ドライバをインストールしても、旧バージョンの ADS は問題なく利用できます。

FLEXid ドライバのセットアッププログラムは、ADS 2003C PC Setup Program Disk1 に収録されている、“flexid.exe” を実行することによって起動できます。下記の手順は起動方法の一例です。

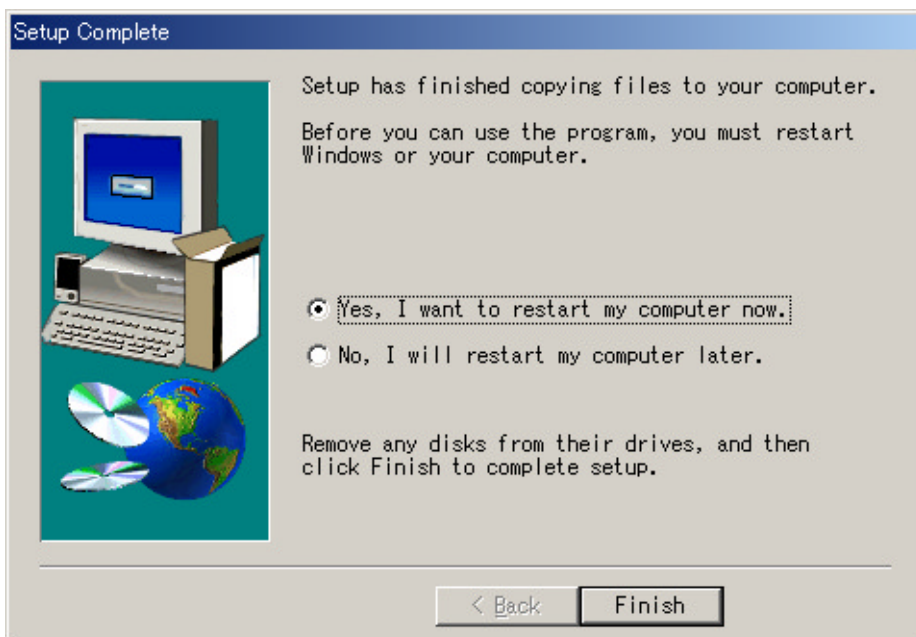
- (1) ADS 2003C PC Setup Program Disk1 を CD-ROM ドライブに挿入します。
- (2) エクスプローラを起動します。
- (3) CD-ROM ドライブの “flexid.exe” を起動します。“flexid.exe” はエクスプローラの設定によって、“flexid” と表示される場合があります。



- (4) インストーラが起動します。[Next >] をクリックすると、インストールが始まります。



- (5) インストールが終了すると下図のウインドウが現れますので、すぐにコンピュータの再起動をするならそのまま [Finish] ボタンをクリックします。後で行う場合は "No, I will restart my computer later." を選択して [Finish] ボタンをクリックしてください。これで FLEXid ドライバのインストールは終了です。



4- 5 ハードウェアキーの接続と確認

ハードウェアキーを装着するコンピュータは次の2つの場合があります。

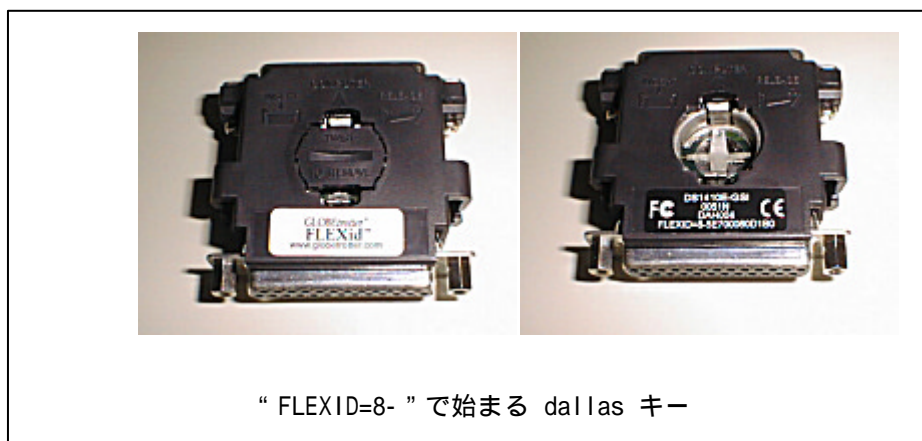
- ノードロックライセンスの場合
- フローティング(ネットワーク)ライセンスのサーバマシンの場合

(1) まず、ハードウェアキーを装着します

ハードウェアキーをコンピュータの平行ポートに取り付けます。外れないようにしっかりと差し込み、ネジを締めてください。接続した後、PC を再起動する必要はありません。

注意 ハードウェアキーには IDナンバー(例 :FLEXID=7-B2858B77)が記載されています。コンピュータへ取り付ける前にナンバーを控えておいてください。コードワードを確認するときに必要になります。

図4 - 1 : ハードウェアキーの見本
(ハードウェアキーの形状は異なる場合があります)





ハードウェアキーの認識テストをします。

ハードウェアキーのテストをしたい時や、ハードウェアキー取り付け後にキーの ID ナンバーを調べたいときは、コマンドプロンプトから次のコマンドを入力します。

注意 ハードウェアキーを利用するためには、FLEXid Driver がインストールされている必要があります。FLEXid Driver については、前節 4- 4を参照して下さい。

2003年6月現在、ハードウェアキーは USB キー（“FLEXID=9- ”で始まるもの）、パラレルポート用の Dallas キー（黒いハードウェアキー；“FLEXID=8- ”で始まるもの）が採用されていますが、これ以前の古いキー（緑色のハードウェアキー；“FLEXID=7- ”で始まるもの）を利用されている方で、sentinel ドライバをインストールして利用できている場合でも、今回は新たに FLEXid ドライバをインストールする必要がありますのでご注意ください。

1. コマンドプロンプトを起動します。

- Windows 2000
[スタート] > [プログラム] > [アクセサリ] > [コマンドプロンプト] をクリックしてコマンドプロンプトを起動します。
- Windows NT 4.0
[スタート] > [プログラム] > [コマンドプロンプト] をクリックしてコマンドプロンプトを起動します。
- Windows XP
[スタート] > [すべてのプログラム] > [アクセサリ] > [コマンドプロンプト] をクリックしてコマンドプロンプトを起動します。

2. プロンプトで次のコマンドを実行します。

```
<書式> cd <installation directory>%licenses%bin
```

```
<例> cd C:%ADS2003C%licenses%bin
```

<installation directory> は ADS 2003C をインストールしたディレクトリを示します。<例>は、ADS 2003C が “C:%ADS2003C” にインストールされている場合です。

3. 次に、ハードウェアキーの ID を読み取るコマンドを実行します。

```
> Imutil Imhostid -flexid
```

(正しい結果) 以下のようなコマンドの結果が得られます。

```
Imutil - Copyright (C) 1989-2002 Globetrotter Software, Inc.  
The FLEXIm host ID of this machine is "FLEXID=8-5E700060D1B0"  
Only use ONE from the list of hostids.
```

二行目の最後の、“FLEXID=8-5E700060D1B0” の部分がハードウェアキーの番号にです。

(誤った結果 1)

```
Imutil - Copyright (C) 1989-2002 Globetrotter Softwa  
The FLEXIm host ID of this machine is "00a0c90355bf"
```

この場合ハードウェアキーではなく LAN の ID が出力されています。コマンドに入力間違いが無いかどうか、もう一度お確かめ下さい。

(誤った結果 2)

```
Imutil - Copyright (C) 1989-2002 Globetrotter Software, Inc.  
The FLEXIm host ID of this machine is ""  
Imhostid: Can't read dongle: check dongle or driver (-110,511:42 "Illegal byte  
sequence")
```

この場合は、ハードウェアキーが認識されていません。以下の項目をお確かめ下さい。

- ハードウェアキーがパラレルポートまたは、USB ポートにきちんと接続されているでしょうか？もう一度お確かめください。
- FLEXid ドライバのインストールを行いましたか？行っていない場合は、4 - 3節を参考に行ってください。

- パラレルポートに接続するタイプのハードウェアキーの場合、ハードウェアキーにさらにプリンタを接続していますか？接続している場合は一度プリンタを外してもう一度チェックしてみてください(プリンタは電源を切るだけでなくケーブルをコネクタから外してお試しください)。
- PC 本体の BIOS でのパラレルポートの設定は入出力が可能な状態になっているでしょうか？通常パラレルポートにはプリンタ等、出力専用の周辺装置を接続することが多く、出力のみの設定になっている場合があります。コンピュータ起動時の BIOS 設定のメニューを起動し、パラレルポートの設定を確認してください。この設定はコンピュータの機種に依存しますので、詳細はご使用になられているコンピュータのマニュアル等を参照してください。
- USB キーの場合、使用しているUSB ポートに他の USB 機器を接続し、動作するかどうか確認してください。動作しない場合、USB ポートに問題があると思われます。
- Windows NT 4.0 では、USB キーを使用することはできません。

注意 パラレルポートに接続するタイプのハードウェアキーで、パラレルポートにハードウェアキーを取り付け、さらにプリンタもつないだ場合に、OS/プリンタ/ドライバの組み合わせによっては、ハードウェアキーを認識できなかったり、プリンタが動作しなかったりする場合があります。この場合、もう1枚別にパラレルポート増設ボードを用意し、こちらにプリンタを接続する方法があります。

4. “exit”と入力すると、コマンドプロンプトを終了することができます。

4- 6 ライセンスファイルの作成と設置

ADS 2003C では ライセンス管理に FLEXIm が用いられています。FLEXIm では、ライセンスの情報を license.lic (または、license.dat) ファイルで管理しています。license.lic ファイルは決められたディレクトリに存在する必要があります。これはノードロックライセンス下でもフローティングライセンス下でも同様です。license.lic ファイルの標準インストール先は “<installation directory>%licenses” ディレクトリ (例えば C:¥ADS2003C¥licenses) です。

この節では、この license.lic ファイルの作成を行います。

参考 FLEXImは、アメリカ合衆国 GLOBEtrouter 社(現在は、macrovision 社)が開発した、ライセンス管理ソフトウェアの名称です。

ライセンスファイルのセットアップ方法は、ライセンスデーモンを起動する場合/しない場合・既存のサーバを使用する場合に、作業が若干異なってきます。ライセンスデーモンとは、ソフトウェアがライセンスの数だけ正しく使用されるように管理を行うソフトウェアを指します。

それぞれの場合で必要な作業を以下にまとめています。

- ライセンスデーモンを起動しない場合 次ページ(1)の作業を行ってください
PC単体で、ノードロックライセンスの製品のみを使用する場合は、この方法をとります。

ライセンスファイルを受け取ったら、license.lic ファイルを所定のパスに保存するだけで終了です。次ページの(1)の手順のみを行ってください。

- ライセンスデーモンを起動する場合 次々ページ(2)の作業を行ってください
フローティングライセンスの場合は、ライセンスデーモンを起動する必要があります。また、ノードロックライセンスの場合で、他のコンピュータからライセンスの供給を受ける場合もライセンスサーバの起動が必要です。

サーバマシンに license.lic ファイルを設置し、ライセンスデーモンを起動します。
クライアントマシンでの作業は、4 - 11節を参照してください。

- 他のライセンスサーバからライセンスの供給を受ける場合

既に ADS 2003C のライセンスサーバが他のコンピュータで動いている場合は、この方法を選択することができます。ライセンスの請求時に、既存のサーバの情報をお知らせしていただく必要があります。

受け取ったライセンスファイルをサーバ側の既存のライセンスファイルに追加し、再読み込みを行います。

サーバはPCだけでなく UNIX サーバからもライセンスを取得することができます。

(1) license.lic ファイル作成 (PC一台でノードロックライセンスを使用する)

送られてきたライセンスファイルを所定のディレクトリに置きます。ライセンスファイルは通常、“<Installation Directory>%licenses” ディレクトリに “license.lic” という名前で作ります。ADS 2003C がインストールされているディレクトリを、“C:%ADS2003C” とすると、“C:%ADS2003C%licenses%license.lic” となります。

- ライセンスファイルを受け取ったら、所定の場所にライセンスファイルを置きます。

license.lic ファイルの内容は以下のようになります。

```
INCREMENT ads_datadisplay agileesofd 2.3 08-nov-2004 uncounted ¥
  VENDOR_STRING="7-36C70F19 : DDNLFLA WZBCYQ2 AUJXJ2E IEKCKLI ¥
  WFYQNVN DNJU1YM LHYKAQC OM" HOSTID=FLEXID=7-36c70f19 SIGN="0010 ¥
  18B6 3D5D F3FE 9759 4B1A 7C5C A15D 0E0B A871 7300 585B B0C0 ¥
  D085 9278 DEE0 674D 9E3D 2E02 CC95 26FD"
INCREMENT ads_schematic agileesofd 2.3 08-nov-2004 uncounted ¥
  VENDOR_STRING="7-36C70F19 : MMUIWQU LPBVIYAH XDAXLNO GIAHPBC ¥
  REYDXGC TQKDCYA RW1QGNP G" HOSTID=FLEXID=7-36c70f19 SIGN="029E ¥
  D21D E210 939C 5745 3EBC C5A1 6005 240F 55DE 5F03 D04A 7A6F ¥
  BDA6 62FD AE1B 8478 6E31 169E 86E9 D004"
(以下省略)
```

注意 現在、PC単体でのノードロックライセンスの場合は、以前と違いライセンスファイルの最初に SERVER, DAEMON, VENDOR などの行が入っていません。INCREMENT 行のみのライセンスファイルが正しい形ですので、SERVER, DAEMON, VENDOR 行などを特に付け加えずご利用になれます。

重要 ライセンスファイルの設置ディレクトリ (例 C:%ADS2003C%licenses%) には 最新の有効なライセンスファイル以外のファイルは絶対に置かないでください。 ADS 2003C では、ライセンスの設置ディレクトリの中のファイルを自動的に検索してライセンスを探す機能があります。よって、このディレクトリに無効なライセンスファイルや、バックアップ用のライセンスファイル(例えば、license.lic.backup など)があると、正しいライセンスセットアップを行っても、ADS 2003C が起動しない場合があります。

ノードロックライセンスの場合は、以上で license.lic ファイルの設定は終了です。
4 - 7 節 「環境変数の設定/確認」に進んでください。

(2) license.lic ファイル作成 (ライセンスサーバが必要な場合)

送られてきたライセンスファイルを所定のディレクトリに置きます。ライセンスファイルはどこに置いて構いませんが、混乱を避けるために通常は “<Installation Directory>¥licenses” ディレクトリに “license.lic” という名前で置きます。

ADS 2003C がインストールされているディレクトリを “C:¥ADS2003C” とすると、“C:¥ADS2003C¥licenses¥license.lic” となります。

送付されてきた、license.lic ファイルの内容は以下のようになります。

```
SERVER unknown FLEXID=7-36c70f19
VENDOR agileesofd

INCREMENT ads_datadisplay agileesofd 2.3 08-nov-2004 2 ¥
  VENDOR_STRING="7-36c70f19 : DDNLFLA WZBCYQ2 AUJXJ2E IEKCKLI ¥
  WFYQNVN DNJU1YM LHYKAQC OM" SIGN="0010 18B6 3D5D F3FE 9759 ¥
  4B1A 7C5C A15D 0E0B A871 7300 585B BOC0 D085 9278 DEE0 674D ¥
  9E3D 2E02 CC95 26FD"
INCREMENT ads_schematic agileesofd 2.3 08-nov-2004 2 ¥
  VENDOR_STRING="7-36c70f19 : MMUIWQU LPBVYAH XDAXLNO GIAHPBC ¥
  REYDXGC TQKDCYA RW1QGNP G" SIGN="029E D21D E210 939C 5745 3EBC ¥
  C5A1 6005 240F 55DE 5F03 D04A 7A6F BDA6 62FD AE1B 8478 6E31 ¥
  169E 86E9 D004"

(以下省略)
```

次に license.lic ファイルの編集を行います。

(3) SERVER行の編集

ライセンスサーバが必要な場合は、license.licファイルの最初の SERVER から始まる行をご使用になっているコンピュータの設定に合わせて編集する必要があります。SERVER 行の書式および、その設定例を以下に示します。その次に各項目の詳しい説明を示しますので、各パラメータをご使用になっている環境に合わせて設定してください。

<書式> SERVER **ホスト名** FLEXID=ホストID [TCPポート番号]
<例 1 > SERVER edapc01 FLEXID=7-36c70f19 27000
<例 2 > SERVER edapc02 FLEXID=7-36c70f19

1. ホスト名の入力

ホスト名には、フローティングライセンスの「ライセンスサーバマシンのホスト名」を入力してください。ホスト名がわからない場合は、以下の手順で調べてください。不安であればネットワーク管理者にたずねるのが一番確実です。

以下の作業は、ライセンスサーバマシン上で行います。

■ Windows 2000

1. [スタート] > [設定] > [コントロール 補] をクリックして開きます。
2. [システム] アイコンをダブルクリックして、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
3. [ネットワークID] タブを選択すると [フル コンピュータ名] が書かれています。

■ Windows NT 4.0

1. [スタート] > [設定] > [コントロール 補] をクリックして開きます。
2. [ネットワーク] アイコンをダブルクリックして、[ネットワーク] ダイアログボックスを開きます。
3. [識別] タブを選択すると [コンピュータ名] が書かれています。

■ Windows XP

1. [スタート] > [コントロール 補] をクリックして開きます。
2. [パフォーマンスとメンテナンス] を開き、[システム] アイコンをクリックして、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
3. [コンピュータ名] タブを選択すると [フル コンピュータ名] が書かれています。

2. host-id の確認

ホスト名の次は “FLEXID=host-id” の書式で host-id が書かれています。PC版の場合はこの値は、ハードウェアキーのIDナンバーのことを指しています。送付されてきたライセンスファイルには、サーバマシンに接続されているハードウェアキーの IDナンバーが既に書かれているはずですので同じかどうか確認してください。

発行されたライセンスファイルに載っている “host-id” と、ハードウェアキーの “host-id” (調べる方法は 4 - 5 節参照) が異なっている場合は、ライセンスファイルが間違っていて発行された可能性があります。お手数ですが、ライセンスファイル発行受付(コードワード発行受付)の方までお問い合わせください(お問合せ先に関しては、9 - 1 節を参考にしてください)。

3. TCPポートアドレス(省略可)

SERVER行の最後で TCPポートアドレスと指定することができます。

何も書かれていない場合はシステムの規定値(27000 ~ 27009)が自動的に使用されます。

TCPポート番号を指定したい場合は、この番号を変更します。もし詳しいことが分からなければ、送付されてきたままの状態でご使用ください。

(4) VENDOR行の編集(ベンダーデーモンの設定)

VENDOR行の書式および、その例を以下に示します。各パラメータの詳しい内容をその次に示してあります。

<書式> VENDOR **ベンダデーモン名** [**<ベンダーデーモンのパスと名前>**] ¥
[**オプションファイルのパスと名前**]

<例 1 > VENDOR agileesofd c:¥ADS2003C¥licenses¥vendors¥agileesofd ¥
c:¥ADS2003C¥licenses¥options¥local.option

<例 2 > VENDOR agileesofd

1. ベンダデーモン名

VENDOR の次のフィールドにはベンダデーモンの名前が入ります。このフィールドには配布時に “agileesofd” と書き込まれているはずですが、これは変更できません。

2. ベンダデーモンパス(省略可)

次のフィールドはベンダデーモンの実行ファイルのパスとファイル名を示しています。省略されている場合は、実行された Imgrd と同じディレクトリに存在する agileesofd が使用されます。(Imgrd と agileesofd が同じディレクトリに存在する場合にのみ、ベンダデーモンパスを省略することができます。)

3. 改行マーク

次の “*” は、VENDOR 行が次の行にまだ続くということを示しています。

4. オプションファイルパス(省略可)

次(二行目)はオプションファイルのパスとファイル名を示しています。オプションを付けることによりソフトウェアをどのマシンで誰が使用できるか等の制限を設けたりすることができます。特に使わない場合は消してしまっても問題ありません(ただし、<例 1>の場合は、この行を消した時に前の行の最後の “*” も消しておいてください)。

(5) SEVER, VENDOR 行以外の行について

INCREMENT 行など、SERVER, VENDOR 以外の行については、ユーザが編集することはできません。これらの行を編集するとライセンスを正しく取得できなくなりますので、ご注意ください。

参考 ADS 2001 以前の弊社製品の FLEXIm ライセンスファイルには、VENDOR 行の代わりに DAEMON 行が用いられています。ライセンスファイルをマージする場合などは、VENDOR 行、DAEMON 行が混在しても問題はありせん。

4- 7 環境変数の設定/確認

環境変数 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” の設定/確認を行います。環境変数 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” は、ライセンスの所在を表す文字列型の変数です。ファイルのパスを指定する方法と、ネットワーク上の所在を指定する方法があります。

■ ファイルの設置場所を指定する方法

PC単体でノードロックライセンスを使用する場合はこの方法を使います。

また、ライセンスサーバが起動してそこからライセンスを得る場合でも、使用するクライアントPC上にライセンスファイルがある場合は、この方法が使用できます。

環境変数 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” に、license.lic ファイルの場所をフルパスで指定します。ADS 2003C がインストールされているディレクトリが “C:¥ADS2003C ” の場合は、通常 “C:¥ADS2003C¥licenses¥license.lic” になります。

■ ライセンスのネットワーク上の所在を指定する方法

ライセンスサーバからライセンスを取得する場合は、“ポート番号@ホスト名”で指定することもできます。この方法で指定すると、ライセンスファイルをクライアントのPCにコピーする必要がないため、ライセンスファイルがサーバで変更された時に便利です。

例えば、サーバホスト名 “edasvr ”、ポート番号 “27000 ”の場合は、“AGILEESOFD_LICENSE_FILE=27000@edasvr ”と指定します。

また、ポート番号に 27000 ~ 27009 を使用している場合は、ポート番号を省略する事ができます。先程の例では、“AGILEESOFD_LICENSE_FILE = @edasvr ”と指定する事もできます。

注意 以前はライセンスファイルの所在は、環境変数 “LM_LICENSE_FILE” で行っていましたが、ADS 2003C では通常 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” のみで行います。“AGILEESOFD_LICENSE_FILE” と “LM_LICENSE_FILE” が両方存在する場合は “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” のみ有効になります。また “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” 環境変数を設定した場合で “LM_LICENSE_FILE” を使用しない場合は、混乱を避けるため “LM_LICENSE_FILE” 環境変数を削除しておくことを強くお勧めします。

<環境変数と ADS の各バージョンの対応表>

	ADS 2003A / 2003C	ADS 2002 / 2002C	ADS 2001 以前
AGILEESOFD_LICENSE_FILE		×	× ^{*1}
AGILEESOF_LICENSE_FILE	×		× ^{*2}
LM_LICENSE_FILE	×	×	

(*1) AGILEESOFD_LICENSE_FILE が存在する場合、AGILEESOFD_LICENSE_FILE のみ有効

(*2) AGILEESOF_LICENSE_FILE が存在する場合、AGILEESOF_LICENSE_FILE のみ有効

ADS 2003A / 2003C と ADS 2002 / 2002C を同時に使用する場合、“AGILEESOFD_LICENSE_FILE” と “AGILEESOF_LICENSE_FILE” をそれぞれ設定する必要があります。

以下で、Windows での環境変数の設定方法について簡単に解説します。詳しいことはマイクロソフト社 Windows のマニュアルや、オンラインヘルプを参考にしてください。

(1) Windows 2000

1. [スタート] > [設定] > [コントロール パネル] アイコンを選択します。[コントロール パネル]中の [システム] アイコンをダブルクリックし、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
2. [詳細] タブをクリックして選択します。
3. [環境変数] ボタンをクリックすると環境変数ダイアログボックスが開きます。
4. システム環境変数フィールドの [新規] ボタンをクリックし、変数名に “AGILEESOFD_LICENSE_FILE”と、[変数値] 欄ライセンスファイルのパスを入力します。
5. [OK] ボタンをクリックして設定を完了します。

(2) Windows NT 4.0

1. [スタート] > [設定] > [コントロール パネル] アイコンを選択します。[コントロール パネル]中の [システム] アイコンをダブルクリックし、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
2. [環境] タブをクリックして選択します。
3. [変数] フィールドをクリックして、フィールド内に “AGILEESOFD_LICENSE_FILE”と、キーボードから入力します。
4. 次に [値] フィールドをクリックして、フィールドに ライセンスパスを入力します。4 - 6 節で行った設定と同じものを入力してください。
5. [設定] ボタンをクリックして、入力した内容を登録し、[OK] で終了します。

(3) Windows XP

1. [スタート] > [コントロール パネル] アイコンを選択します。[コントロール パネル]中の [パフォーマンスとメンテナンス] を開き、[システム] アイコンをクリックして、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
2. [詳細設定] タブをクリックして選択します。
3. [環境変数] ボタンをクリックすると環境変数ダイアログボックスが開きます。
4. システム環境変数フィールドの [新規] ボタンをクリックし、変数名に “AGILEESOFD_LICENSE_FILE”と、[変数値] 欄に “license.lic” ファイルのパスとファイル名を入力します。
5. [OK] ボタンをクリックして設定を完了します。

ネットワークライセンスの場合は、この後、サーバマシンでライセンスデーモン (lmgrd) を起動する必要があります。次の 4 - 8 節に進んでください。

参考 複数のライセンスファイル (license.lic) を参照するには、環境変数 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” を以下のように設定します。

```
AGILEESOFD_LICENSE_FILE=27000@server1;27001@server2
```

上記のように、2つの参照先をセミコロン (;) で区切って定義します。この場合、最初(左側)に定義したライセンスファイルの方が先に使用されますので、ノードロックライセンスのライセンスファイルの方を最初(左側)に定義してください。

4- 8 ライセンスデーモン(lmgrd)とは？

フローティング(ネットワーク)ライセンスの場合と、ノードロックライセンスを供給する必要がある場合は、ここでライセンスデーモン(lmgrd)を起動する必要があります。PC 一台でノードロックライセンスを使用する場合は必要ありませんので、5章に進んでください。

(1) ライセンスデーモンとは？

ライセンスデーモンは、本製品を正当に使用していただくための、ライセンスを管理するソフトウェアのことを指します。ADS 2003C では、FLEXlm というライセンス管理ソフトウェアを使用しています。

フローティング(ネットワーク)ライセンスを利用するためには、ライセンスデーモン(License ManaGeR Daemon = lmgrd)をサーバマシンで起動する必要があります。

参考 デーモンとは常時動作している監視用プログラムのことです。FLEXlmの場合、クライアントからの要求に対して常に備えており、要求があればライセンスを与えてよいかどうかを判断して結果を送り返すプログラムです。

(2) ライセンスサーバを立ち上げる場合において必要なもの

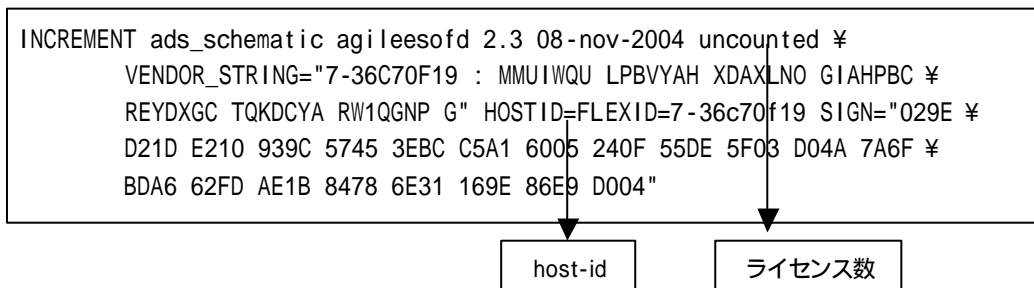
FLEXlm を利用するときは次の条件が必要です。

- TCP/IP, IPX/SPX プロトコルがインストールされていること。
確認方法は、第8章 8- 2節 「TCP/IP, IPX/SPX プロトコルのインストール」に示してありますので、そちらを参照してください。IPX/SPX プロトコルは、ライセンスが LAN アドレスで発行されているときに必要です。
- FLEXlmのソフトウェアがライセンスサーバにインストールされていること。
“<Installation directory>%licenses%bin” ディレクトリの中に、“lmgrd.exe” と “lmutil.exe” というファイルがあることを確認してください。
- license.lic ファイルにライセンスサーバのハードウェア ID (PC では FLEXid) が含まれていること
ライセンスデーモンは、license.lic ファイルの SERVER 行に記載されている FLEXid を持ったコンピュータで起動します。もし、お持ちのコンピュータの FLEXid と license.lic ファイルに記載の FLEXid が異なる場合は、ライセンスファイル発行受付(コードワード発行受付)までお問い合わせ下さい。

(3) コードワードファイルの種類

ライセンスの形態によって、コードワードファイルが違ってきます。ここではその見分け方について説明しています。

■ ノードロックライセンス

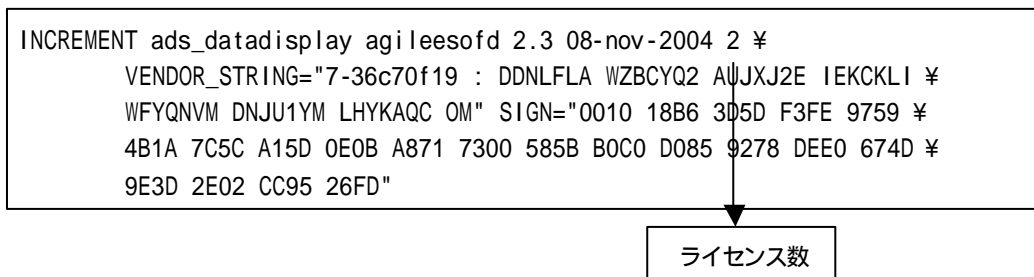


ライセンス数のフィールドが uncounted は無制限を意味しています。PC単体で使用するノードロックライセンスの場合は uncounted になっています。

ここがライセンスの本数を表す数字になっている場合は、PCでもライセンスサーバを起動する必要があります。

無制限の場合は "uncounted" の他に、"uncount", "0" の場合もあります。
host-id のフィールドがあります。

■ フローティングライセンス



ライセンス数のフィールドは 1 以上の整数(ライセンスの数)になっています
host-idのフィールドはありません

ライセンスファイルはサーバマシン・クライアントマシンの両方で必要となります。最初にサーバマシンでライセンスファイルのセットアップを行ったら、クライアントマシンにも同じライセンスファイルをコピーしてください。(ただし、"AGILEESOFD_LICENSE_FILE = ポート番号@ホスト名"形式で指定する場合は、コピーは必要ありません)

4- 9 Imgrd の起動および停止の方法

この節ではフローティングライセンス(ネットワークライセンス)を利用するために必要な、Imgrd を手動で起動する方法、および Imgrd を停止する方法について説明します。

- (1) Imgrd の手動での起動法
Imgrd デーモンを起動する方法です。

参考 Imgrd を手動で起動することは、FLEXIm が正しく起動するかを確認するには、大変有効な方法ですが、一般的にサーバにおいて手動で起動することはお勧めいたしません。これは、起動を行ったコマンドプロンプトを FLEXIm が起動している間ずっと開いている必要があり、また、サーバ を再起動した場合には再起動後に再び手動で起動させる必要があるためです。特に問題がない場合には、4 - 10節で紹介している、自動で起動させる方法をご利用ください。

1. コマンドプロンプトを立ち上げて次の命令を実行し、ディレクトリの移動を行います。

<書式> cd <Installation directory>%licenses%bin

<例> cd C:%ADS2003C%licenses%bin

例は、<Installation Directory> (ADS 2003C がインストールされているディレクトリ) が、“C:%ADS2003C” の場合です。

2. 次にライセンスデーモンを起動します。

<書式> Imgrd -app -c <license.lic のパス>

<例> Imgrd -app -c C:%ADS2003C%licenses%license.lic

と、入力します。ただし、“-c” から後の部分 (<license.lic のパス>) は、license.lic ファイルのある場所のフルパスを表しています。例は、最も標準的なインストールを行った場合のものです。

ライセンスファイルは“license.lic” というファイル名である必要はありませんが、混乱を避けるためにこの名前を使用することをお勧めします。

参考 Imgrd を手動で起動した場合でも、-l オプションをつければ、ログをとることが可能です。

<書式> Imgrd ? app ? c <license.lic のパス> -l <ログのパス>

コマンド実行後少しすると、正しくライセンスデーモンが起動した場合は、コマンドプロンプト画面が他に二つ現れます。

一つ目は“Imgrd: FLEXIm license server” ウィンドウで、ここにはライセンスデーモン Imgrd のログが表示されます。

```
16:42:19 (Imgrd) -----
16:42:19 (Imgrd) Please Note:
16:42:19 (Imgrd)
16:42:19 (Imgrd) This log is intended for debug purposes only.
16:42:19 (Imgrd) There are many details in licensing policies
16:42:19 (Imgrd) that are not reported in the information logged
16:42:19 (Imgrd) here, so if you use this log file for any kind
16:42:19 (Imgrd) of usage reporting you will generally produce
16:42:19 (Imgrd) incorrect results.
16:42:19 (Imgrd) -----
16:42:19 (Imgrd)
16:42:19 (Imgrd)
16:42:19 (Imgrd) pid 1660
16:42:19 (Imgrd) Detecting other Imgrd processes...
16:42:29 (Imgrd) FLEXIm (v8.2b) started on edasvr (IBM PC) (5/19/2003)
16:42:29 (Imgrd) FLEXIm Copyright 1988-2002, Globetrotter Software, Inc.
16:42:29 (Imgrd) US Patents 5,390,297 and 5,671,412.
16:42:29 (Imgrd) World Wide Web: http://www.globetrotter.com
16:42:29 (Imgrd) License file(s): C:\ADS2003C\licenses\license.lic
16:42:29 (Imgrd) Imgrd tcp-port 27000
16:42:29 (Imgrd) Starting vendor daemons ...
16:42:29 (Imgrd) Started agileesof (pid 1228)
16:42:30 (Imgrd) agileesofd using TCP-port 4012
```

ベンダーデーモンが起動

Imgrd で使用されたTCPポート番号

使用されたライセンスファイル

二つ目は“agileesofd: FLEXIm vendor daemon” ウィンドウで、ここにはベンダーデーモン agileesofd のログが表示されます。

```
16:42:29 (agileesofd) FLEXIm version 8.2b
16:42:29 (agileesofd) Server started on edasvr for: ads_datadisplay
16:42:29 (agileesofd) ads_layout ads_schematic mom_vis
16:42:29 (agileesofd) momentum sim_harmonic sim_linear
```

正しく発行されているライセンスリスト

ライセンスデーモンの起動に失敗した時は、他のコマンドプロンプト画面が一瞬現れた後、Imgrd を実行したコマンドプロンプト画面に以下のメッセージが残ります。

```
C:¥ADS2003C¥licenses¥bin>Imgrd -app -c C:¥ADS2003C¥licenses¥license.lit
16:55:01 (Imgrd) -----
16:55:01 (Imgrd)   Please Note:
16:55:01 (Imgrd)
16:55:01 (Imgrd)   This log is intended for debug purposes only.
16:55:01 (Imgrd)   There are many details in licensing policies
16:55:01 (Imgrd)   that are not reported in the information logged
16:55:01 (Imgrd)   here, so if you use this log file for any kind
16:55:01 (Imgrd)   of usage reporting you will generally produce
16:55:01 (Imgrd)   incorrect results.
16:55:01 (Imgrd)
16:55:01 (Imgrd) -----
16:55:01 (Imgrd)
16:55:01 (Imgrd)
16:55:01 (Imgrd) Running Imgrd in dedicated windows ...
16:55:01 (Imgrd)           Use -z to run in foreground in this window
```

この時、一瞬現れてすぐ閉じたウィンドウにエラーメッセージが出ていますので、それを確認するために、-z オプションをつけて、再度 Imgrd コマンドを実行します。

```
C:¥ADS2003C¥licenses¥bin>Imgrd -app -c C:¥ADS2003C¥licenses¥license.lit -z
16:55:01 (Imgrd) -----
16:55:01 (Imgrd)   Please Note:
16:55:01 (Imgrd)
                                     (中略)
16:59:44 (Imgrd)
16:59:44 (Imgrd) pid 1352
license manager: can't initialize: Cannot find license file ←
The license files (or server network addresses) attempted are
  listed below. Use LM_LICENSE_FILE to use a different license file,
  or contact your software provider for a license file.
Filename:      C:¥flexlm¥license.dat
License path:  C:¥flexlm¥license.dat
FLEXlm error: -1,359. System Error: 2 "No such file or directory"
For further information, refer to the FLEXlm End User Manual,
available at "www.globetrotter.com".
16:59:44 (Imgrd) Using license file "C:¥flexlm¥license.dat"
```

ライセンスファイルが見つからないというメッセージ

ライセンスファイルが見つからないというメッセージが出ています。コマンドを確認してみると、license.lic の場所が license.lit と間違えているのがわかります。

(2) Imgrd の停止方法

Imgrd デーモンを止めるための手順を以下に示します。

1. コマンドプロンプトで、次のコマンドを実行し、ディレクトリを移動します。

```
> cd <Installation directory>%licenses%bin
```

<Installation Directory> (ADS 2003C がインストールされているディレクトリ) が、“C:%ADS2003C” の場合は、“cd C:%ADS2003C%licenses%bin”と入力することになります。

2. 次に以下のコマンドを実行してライセンスデーモンを停止します。

```
> lmutil lmdown -c <license.lic のパス
```

と、入力します。約10秒ほどで、デーモンプロセスは終了します。ただし、“-c” から後の部分 (<license.lic のパス>) は、license.lic ファイルのある場所の絶対パスを表しています。

このコマンドで終了しない時は、起動した時の license.lic ファイルと止める時の license.lic ファイルが違っている可能性があります。license.lic ファイルのパスとファイル名をもう一度ご確認ください。

4-10 Imgrd の自動起動

コンピュータの起動時に自動的に Imgrd デーモンが起動するように設定できます。この節では Imgrd デーモンを自動起動させる設定の方法と、その設定の解除の方法について説明します。

注意 以前のバージョンの ADS(ベンダーデーモン名が hpeesofd のもの) や、他の FLEXIm 製品のライセンスも同じPCで起動したい時は、ライセンスファイルをマージする方法があります。ライセンスファイルのマージについては 4-13節をご覧ください。

マージしないで、同時に二つの Imgrd を自動起動したい時は、8-3節をご覧ください。

注意 この操作は、Administrator 等の「サービスを変更できる権限のあるユーザ」でログインして行ってください。

(1) ライセンスデーモンの自動起動

ここでは、ライセンスデーモンの自動起動の設定方法について説明します。

Imgrd をサービスとして登録します。登録手順を以下で説明します。

1. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行しディレクトリの移動を行います。

```
> cd <Installation directory>%licenses%bin
```

ただし、<Installation Directory> は、ADS 2003C がインストールされているディレクトリを指します。標準的なインストールを行った場合は、上記のコマンドは、“cd C:%ADS2003C%licenses%bin” と入力することになります。

更に次のコマンドを実行し、サービスのインストールを行います。

```
> installs -e <Imgrd のパス> -c <license.lic のパス> -l <ログのパス>
```

ただし、<Imgrdのパス> は Imgrd.exe のフルパスを、<license.licのパス> は license.lic ファイルのフルパスを、<ログのパス> は FLEXIm のログファイルのパスを表します。ADS 2003C がインストールされているディレクトリが “C:%ADS2003C” の場合は、以下ようになります。

参考 Imgrd 起動時に、<ログのパス>を指定せずに-l オプションをつけて起動した場合には、system32 ディレクトリ(C:%winnt%system32 (NT / XP は C:%windows%system32) など) にログファイルが作成されます。また、その際の名前は Imgrd.log や Imgrd.xxxx (xxxx は Imgrd のプロセスID)となります。

```

C:¥> cd C:¥ADS2003C¥licenses¥bin
C:¥ADS2003C¥licenses¥bin> installs -e C:¥ADS2003C¥licenses¥bin¥lmgrd.exe -c
  C:¥ADS2003C¥licenses¥license.lic -l C:¥ADS2003C¥licenses¥flex.log
FLEXlm License Server is successfully installed as one of your Windows NT
Services. Some handy tips:

    * To start FLEXlm License Server, use the Services icon
      from the Control Panel.
    * FLEXlm License Server will be automatically started
      every time your system is booted.
    * FLEXlm service log file is lmgrd.log in your NT system
      directory.
    * To remove FLEXlm License Server, type 'install remove'

*****

The permissions of one of the files that you just installed seems
to have the correct settings.
C:¥ADS2003C¥licenses¥bin>

```

サービスインストールの実行例

2. サービスを確認します。

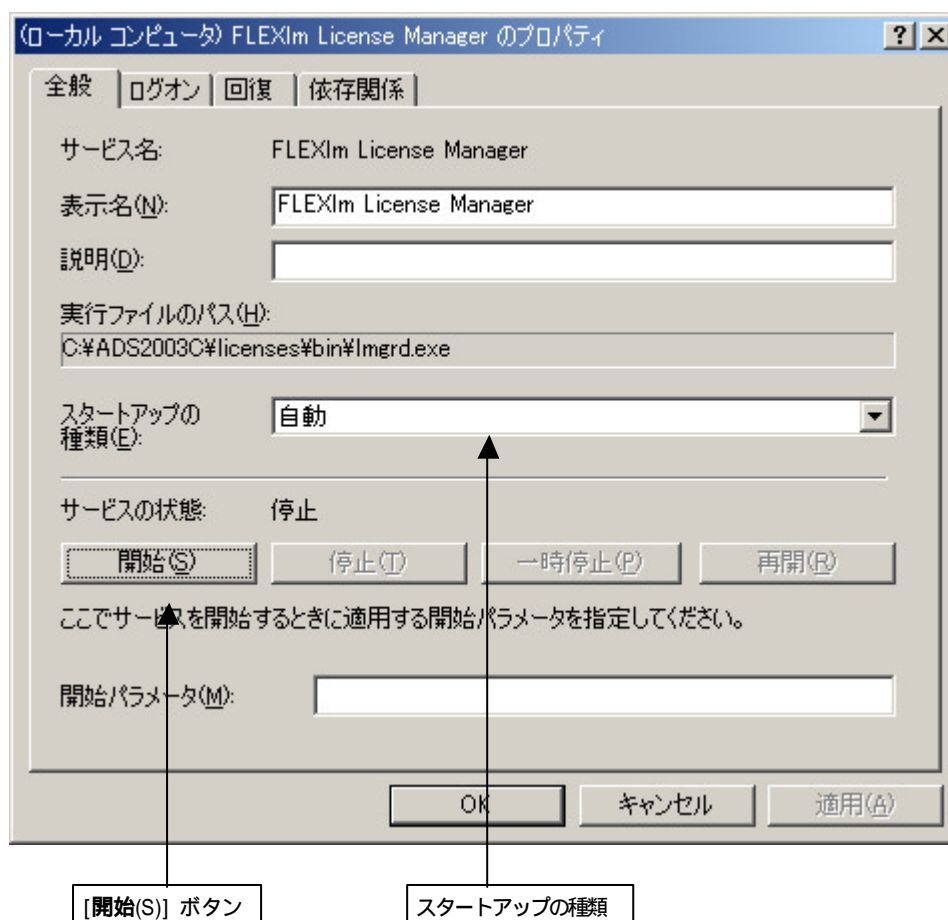
- Windows 2000 の場合
 - [スタート] > [設定] > [コントロールパネル] で、コントロールパネルを開きます。
 - [管理ツール] アイコンをダブルクリックして開きます。
 - [サービス] アイコンをダブルクリックすると、[サービス] ダイアログが現れます。
- Windows NT 4.0 の場合
 - [スタート] > [設定] > [コントロールパネル] で、コントロールパネルを開きます。
 - [サービス] アイコンをダブルクリックすると、[サービス] ダイアログが現れます。
- Windows XP の場合
 - [スタート] > [コントロールパネル] > [パフォーマンスとメンテナンス] > [管理ツール] アイコンをダブルクリックして開きます。
 - [サービス] アイコンをダブルクリックすると、[サービス] ダイアログが現れます。

3. ダイアログボックス中の一覧から [FLEXIm License Manager] を選び、[開始] ボタンをクリックします。

注意 このときもし、エラーメッセージが表示されてサービスが開始されなかった場合は、インストール時の “Imgrd.exe” ファイルのパスが間違っている可能性があります。次の「Imgrd デモンの自動起動サービスの削除」を参考に、一度サービスを削除した後、“Imgrd.exe” のパスを確認のうえ、再度インストールを行ってください。

■ Windows 2000 の場合

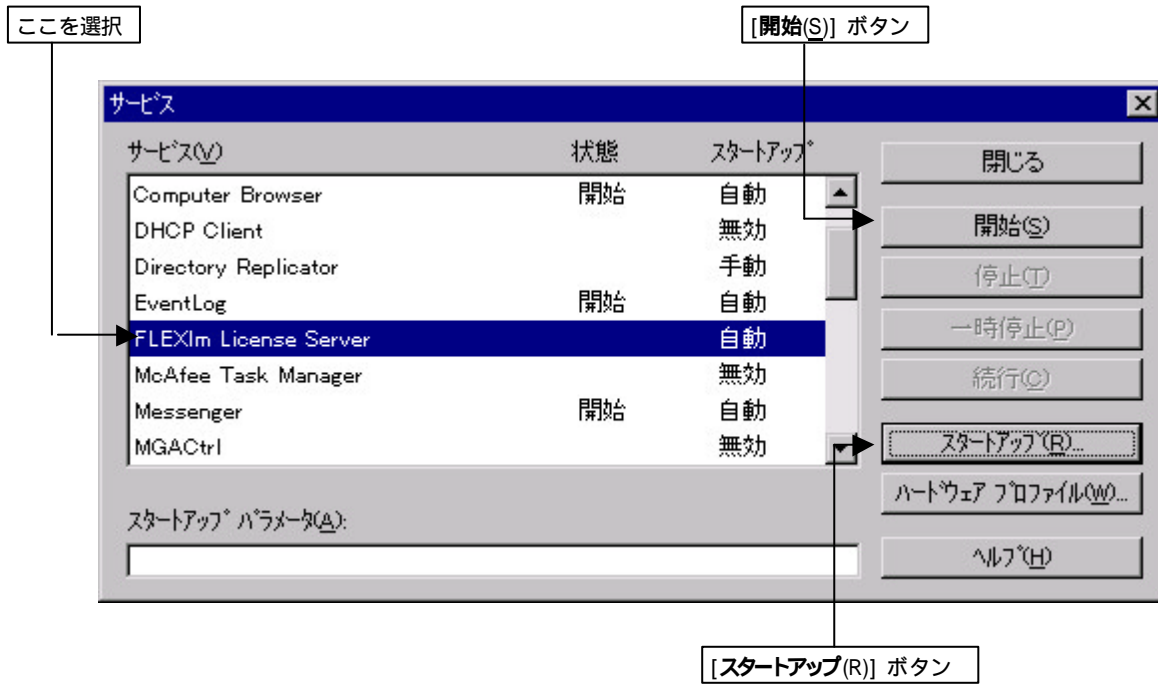
FLEXIm License Manager をダブルクリックします。下記のウィンドウが現れます。



スタートアップの種類が「自動」になっていれば、次回PC起動時から Imgrd が自動起動します。

[OK] をクリックして、サービスウィンドウを閉じます。

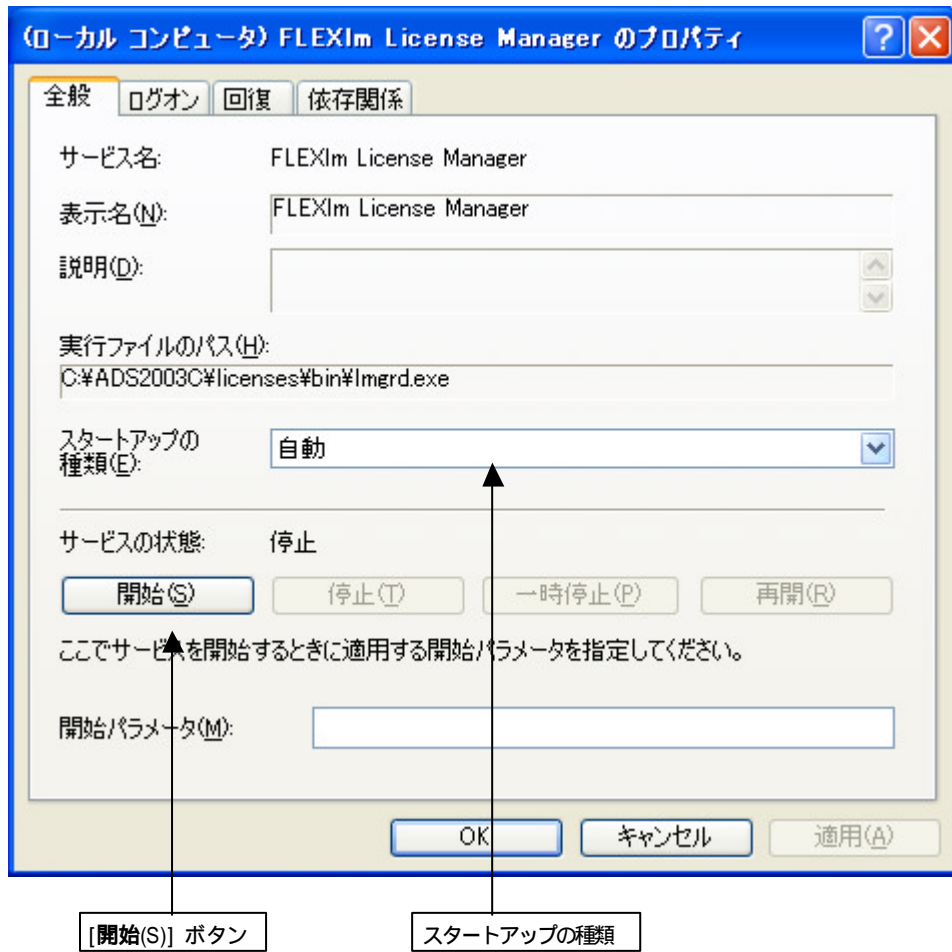
■ Windows NT 4.0 の場合



[スタートアップ] ボタンをクリックします。スタートアップの種類の中で自動を選び、[OK] をクリックします。これで、次回からはコンピュータを起動すると、自動的にライセンスデーモン(lmgrd)が起動します。

[終了]をクリックして、サービスウインドウを閉じます。

■ Windows XP の場合



スタートアップの種類が「自動」になっていれば、次回PC起動時から Imgrd が自動起動します。

[OK]をクリックして、サービスウィンドウを閉じます。

4. ここで一度コンピュータをリブートします。
5. “flex.log” ファイルを確認します。ログファイルは installIs コマンドを実行した時に -l オプションで指定したファイルです。

設定が完了すれば、次からはコンピュータが立ち上がると自動的に Imgrd が起動するようになります。もし、この設定を行わない場合は、コンピュータを起動するたびに手動で、Imgrd を起動し直す必要があります。

(2) ライセンスデーモンの自動起動サービスの削除方法

(i) サービスの削除

1. コマンドプロンプトで次のコマンドを入力し、ディレクトリの移動を行います。

```
> cd <Installation Directory>%licenses%bin
```

2. そして次のコマンドで、サービスを削除します。

```
> installs -r
```

3. 以上で、次にライセンスサーバマシンを起動した時には自動的に Imgrd は起動しなくなります。同時に次からライセンスサーバマシンで Imgrd を起動しなければ、ライセンスクライアントマシンの方でも ADS 2003C の起動はできなくなりますので、ご注意ください。

(ii) 環境変数の削除

設定した環境変数 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” も必要なくなる場合は次の手順で削除します。詳しくはマイクロソフト社 Windows のマニュアルや、オンラインヘルプを参考にしてください。

■ Windows 2000

- 1) [スタート] > [設定] > [コントロール パネル] アイコンを選択します。
- 2) [コントロール パネル]中の [システム] アイコンをダブルクリックし、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
- 3) [詳細] タブをクリックして選択します。[環境変数] ボタンをクリックすると環境変数ダイアログボックスが開きます。
- 4) システム環境変数フィールドの中から、“AGILEESOFD_LICENSE_FILE” を選択します。[削除] ボタンをクリックして、削除します。
- 5) [OK] ボタンをクリックして設定を完了します。

■ Windows NT 4.0

- 1) [スタート] > [設定] > [コントロール パネル] アイコンを選択します。
- 2) [コントロール パネル]中の [システム] アイコンをダブルクリックし、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
- 3) [環境] タブをクリックして選択します。
- 4) [変数] フィールドの中から、“AGILEESOFD_LICENSE_FILE” を選択します。

5) [削除] ボタンをクリックして、削除します。

6) [OK] で終了します。

■ Windows XP

1) [スタート] > [コントロールパネル] アイコンを選択します。

2) [コントロールパネル]中の[パフォーマンスとメンテナンス] を開き、[システム] アイコンをクリックして、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。

3) [詳細設定] タブをクリックして選択します。[環境変数] ボタンをクリックすると環境変数ダイアログボックスが開きます。

4) システム環境変数フィールドの中から、“AGILEESOFD_LICENSE_FILE” を選択します。

5) [削除] ボタンをクリックして、削除します。

6) [OK] ボタンをクリックして設定を完了します。

4-11 ライセンスクライアントの設定

ライセンスクライアントでは、lmgrdを起動する必要はありません。

ライセンスクライアントでは、下記の(1)か(2)の設定を行う必要があります。また、この手続きは全てのクライアントマシンで行ってください。環境変数の設定方法は、4-7節で説明した方法と同じです。

また、パッケージ(ライセンス・バンドル)タイプのライセンスをご利用の場合は、各ライセンスクライアント毎に License Preference Tool を用いて使用するライセンスを設定する必要があります。License Preference Tool の操作方法に関しては、7-1節をご参照ください。

(1) license.lic ファイルをコピーする方法

クライアントマシンでもサーバマシンと同じ内容の license.lic ファイルを読みこむ必要があります。クライアントマシンから license.lic ファイルを読むには以下の二通りの方法があります。

- クライアントマシンのローカルディスクに、サーバマシンの license.lic ファイルをコピーします。
- 二つ目は、サーバマシンの license.lic ファイルの存在するドライブ・ディレクトリを共有し、サーバマシン上のファイルを直接読む方法です。この場合は次に ADS 2003C をクライアントで起動する時と同じドライブに license.lic ファイルのあるドライブ・ディレクトリが共有されている必要があります。

クライアントマシンで、環境変数 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” の内容をコピーした license.lic ファイルのパスに合わせて設定します。設定方法は4-7節を参照してください。

(2) ポート番号@ホスト名形式で指定する方法

環境変数 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” を “ポート番号@ホスト名” 指定します。

例えば、サーバホスト名 “edasvr ”、ポート番号 “27000 ”の場合は、“AGILEESOFD_LICENSE_FILE = 27000@edasvr ”と指定します。ポート番号に 27000 ~ 27009 を使用している場合は、ポート番号を省略する事ができます。先程の例では、“AGILEESOFD_LICENSE_FILE = @edasvr ”と指定する事もできます。また、ライセンスファイルの SERVER 行のポート番号を指定していない(省略している)場合においてもポート番号を省略して書くことができます。

(3) 以上で設定は終わりです。この手続きを全てのクライアントマシンで行ってください。

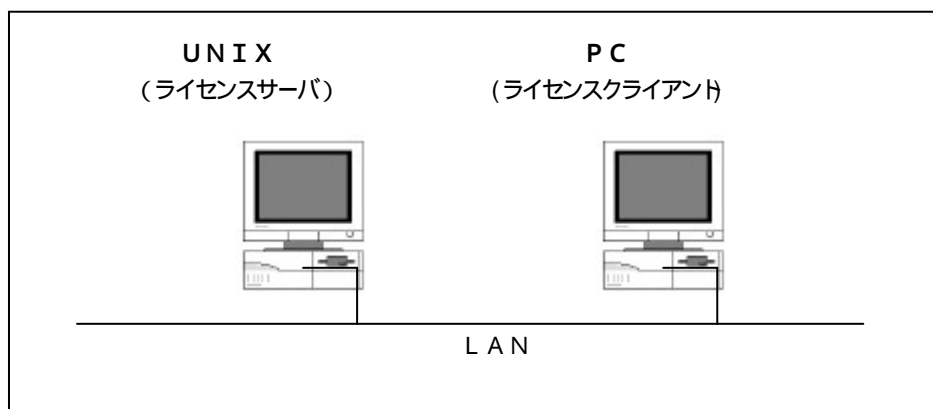
4-12 UNIXライセンスサーバの利用

前節までは PC のライセンスサーバの構築について説明してきましたが、PC で ADS 2003C を使用する際、UNIX マシンのライセンスサーバからライセンスの供給を受けることも可能です。UNIX マシンが既にある場合は、この方法を取ることをお勧めします。ただし、既にコードワード発行の申請を行っている場合は、サーバの変更(プラットフォームチェンジ)には別途費用が必要となりますので、ご注意ください。

(1) UNIX ライセンスサーバの設定

UNIX ライセンスサーバを利用する場合は、コードワード取得時に UNIX 用のライセンスファイルを取得する必要があります。

UNIX のライセンスサーバの設定については、UNIX版のインストールマニュアルをご覧ください。



(2) PC 側での設定

4-11節「ライセンスクライアントの設定」と同様の設定を行う必要があります。以下の二通りの方法を使用することが出来ます。

■ UNIX ライセンスサーバから license.lic ファイルを PC にコピーして使う

UNIX ライセンスサーバの license.lic ファイルを、PC 上にコピーします。ライセンスファイルは、混乱をさけるため <Installation Directory>\licenses に置いておく事をお勧めします。コピーが終わったら、環境変数 AGILEESOFD_LICENSE_FILE に license.lic ファイルのパスを設定します。方法は既に 4-6 節で述べていますので、そちらをご参照下さい。

■ 環境変数 AGILEESOFD_LICENSE_FILE を以下のように設定する。

<書式> set AGILEESOFD_LICENSE_FILE=<port>@<hostname>

<例 1 > set AGILEESOFD_LICENSE_FILE=27000@edasvr

<例 2 > set AGILEESOFD_LICENSE_FILE=@edasvr

この時の <port> は、UNIX ライセンスサーバの license.lic ファイルの SERVER 行の最後に書いたポート番号です。ポート番号が省略されている場合は、通常 27000 ~ 27009 が使用されません。

ポート番号に 27000 ~ 27009 が使用されている場合は、例 2 のようにポート番号を省略することができます。

<hostname> は、UNIX ライセンスサーバのホスト名となります。

これらの設定も 4-7 節で説明と同じ方法で、Windows 2000 / NT 4.0 / XP でシステム環境変数として設定しておくこと、そのコンピュータを使用するすべてのユーザに対して有効になります。また、ユーザ環境変数の場合には、そのユーザのみに有効になります。有効範囲に注意して設定を行ってください。

4-13 ライセンスを追加する方法

この節では、既に使用しているライセンスファイルに、ライセンスを追加する方法を説明します。ただし、ライセンスの追加は、二つの license.lic(または license.dat) ファイルの全ての SERVER 行が完全に一致している必要があります。この方法は、ライセンスを追加購入したときや、既に動作しているサーバで別のコンピュータのライセンスも供給する場合等にも用います。

ライセンスを結合して追加する場合、新しいライセンスをライセンスファイルに加える作業が必要となります。そして、ライセンスサーバが起動している場合は、ライセンスデーモン (lmgrd) にライセンスファイルを再読み込みさせます。

注意 ネットワーク(フローティング)ライセンスの場合、SERVER 行が完全に一致しないライセンスファイル同士を結合(ライセンスの追加)することはできません。

ノードロックライセンスで、PC 一台のみで使用している場合(lmgrd を起動していない場合)は、ライセンスファイルへのライセンスの追加のみ行えば、新しいライセンスを使用することができるようになります。

次ページから具体的作業について説明します。

- (1) 既存のライセンスファイルにライセンスを追加する。

メモ帳等のテキストエディタを用いて、すでに使用しているライセンスファイル (例 : C:\¥ADS2003¥licenses¥license.dat) に購入したライセンスの INCREMENT 行を加えます。

ノードロックライセンスの場合は、(1) の作業が終われば、設定作業は終了です。

ベンダーデーモンが複数種ある場合は、VENDOR 行 (または DAEMON 行) も加えます。

ファイル・ 1

```
SERVER edasvr FLEXID=7-36c70f19 1700
DAEMON hpeesofd /eesof/licenses/vendors/vendors/hpeesofd ¥
/eesof/licenses/options/local.options

INCREMENT analog_lib hpeesofd 7.000 10-Feb-2004 1 FC708E7192CBE931172E ¥
"s=36C70F19"
```

ファイル・ 2

```
SERVER edasvr FLEXID=7-36c70f19 1700
VENDOR agileesofd

INCREMENT ads_datadisplay agileesofd 2.3 08-nov-2004 2 ¥
    VENDOR_STRING="7-36c70f19 : DDNLFLA WZBCYQ2 AUJXJ2E IEKCKLI ¥
    WFYQNM DNJU1YM LHYKAQC OM" SIGN="0010 18B6 3D5D F3FE 9759 ¥
    4B1A 7C5C A15D 0E0B A871 7300 585B B0C0 D085 9278 DEE0 674D ¥
    9E3D 2E02 CC95 26FD"
```

結合後のファイル

```
SERVER edasvr FLEXID=7-36c70f19 1700
DAEMON hpeesofd /ads2001/licenses/vendors/hpeesofd ¥
/ads2001/licenses/options/local.options
VENDOR agileesof

INCREMENT analog_lib hpeesofd 7.000 10-Feb-2004 1 FC708E7192CBE931172E ¥
"s=36C70F19"
INCREMENT ads_datadisplay agileesofd 2.3 08-nov-2004 2 ¥
    VENDOR_STRING="7-36c70f19 : DDNLFLA WZBCYQ2 AUJXJ2E IEKCKLI ¥
    WFYQNM DNJU1YM LHYKAQC OM" SIGN="0010 18B6 3D5D F3FE 9759 ¥
    4B1A 7C5C A15D 0E0B A871 7300 585B B0C0 D085 9278 DEE0 674D ¥
    9E3D 2E02 CC95 26FD"
```

(2) ライセンスファイルの再読み込み (ライセンスデーモンが起動している場合)

ライセンスサーバが起動している場合は、ライセンスサーバでライセンスデーモン(lmgrd)に新しいライセンスを読み込ませなければなりません。いったんライセンスデーモン(lmgrd)を停止させた後にライセンスデーモンを再起動する方法と、ライセンスデーモンを停止させずにライセンスを再読み込みさせる方法があります。

- ライセンスデーモンを停止させ、再起動させる
4- 9節(2)の手順にしたがって、ライセンスデーモン(lmgrd)を停止させ、再起動してください。
- ライセンスデーモンを停止させずにライセンスを再読み込みさせる
この方法は、"license.lic" ファイルのパスとファイル名が更新前・更新後で変更が無い場合のみ可能です。パス名・ファイル名が変わってしまった場合は一度ライセンスデーモンを停止した後、再度ライセンスデーモンを起動してください。

前ページ(1)の手続きをライセンスサーバが起動しているマシン上で行って、license.lic ファイルを新しくします。また、クライアントマシンの license.lic ファイルも、新しい license.lic ファイルに置き換えます。

1. サーバマシンでコマンドプロンプトを立ち上げ、

```
<書式> Imutil Imreread ? c <Installation Directory>%licenses%license.lic  
<例> Imutil Imreread -c C:%ADS2003C%licenses%license.lic
```

を実行し、サーバマシン上のライセンスデーモン(lmgrd)に license.lic ファイルを再読み込みさせます。

2. 次のコマンドを用いると現在使用できるライセンスの一覧が表示されます。ライセンスサーバが新しいライセンス情報を読み込んだか確認します。

```
<書式> Imutil Imstat ? a ? c <Installation Directory>%licenses%license.lic  
<例> Imutil Imstat -a -c C:%ADS2003C%licenses%license.lic
```

もし正常に動作しなければ、4 - 9節(2)を参考にライセンスデーモン(lmgrd)を一度止め、4 - 9節(1)の手順に従ってもう一度ライセンスデーモン(lmgrd)を起動し直してください。

4-14 参考 FLEXlm でよくあるご質問とその回答(FAQ)

UNIX版 ADS 2003C アップデートインストール手順書5 - 11節をご参照ください。

5章 プリンタの設定

ADS 2003C でプリンタを使用する場合、あらかじめ Windows OS 上でプリンタの設定が終了している必要があります。そして、Windows 側で設定が終わってさえいれば、ADS 側ではどのプリンタを使うかを指定するだけでプリントアウトを行うことができます。

以下で、Windows でのプリンタの設定方法について簡単に解説します。詳しいことはマイクロソフト社 Windows のマニュアルや、オンラインヘルプを参考にしてください。

注意 プリンタの Windows への登録/プリンタ自体の使用方法は、マイクロソフト社、またはご使用になっているコンピュータプリンタのメーカーにお問い合わせください。

5-1 プリンタの設定

(1) Windows 2000

1. [スタート] > [設定] > [プリンタ] を選択します。
2. [プリンタ] フォルダ中の [プリンタの追加] をダブルクリックします。
3. [プリンタの追加ウィザード] が現れます、プリンタの種類を指定します。プリンタがローカルプリンタか、ネットワークプリンタかで手続きが異なります。
 - ローカルプリンタを使用する場合
 - 1) [ローカル プリンタ] を選択して、次に進みます。
 - 2) 使用するプリンタのポートを聞いてきます。該当するポートを選択し、[次へ >] をクリックします。
 - 3) プリンタの製造元を選び、その後プリンタ名を選択します。プリンタに付属のディスクを使用する場合は、[ディスク使用] をクリックして画面の指示に従います。
 - ネットワークプリンタを使用する場合
 - 1) ネットワークパスを直接入力するか、またはそのまま [次へ] をクリックして[プリンタの参照] ダイアログボックスで目的のプリンタを探し、選択してから[次へ] をクリックします。
 - 2) プリンタのドライバが必要な場合は、ローカルPCにドライバをインストールします。プリンタの種類のダイアログが現れるので、製造元を選び、その後プリンタ名を選択します。プリンタに付属のディスクを使用する場合は、[ディスク使用] をクリックして画面の指示に従います。
4. 「通常のプリンタとして使いますか?」のチェックボックスが現れますので、通常使うプリンタにする場合は [はい] をチェックして、[次へ >] をクリックします。
5. テスト印刷をするかどうか決定して、[完了] をクリックします。

(2) Windows NT 4.0

1. [スタート] > [設定] > [プリンタ] を選択します。
2. [プリンタ] フォルダ中の [プリンタの追加] をダブルクリックします。
3. [プリンタウィザード] が現れます、プリンタの種類を指定します。プリンタがローカルプリンタか、ネットワークプリンタかで手続きが異なります。
 - ローカルプリンタを使用する場合
 - 1) [このコンピュータ] を選択して、次に進みます。
 - 2) 使用するプリンタのポートを聞いてきます。該当するポートを選択し、[次へ >]をクリックします。
 - 3) プリンタの製造元を選び、その後プリンタ名を選択します。プリンタに付属のディスクを使用する場合は、[ディスク使用] をクリックして画面の指示に従います。
 - ネットワークプリンタを使用する場合
 - 1) [ネットワークプリンタサーバー] をチェックします。次へ進みます。
 - 2) ネットワークパスを直接入力するか、または [参照] をクリックして[プリンタの参照] ダイアログボックスで目的のプリンタを探し、選択します。
 - 3) プリンタのドライバが必要な場合は、ローカルPCにドライバをインストールします。プリンタの種類ダイアログが現れるので、製造元を選び、その後プリンタ名を選択します。プリンタに付属のディスクを使用する場合は、[ディスク使用] をクリックして画面の指示に従います。
4. プリンタの名前を変更する場合は、[プリンタ名] ボックスの中を変更します。『通常のプリンタとして使いますか?』のチェックボックスの [はい] をチェックして、[次へ >] をクリックします。
5. テスト印刷をするかどうか決定して、[完了] をクリックします。

(3) Windows XP

1. [スタート] > [プリンタとFAX] を選択します。
2. [ファイル] > [プリンタの追加] を選択します。
3. [プリンタの追加ウィザード] が現れます、プリンタの種類を指定します。プリンタがローカルプリンタか、ネットワークプリンタかで手続きが異なります。
 - ローカルプリンタを使用する場合
 - 1) [このコンピュータに接続しているローカルプリンタ] を選択して、次に進みます。
 - 2) 使用するプリンタのポートを聞いてきます。該当するポートを選択し、[次へ >]をクリックします。
 - 3) プリンタの製造元を選び、その後プリンタ名を選択します。プリンタに付属のディスクを使用する場合は、[ディスク使用] をクリックして画面の指示に従います。

■ ネットワークプリンタを使用する場合

- 1) [ネットワークプリンタ、またはほかのコンピュータに接続しているプリンタ] をチェックします。次へ進みます。
 - 2) ネットワークパスを直接入力するか、または [プリンタを参照する] をチェックし、ダイアログボックスで目的のプリンタを探し、選択します。
 - 3) プリンタのドライバが必要な場合は、ローカルPCにドライバをインストールします。プリンタの種類ダイアログが現れるので、製造元を選び、その後プリンタ名を選択します。プリンタに付属のディスクを使用する場合は、[ディスク使用] をクリックして画面の指示に従います。
4. プリンタの名前を変更する場合は、[プリンタ名] ボックスの中を変更します。『通常のプリンタとして使いますか?』のチェックボックスの [はい] をチェックして、[次へ >] をクリックします。
5. テスト印刷をするかどうか決定して、[完了] をクリックします。

6章 ネットワークアナライザの設定

6- 1 サポートしている GPIB(HP-IB) インターフェース

ADS 2003C では、以下の GPIB(HP-IB) インターフェース製品をサポートしています。

Windows 2000 / NT 4.0 / XP

製品名 / ドライバ	Part #
Agilent Technologies LAN/GPIB Gateway Interface / SICL ドライバ	E2050A/B Opt AG6
Agilent Technologies LAN/GPIB Gateway Interface / SICL ドライバ	E5810A
Agilent Technologies USB/GPIB SICL / VISA ドライバ	82357A
Agilent Technologies GPIB PCI カード / SICL ドライバ	82350A
Agilent Technologies GPIB EISA カード / SICL ドライバ	82341C
National Instruments AT-GPIB/TNT card / NI-488.2M ドライバ	776836-01
National Instruments PCMCIA-GPIB card / NI-488.2M ドライバ	777332-02
National Instruments PCI-GPIB/TNT card / NI-488.2M ドライバ / SICL ドライバ	777073-01

Hewlett-Packard 社製の弊社製品と同等の HP-IB 製品も含まれます。

6- 2 GPIB(HP-IB) インターフェースのインストール

ネットワークアナライザを使用するためには、GPIB(HP-IB) のセットアップをする必要があります。

GPIB(HP-IB) インターフェースを使用する場合は、インターフェース製品を PC に接続した後にそれぞれのドライバのインストールを行ってください。ドライバのインストールについては 8 - 4 節に例を掲載していますので、そちらをご覧ください。

インストールの詳細については、各 GPIB(HP-IB) インターフェース製品に付属のインストール手順書を参考にしてください。

- National Instruments 社の GPIB ボードのインストールについては、National Instruments GettingStarted マニュアルを参照してください。
- アジレント・テクノロジー社の GPIB インタフェースをインストールする場合は、Agilent Technologies GPIB Installation Guide を参照してください。

LAN/GPIB(LAN/HP-IB) ゲートウェイを使用する場合は、PC に SICL ドライバ(I/O Libraries for Windows) インストールする必要がありますのでご注意ください。I/O Libraries for Windows は、弊社 WEB サイト (<http://www.agilent.com/find/iolib> (英語)) からダウンロードすることができます。

注意 インストール中に、カードの symbolic name の設定があります。この項目は、後で Instrument Server の設定を行うときに使用しますので、忘れないようにしてください。通常、gpib0、または、hpib7 といった symbolic name が使用されます。

LAN/GPIB ゲートウェイを使用する場合は、lan[<LAN/GPIB GW の IPアドレス>]:<symbolic name> という表記になります。LAN/GPIB の場合には標準の symbolic name は hpib となっています。

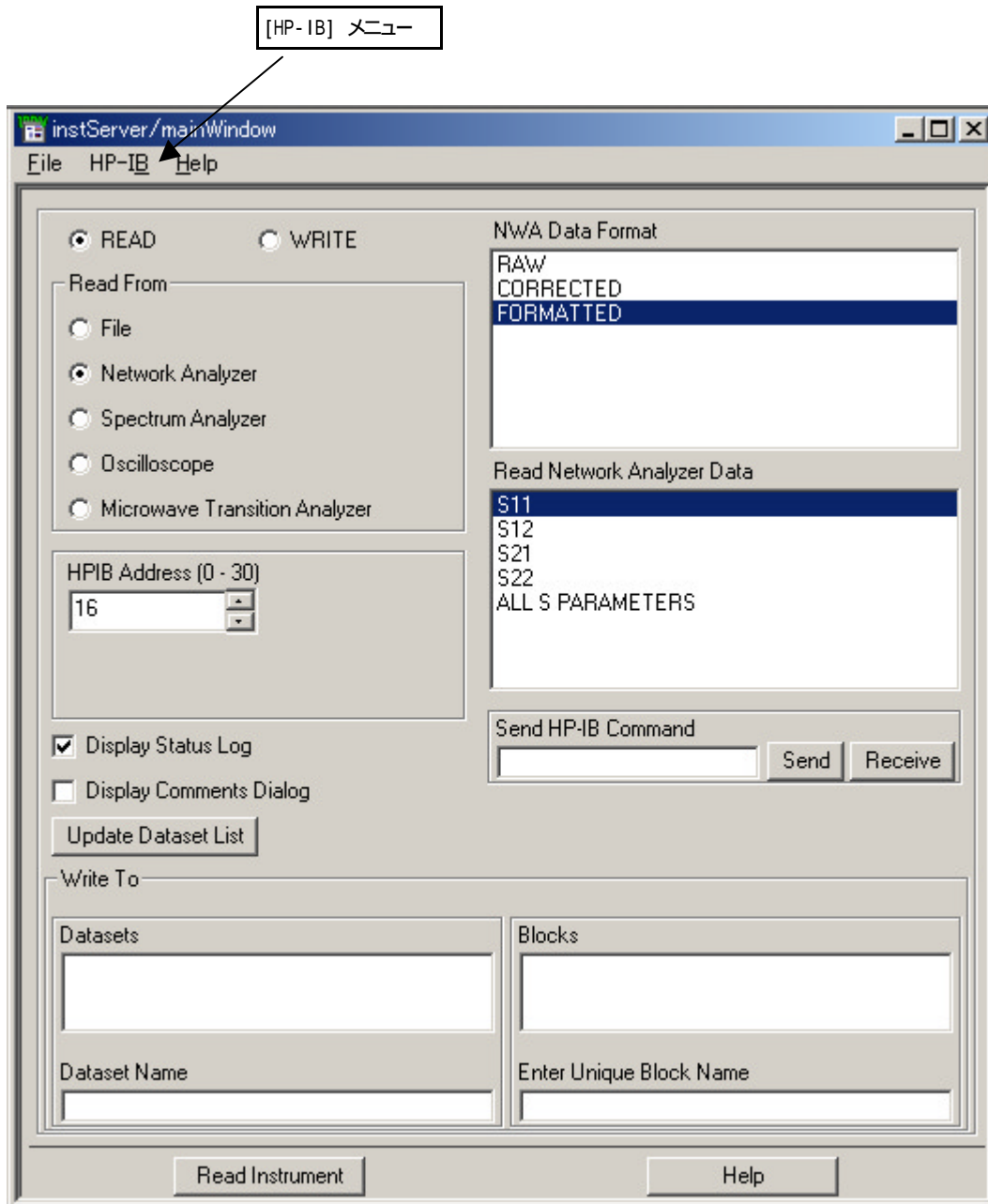
(例：lan[192.168.0.10]:hpib)

6- 3 測定セットアップ (Instrument Server の設定)

ADS 2003C では Instrument Server を介して、各測定器へのデータの書きこみ・読み込みを行います。

Instrument Server は、Schematic ウィンドウの [Window] > [File/Instrument Server] メニューから開くことができます。

[InstServer/mainWindow] ウィンドウの [HP-IB] メニューで、Symbolic name と Timeout の設定をします。LAN/GPIB ゲートウェイを使用する時の Symbolic name は、lan[192.168.0.10]:hpib のようになります。



7章 動作確認

7-1 ユーザ設定の確認

ADS 2003C を起動する前に、ユーザの設定が完了しているか確認をします。

ADS を起動するには、ライセンスの設定を行う必要があります。環境変数に AGILEESOFD_LICENSE_FILE が正しく設定されているか、確認してください。設定されていない場合は、4 - 7節をご覧になり、設定を行ってください。

お持ちのライセンスがパッケージ(ライセンス・バンドル)の方は、License Preference Tool から使用するライセンスを設定する必要があります。

注意 License Preference Tool は、ライセンス・バンドル形式のライセンスをご利用になっている方のみに必要な作業です。それ以外の通常のライセンスをご利用になっている場合は、7 - 2節にお進みください。

ADS 2002C 以前のバージョンで使用されていたライセンス・パッケージは、ADS 2003A からライセンス・バンドルにシステムが変更されました。ライセンス・バンドルからライセンスを取得する場合は、必ず License Preference Tool で作業を行う必要がありますので、ご注意ください。License Preference Tool で使用するライセンス・バンドルを選択した後、ADS を起動してください。

注意 License Preference Tool で選択したライセンス・バンドルの情報は各ユーザごとに保存されません。次に ADS を立ち上げる場合で、使用するライセンス・バンドルを変更する必要がない場合は、License Preference Tool を起動する必要はありません。

(1) License Preference Tool の起動

License Preference Tool を起動するには、以下の二つの方法があります。

License Preference Tool

[スタート] メニューから、[プログラム](Windows XP の場合は、[すべてのプログラム]) > [Advanced Design System 2003C] > [ADS Tools] > [License Preference Tool] を選択することで、License Preference Tool が起動します。

ADS 起動用ショートカット

ADS の起動用ショートカットを編集することで、License Preference Tool を起動することができます。

注意 この設定を行うと ADS を起動する度に License Preference Tool が起動します。

1. 起動用ショートカットのプロパティを開く

デスクトップアイコンから起動する場合は、ADS 起動用デスクトップアイコンのプロパティを開き、デスクトップの ADS 起動用のアイコン上で、マウスボタンを右クリックし、プロパティを選ぶと開くことができます。

Advanced Design System プログラムグループから起動する場合は、まずタスクバー上でマウスボタンを右クリックし、プロパティを選択します。詳細タブを選択すると、詳細ボタンがありますので、これをクリックします。エクスプローラのスタートメニューのフォルダが開きますので、ここから [プログラム] (Windows XP の場合は [すべてのプログラム]) > [Advanced Design System] プログラムグループを開き、Advanced Design System 起動用ショートカット上で、マウスの右ボタンをクリックし、プロパティを選択します。

2. 作業フォルダを変更します

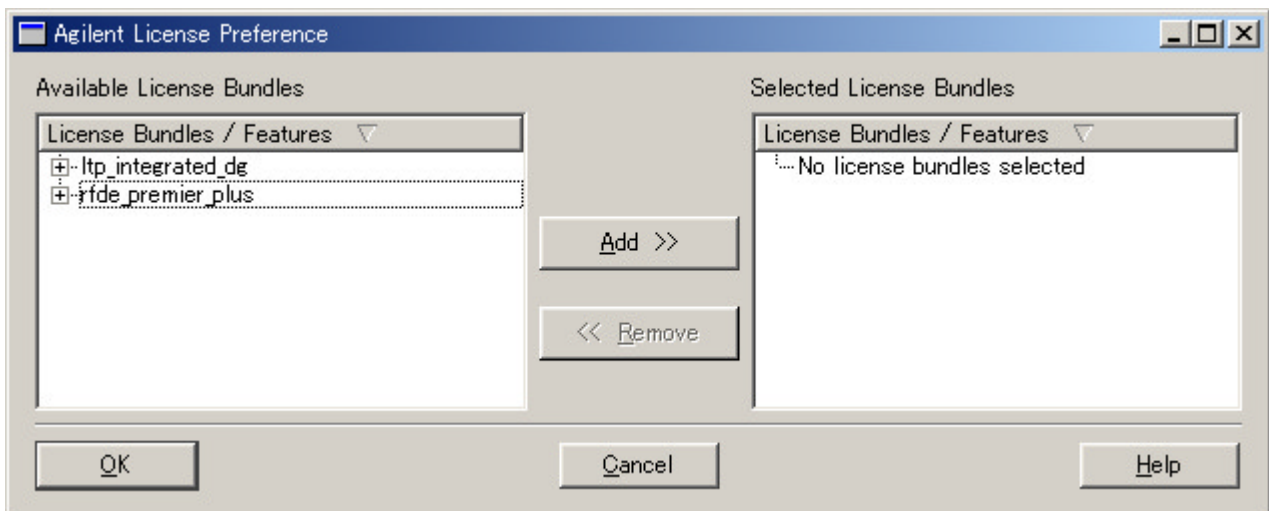
ショートカットのプロパティウインドウに、[リンク先] フィールドがありますので、ここに “-p” を加えます。例えば、ADS のインストールディレクトリが “C:¥ADS2003C” の場合、[リンク先] フィールドには “C:¥ADS2003C¥bin¥ads.exe” とありますので、これを、

```
C:¥ADS2003C¥bin¥ads.exe -p
```

と編集し、[OK] ボタンをクリックします。

(2) ライセンス・バンドルの選択

以下のような、License Preference Tool が起動します。



1. [Available License Bundles] に利用可能なライセンス・バンドル一覧が表示されます。バンドル名の左側の + マークをクリックすると、バンドルに含まれるライセンス一覧が表示されますので、使用したいライセンス・バンドルを探します。

2. [Available License Bundles] から、使用したいライセンス・バンドルを一つだけ選択し、[Add] ボタンをクリックすると、選択したライセンスバンドルが [Selected License Bundles] 欄に移動します。
3. ライセンス・バンドルを変更したい場合は、[Selected License Bundles] 欄からライセンス・バンドルを選択して、[Remove] ボタンをクリックします。
4. よろしければ、[OK] ボタンを押して終了します。

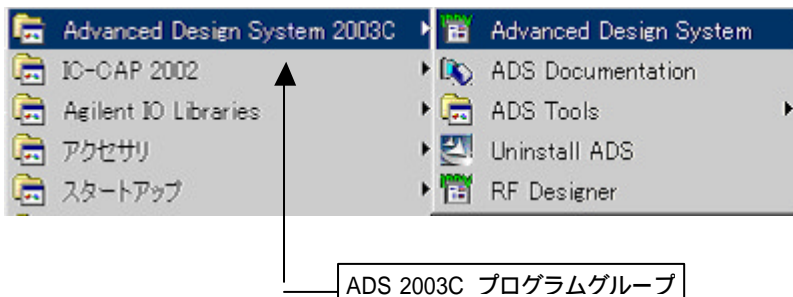
参考 ここで設定した License Preference は以下のレジストリに保存されており、以後は License Preference Tool を起動しなくても、そのライセンス・バンドルを使用します。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\FLEXIm License Manager\AGILEESOFD_LICENSE_PREFERENCE

7- 2 アプリケーションの起動

ADS 2003C を起動します。

[スタート] メニューから、[プログラム](Windows XP は[すべてのプログラム]) > [Advanced Design System 2003C] を選択していくと、ADS 2003C プログラムグループが作成されています。



目的のメニューを選択してマウスをクリックすると、それぞれのプログラムが起動します。

メニュー中の“Advanced Design System”が、通常の ADS 2003C の起動メニューとなります。

メニューの中に“RF Designer”がありますが、これは Designer 製品(Lite版)専用の起動メニューです。Designer を起動する場合は、専用のコードワードが必要ですので、コードワードをお確かめの上、ご使用下さい。Designer 製品の場合は、コードワードに“lite”という文字がついています。(例: Ads Schematic lite 等)

ADS 2003C プログラムグループには以下のショートカットフォルダが作成されています。

■ ADS Tools

“Adaptive Wave Comparator ”, “Digital Filter Designer ”, “DSP Synthesis ”, “E-Syn ” , “License Information Tool ” , “License Preference Tool ” , “LineCalc ” , “Microwave Design System Import ” , “Ptolemy Modelbuilder Shell ” , “Series IV Import ” , “SPICE Model Generator ”等のショートカットが作成されています。ただし、インストール時にこれらを選択していなかった場合は、作成されていません。

■ ADS Documentation

オンラインマニュアルを開きます。

■ Advanced Design System

ADS 2003C の起動メニューです。通常はこのメニューから ADS 2003C を起動します。シミュレータ等の使い方については、各 User’s Guide などを参照してください。

■ RF Designer

RF Designer の起動メニューです。RF Designer製品(Lite版)を起動する時に使用します。詳しくは、Advanced Design System の User’s Guide をお読みください。

■ Uninstall ADS

アンインストーラが起動します。ADS 2003C を削除するときに使用します。

7- 3 ADS 2003C が起動しない時

ADS 2003C が起動しない時の対処方法を説明します。ADS 2003C が起動しない場合の原因の殆どは、ライセンスのセットアップの誤りです。まず、ライセンスが正しく取得できているかをお確かめ下さい。ライセンスの確認方法を含めた対処方法を以下に挙げます。

(1) 環境変数は正しく設定されていますか？

環境変数 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” は正しく設定されているでしょうか？ “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” で、実際に設定された場所に、license.lic ファイルがあるかどうかをもう一度ご確認ください。環境変数は「ユーザーの環境変数」ではなく、「システム環境変数」の欄に設定するようにしてください。環境変数の詳細について 4 - 7 節をご覧ください。

(2) ライセンスファイルは正しく設定されていますか？

- (i) “license.lic” ファイル中の SERVER の行は正しいですか？(フローティングライセンスの場合) ホストネーム・host-id(FLEXid) をもう一度ご確認ください。詳しいことは 4 - 5 節 3. を参照してください。
- (ii) “license.lic” ファイル中の VENDOR の行は正しいですか？(フローティングライセンスの場合) サーバマシン上の正しいベンダーデーモンのパスを入力してください。詳細は 4 - 6 節(4)をご覧ください。
- (iii) ライセンスファイルは正しいディレクトリにおかれているでしょうか？ 環境変数 “AGILEESOFD_LICENSE_FILE” の内容と、実際の license.lic ファイルのおかれている場所を確認してください。環境変数については 4 - 7 節を参照してください。
- (iv) 正式なライセンスファイル以外のテキストファイルが置かれていないでしょうか？ 例えば、以前のライセンスファイル(license.dat)などがライセンス設置フォルダにあると、ADS 2003C はそちらも認識し、ライセンス取得に失敗する場合があります。ライセンスフォルダ(C:\%ADS2003C%\licenses)には、現在有効なライセンスファイル以外のファイルはバックアップ用も含めて置かないようお願いいたします。

(3) ハードウェアキーは正しく接続されていますか？

ハードウェアキーの接続/確認方法については 4 - 5 節を参照してください。

(4) サーバマシンでライセンスデーモンは動作していますか？(ライセンスサーバでの設定)

PC 一台だけでノードロックライセンスを使用している場合は、ライセンスデーモンを起動する必要はありません。フローティングライセンス及び、ノードロックのライセンスを他のコンピュータから供給している場合は、この項目をお確かめ下さい。

デーモンを起動していない場合は 4 - 9 節を参考にデーモンの起動を行ってください。

ライセンスデーモンの動作確認については、8 - 10 節を参照してください。

(5) コンピュータの時間は正確に合っているか？

コンピュータの時刻が正確でないと ADS 2003C が起動しない場合があります。コンピュータの時刻を正しく設定しなおしてください。

[スタート] メニューから、[設定] > [コントロールパネル] を開き、[日付と時刻] のアイコンをダブルクリックすると調べることができます。

以上の項目を調べても原因が分からない時は、サポートセンターにご連絡を下さい。原因を特定するために、ソフトウェアのバージョン・OS のバージョン・エラーメッセージ等の症状をあらかじめ整理して、正しくお伝え下さい。また、ログファイルの作成をお願いする場合がございますので、8 - 9 節「デバッグモードでの起動」の方も目を通しておいてください。また、ご質問の際にFAXをご利用される場合には、この手順書の最後に付属している、「EDAテクニカルサポート サポート依頼 FAX 用紙」が便利です。

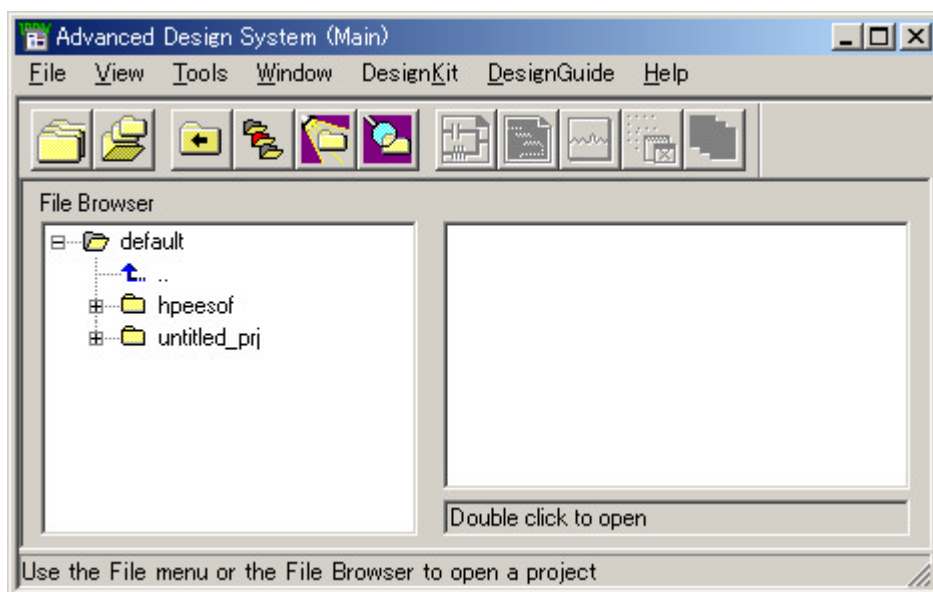
7- 4 サンプルファイルでの動作確認

次にサンプルファイルを使って、ADS 2003C が正しくインストールされたかを確認します。インストール時にサンプルファイルのインストールを行わなかった場合は、ここでの手順(2)以降は進められません。また、お持ちのライセンスの種類によって、シミュレーションを実行できない場合がありますので、ご注意ください。

(1) ADS 2003C の起動

[スタート] > [プログラム](Windows XP の場合は、[すべてのプログラム]) > [Advanced Design System 2003C] > [Advanced Design System] を選択して、アプリケーションを起動します。ADS 2003C のバージョン等が表示されたタイトルバーが表示され、左上に Advanced Design System のメインウィンドウが現れます。





(2) サンプルプロジェクトの読み込み

ここでは、すでにインストールされているサンプルファイルを読み込みます。メインウィンドウから [File] > [Example Project] を選択すると、サンプルファイルのあるディレクトリから、開きたいプロジェクトを選択することができます。

適当なプロジェクトを選択します。ただし、サンプルプロジェクトで使用されているライセンスが揃っていない場合は、この後のシミュレーションを行うことができませんので、ご注意ください。

- (3) プリンタに回路図を出力してみます。Schematic ウィンドウ(右上のウィンドウ)で [File] > [Print] を選択しプリントの設定をした後、[OK] をクリックすると回路図がプリントされます。
- (4) シミュレーションを実行してみます。Schematic ウィンドウで、[Simulate] > [Simulate]を選択すると、シミュレーションが実行されます。ステータスウィンドウが現れ、時間などが表示されます。正しくシミュレーションが行えるか確認してください。

注意 この時お持ちのライセンスの種類によっては、ライセンスエラーが発生する場合があります。

参考 シミュレーションの実行時にメモリ不足エラーが出た場合は、仮想メモリを増やす必要があります。本ソフトウェアでは仮想メモリは最低 300MByte/推奨 512MByte以上となっています。仮想メモリの設定についての詳細は 2 - 4節 (4)に掲載されています。こちらをご覧ください。

- (5) メインウィンドウで [File] > [Exit Advanced Design System] を選択して ADS 2003C を終了します。

8章 付録

8- 1 ファイルシステムの共有

[1] はじめに

この節では、Windows によるファイルシステムの共有について、説明します。
ファイルシステムの共有とは、あるマシン(ファイルサーバマシン)に搭載されているドライブ上のファイルをネットワークを通じて他のマシンからも利用することができるようにするシステムのことです。

[2] 共有ファイルシステムを開始するには

共有ファイルシステムを使うには、まず接続される側のマシン(ファイルサーバマシン)側での設定を行っておく必要があります。ただし、Windows NTの場合は、Administrator等の設定変更のできる権限のあるユーザでログインして作業を行ってください。

1. Windows NT 4.0 の場合は、共有サービスを使える状態になっているかを確認します。共有を行えるようにするには、以下の手続きが行われている必要があります。

■ Windows NT 4.0

[スタート] > [設定] > [コントロールパネル] > [サービス] で、[サービス] ダイアログボックスを開きます。
[サービス] ボックスの中の [Server] サービスを開始します。

2. 次に、目的のドライブのディレクトリを共有可能にします。

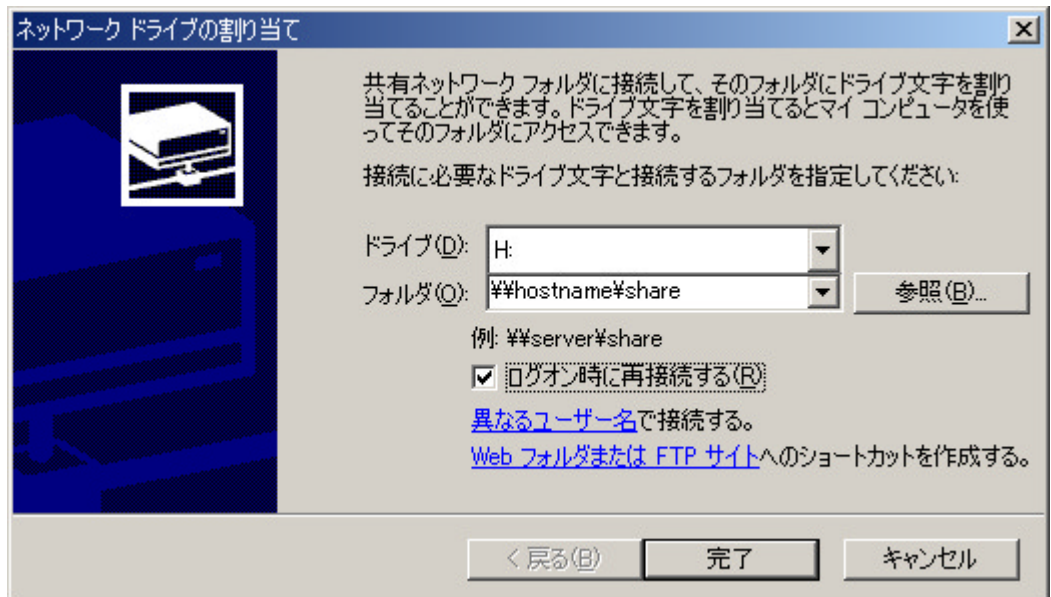
■ Windows 2000 / NT 4.0 / XP

- 1) [スタート] > [プログラム] > [アクセサリ] > [エクスプローラ] で、エクスプローラを起動します。
- 2) 共有を行いたいディレクトリを選択し、マウスの右ボタンをクリックして [プロパティ] を選択し、ディレクトリのプロパティを表示します。
- 3) [共有] タブを選択して、[共有する] チェックボックスをチェックします。この時、共有名を覚えておいてください。クライアント側で接続を行う時に必要となります。
- 4) [OK] をクリックして、終了します。

共有が可能になっているディレクトリやドライブは、ファイルマネージャーやエクスプローラに表示されている名前の横のアイコンに手のマークがついています。

[3] 共有ドライブに接続を行うには
クライアント側の設定は次の様な手順になります。

- Windows 2000
[スタート] メニューの [プログラム] > [アクセサリ] > [エクスプローラ] を選択して、エクスプローラを起動します。[ツール] メニューの [ネットワークドライブの割り当て] を選択します。



- Windows NT 4.0
[スタート] メニューの [プログラム] > [Windows NT エクスプローラ] を選択して、エクスプローラを起動します。[ツール] メニューの [ネットワークドライブの割り当て] を選択します。
- Windows XP
[スタート] メニューの [すべてのプログラム] > [アクセサリ] > [エクスプローラ] を選択して、エクスプローラを起動します。[ツール] メニューの [ネットワークドライブの割り当て] を選択します。

クライアントマシンで、サーバマシン上の ADS 2003C がインストールされているドライブに接続します。

1. [ドライブ] フィールドでローカルマシンのどのドライブに割り当ててるかを選択します。
2. [パス] フィールドに接続したい共有名を入力します。
3. [ログオン時に再接続] にチェックを入れ、[OK] をクリックします。

共有のパスは“%%(ホスト名)%(共有名)”というフォーマットになっています。
(ホスト名)はファイルサーバマシンのホスト名で、(共有名)は、サーバ側で設定した共有名です。例えばサーバのホスト名が“hostname”、共有名が“share”とすると、パスは“%%hostname%share”となります。

8- 2 TCP/IP, IPX/SPXプロトコルのインストール

[1] はじめに

TCP/IP プロトコルがインストールされていない場合は、ADS 2003C の一部機能が正しく動作しません。
TCP/IP プロトコルは必ずインストールしてください。
また、ライセンスを LAN-ID で取得している場合は、IPX/SPX プロトコルがインストールされている必要があります。該当する場合はインストールしてください。

[2] TCP/IP が正しく構成されているか確認する方法

1. コマンドプロンプトを起動します。

■ Windows 2000

[スタート] > [プログラム] > [アクセサリ] > [コマンドプロンプト] をクリックします。

■ Windows NT 4.0

[スタート] > [プログラム] > [コマンドプロンプト] をクリックします。

■ Windows XP

[スタート] > [すべてのプログラム] > [アクセサリ] > [コマンドプロンプト] をクリックします。

2. 次のコマンドを実行して、TCP/IP が正しく動作しているかの確認を行います。

```
> ping [hostname]
```

1) 最初に自分自身に ping コマンドをかけてみます。

ここでは、使用しているコンピュータのホスト名を myhost、その IP アドレスを 192.168.0.10 とした時の実行例で示しています。実際にはご使用になられているコンピュータ固有の値が出力されます。

```
C:¥> ping myhost

Pinging myhost.agilent.com [192.168.0.10] with 32 bytes of data:
Reply from 192.168.0.10: bytes=32 time<10ms TTL=32
Reply from 192.168.0.10: bytes=32 time=1ms TTL=32
Reply from 192.168.0.10: bytes=32 time=1ms TTL=32
Reply from 192.168.0.10: bytes=32 time=1ms TTL=32
```

ping コマンドの実行例 (1)

2) 次に、別のコンピュータのホスト名を入力して確認します。

ここでは、別のコンピュータのホスト名に `anotherhost` を使っています。実際には、存在するホスト名で試してください。

```
C:¥> ping anotherhost

Pinging anotherhost.agilent.com [192.168.0.11] with 32 bytes of data:
Reply from 192.168.0.11: bytes=32 time=1ms TTL=255
Reply from 192.168.0.11: bytes=32 time=1ms TTL=255
Reply from 192.168.0.11: bytes=32 time=1ms TTL=255
Reply from 192.168.0.11: bytes=32 time=1ms TTL=255
```

ping コマンドの実行例 (2)

TCP/IPが正しく動作していれば、上記の実行例の様に

Reply from

という表示が返ってきます。何も表示が返ってこなかったり違う表示が現れた場合は、LANケーブルがきちんとつながっているか、TCP/IPの構成が正しく行われているかをご確認ください。

なお、使用しているコンピュータのホスト名がわからない時は以下の手順で調べてください。

[3] 使用しているコンピュータのホスト名の調べ方

■ Windows 2000

1. [スタート] > [設定] > [コントロールパネル] をクリックして開きます。
2. [システム] アイコンをダブルクリックして、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
3. [ネットワークID] タブを選択すると [フルコンピュータ名] が書かれています。

■ Windows NT 4.0

1. [スタート] > [設定] > [コントロールパネル] をクリックして開きます。
2. [ネットワーク] アイコンをダブルクリックして、[ネットワーク] ダイアログボックスを開きます。
3. [識別] タブを選択すると [コンピュータ名] が書かれています。

■ Windows XP

1. [スタート] > [コントロールパネル] をクリックして開きます。
2. [パフォーマンスとメンテナンス] を開き、[システム] アイコンをクリックして、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
3. [コンピュータ名] タブを選択すると [フルコンピュータ名] が書かれています。

[4] TCP/IP(IPX/SPX) プロトコルのインストールと設定

設定を行う前に、ご利用になっているネットワークの管理者に相談して、DHCP および DNS が利用できるかどうか、マシンの IP アドレス、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイ等の情報・パラメータを確かめておいてください。

■ Windows 2000

1. [スタート] > [設定] > [コントロールパネル] をクリックし、その中の [ネットワークとダイヤルアップ接続] アイコンをダブルクリックします。
2. [ローカルエリア接続] アイコンをダブルクリックし、[ローカルエリア接続の状態] ダイアログの [プロパティ] をクリックします。
3. チェックマークのついたリストボックス内に「インターネット プロトコル(TCP/IP)」があれば、それを選択し、[プロパティ] ボタンをクリックします。
もしも、なかった場合は、[追加] ボタンをクリックし、[ネットワークプロトコル] フィールドの中から [TCP/IP] プロトコルを選択して、[OK] をクリックします。
4. [インターネット プロトコル(TCP/IP)のプロパティ] ダイアログボックスで、ネットワーク環境に合った設定を行ってください。

■ Windows NT 4.0

1. [スタート] > [設定] > [コントロールパネル] をクリックし、その中の [ネットワーク] アイコンをダブルクリックします。
2. [プロトコル] タブを選択し、[ネットワークプロトコル] フィールドに [TCP/IP] プロトコルがあれば、それを選択し、[プロパティ] ボタンをクリックします。
もしも、なかった場合は、[追加] ボタンをクリックし、[ネットワークプロトコル] フィールドの中から [TCP/IP] プロトコルを選択して、[OK] をクリックします。
3. [Microsoft TCP/IPのプロパティ] ダイアログボックスで、ネットワーク環境に合った設定を行ってください。

■ Windows XP

1. [スタート] > [コントロールパネル] > [ネットワークとインターネット接続] をクリックし、その中の [ネットワーク接続] アイコンをクリックします。
2. [ローカルエリア接続] アイコンをダブルクリックし、[ローカルエリア接続の状態] ダイアログの [プロパティ] をクリックします。
3. チェックマークのついたリストボックス内に「インターネット プロトコル(TCP/IP)」があれば、それを選択し、[プロパティ] ボタンをクリックします。
もしも、なかった場合は、[追加] ボタンをクリックし、[ネットワークプロトコル] フィールドの中から [TCP/IP] プロトコルを選択して、[OK] をクリックします。
4. [TCP/IPのプロパティ] ダイアログボックスで、ネットワーク環境に合った設定を行ってください。

以上が終わったら [2] の TCP/IP の構成されているかの確認を行います。

IPX/SPX プロトコルが必要な場合は、上記 TCP/IP と同様の手順で、プロトコルの中から IPX/SPX を選択してインストールしてください。

8- 3 複数個の Imgrd を自動起動する方法

[1] はじめに

Windows 2000 / NT 4.0 / XP で複数個の Imgrd を自動起動する方法を解説します。

これは、ADS 2003A, 2003C と、それ以前のバージョンの ADS のライセンスサーバを別々のライセンスファイルを用いて、別々に起動するための方法です。ライセンスファイルを一つにまとめて、一つの Imgrd で使用する場合は、4 - 13節の作業のみを行ってください。

参考 Imgrd を別々に起動する場合は、旧バージョンと新バージョンのコードワードファイルを別々に管理できるため、違うバージョンのライセンスサーバに影響を与えないでコードワードの更新作業を行えるなどの利点があります。

[2] 二つ目の Imgrd 自動起動のサービスをインストールします

ここでは、既に x- xx節の作業手順で、一つ目の ADS 2003A, 2003C 用ライセンスサーバが起動しているものとして説明します。ここでは、二つ目の ADS 2002 / ADS 2001 以前のライセンスサーバを起動する方法を示します。

1. コマンドプロンプトを起動します。
2. コマンドラインから以下のコマンドを実行します。

<書式> cd <Installation directory>%licenses%bin

<例 1 > cd C:%ADS2001%licenses%bin

<Installation Directory> は、ADS 2001 がインストールされているディレクトリを指します。標準的なインストールを行った場合は、上記のコマンドは、“cd C:%ADS2001%licenses%bin” と入力することになります。

更に次のコマンドを実行し、サービスのインストールを行います。

<書式> install ? n <サービス名> ? e <Imgrdのパス> -c <license.datのパス>
-l <ログのパス>

<例 1 > install ? n "FLEXIm for hpeesofd" ? e C:%ADS2001%licenses%bin%Imgrd.exe
-c C:%ADS2001%licenses%license.dat ? l C:%ADS2001%licenses%flex2.log

<Imgrdのパス> は Imgrd.exe をフルパスで記述します。

<license.datのパス> は license.dat ファイルのフルパス指します。この場合は、ADS 2001 用の、ベンダデーモンが hpeesofd のファイルです。

<ログのパス>は FLEXIm のログファイルのパスを表します。

下記が実際のコマンドを実行したときの実行例です。

```
C:¥> cd C:¥ADS2001¥licenses¥bin
C:¥ADS2001¥licenses¥bin> install -n "FLEXIm for hpeesofd" -e C:¥ADS2001¥licenses¥
bin¥lmgrd.exe -c C:¥ADS2001¥licenses¥license.dat -l C:¥ADS2001¥licenses¥flex2.log
FLEXIm License Server is successfully installed as one of your Windows NT
Services. Some handy tips:

    * To start FLEXIm License Server, use the Services icon
      from the Control Panel.
    * FLEXIm License Server will be automatically started
      every time your system is booted.
    * FLEXIm service log file is lmgrd.log in your NT system
      directory.
    * To remove FLEXIm License Server, type 'install remove'

*****
The permissions of one of the files that you just installed seems
to have the correct settings.
C:¥ADS2001¥licenses¥bin>
```

サービスインストールの実行例

注意 ADS 2002 / 2002C / 2001 など、以前の ADS のバージョンでは、サービスインストール命令は、“install”でしたが、ADS 2003Cでは、“installs”に変更になっています。

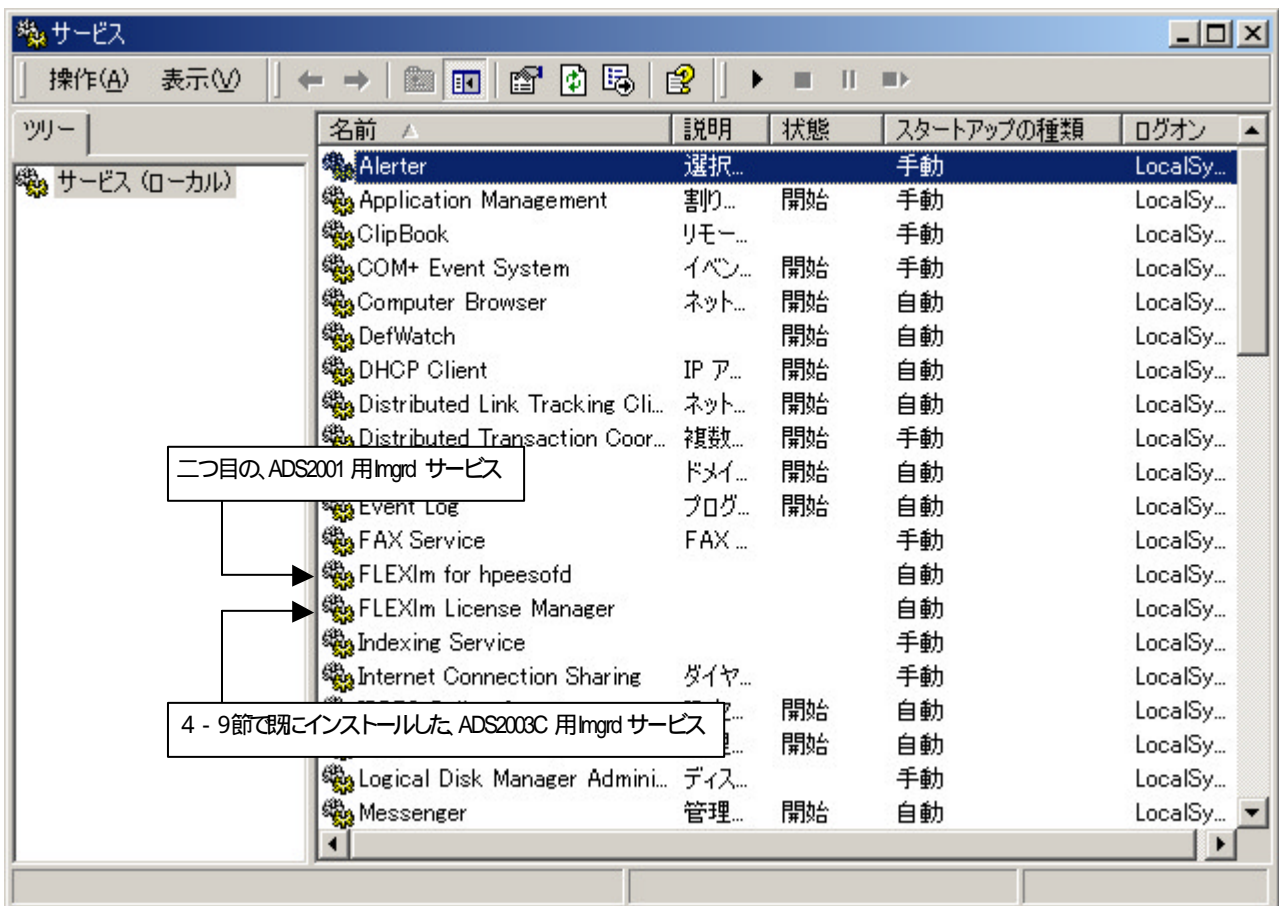
3. サービスを確認します。

■ Windows 2000 の場合

[スタート] > [設定] > [コントロールパネル] で、コントロールパネルを開きます。

[管理ツール] アイコンをダブルクリックして開きます。

[サービス] アイコンをダブルクリックすると、[サービス] ダイアログが現れます。



■ Windows NT 4.0 の場合

[スタート] > [設定] > [コントロールパネル] で、コントロールパネルを開きます。

[サービス] アイコンをダブルクリックすると、[サービス] ダイアログが現れます。

■ Windows XP の場合

[スタート] > [コントロールパネル] > [パフォーマンスとメンテナンス] > [管理ツール] アイコンをダブルクリックして開きます。

[サービス] アイコンをダブルクリックすると、[サービス] ダイアログが現れます。

4. サービスの開始と、自動起動の設定

install コマンドを実行した段階ではサービスがインストールされただけでまだ実行はされていません。実行するには、サービスを選択して、[開始]ボタンをクリックします。
詳しい設定方法は、4-10節を参照してください。

注意 開始ボタンをクリックした時にもし、エラーメッセージが表示されてサービスが開始されなかった場合は、インストールに失敗している可能性があります。“lmgrd.exe”ファイルやライセンスファイルのパスを今一度ご確認ください。エラーが出た場合は、次の「lmgrd デモンの自動起動サービスの削除」を参考に、一度サービスを削除した後、“lmgrd.exe”のパスを確認のうえ、再度インストールを行ってください。

[3] ライセンスデーモンの自動起動サービスの削除方法

1. コマンドプロンプトを起動します。
2. コマンドラインから以下のコマンドを実行します。

<書式> cd <Installation directory>%licenses%bin

<例1> cd C:%ADS2001%licenses%bin

3. 以下のコマンドでサービスを削除します
この時、サービス名を忘れずにつけてください。サービス名が指定されていない場合は、4-10節で先にインストールした ADS 2003C 用の自動起動サービスが削除されてしまいます。

<書式> install ? n <サービス名> -r

<例1> install ? n "FLEXlm for hpeesofd" -r

4. 以上で、次にライセンスサーバマシンを起動した時には自動的に hpeesofd 用の lmgrd は起動しなくなります。同時に次からライセンスサーバマシンで lmgrd を起動しなければ、ライセンスクライアントマシンで ADS 2001 の起動はできなくなりますので、ご注意ください。

8- 4 GPIB(HP- IB)ボードのインストール

[1] はじめに

PC 用の GPIB(HP- IB)インターフェイスのインストール方法について説明します。

[2] インターフェイスボードのインストール

ボードのマニュアルを参考にして、インターフェイスボードの各パラメータの設定を行います。この時、他のボードと重複しないように I/O アドレス、メモリアドレス、IRQ、DMAを設定してください。設定方法はボードによって異なり、ボード上のスイッチで変更するもの、ソフトウェアで設定するものなどがあります。

設定が終了したら、ボードを PC のスロットに差し込みます。

注意 パラメータの設定方法の詳細については、各ボードのハードウェアマニュアルを参照してください。

[3] GPIB(HP- IB)インターフェイスのドライバのインストール

GPIB (HP- IB)インターフェイス付属のドライバを PC にインストールします。ドライバはボードに付属のマニュアルにしたがってインストールを行います。

例えば、ドライバの入ったフロッピーディスクの1枚目の "setup.exe" を実行するようであった場合は、

■ Windows 2000 / NT 4.0 / XP

1. フロッピーディスクの一枚目をドライブに入れます。
2. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] を選択します。
3. フィールド内で次のコマンドを、実行します。
> a:¥setup
4. 起動したセットアッププログラムの指示にしたがってインストールを行います。
5. ドライバは必ず、ご使用になっている OS・ハードウェアに合ったものインストールしてください。

参考 National Instruments 社のホームページが <http://www.ni.com/> にあります。こちらから AT-GPIB カードの最新のドライバを入手することができますので、ご利用ください。

8- 5 Advanced Design System プログラムの消去 (アンインストール)

[1] はじめに

この節では、必要のなくなった Advanced Design System をハードディスクから消去するときの手順について説明します。

[2] ライセンスファイルのバックアップ

Advanced Design System を消去する前に、ライセンスファイルのバックアップをとります。ライセンスファイルのバックアップは必ずとってください。バックアップをとる方法、使用するメディアは問いませんが、ここではフロッピーに MS-DOS コマンドを用いて行う方法について説明します。

1. フロッピーをフロッピードライブに入れます。
2. コマンドプロンプトを起動します。
3. ライセンスファイル(`license.lic` または `license.dat`)のあるディレクトリへ移動します。
(ここでは `C:\%ADS2003C%\licenses` にあるとします。)

```
> cd c:\%ADS2003C%\licenses
```

4. 次に `license.lic` ファイルをフロッピーにコピーします。

```
> copy license.lic a:*
```

5. `exit` と入力して、コマンドプロンプトを終了します。

[3] アンインストーラの起動

Advanced Design System を消したいときは、セットアップ時に自動的にインストールされている“Uninstall ADS”メニューで実行します。起動方法は、Advanced Design System のアプリケーションを起動するときと同じように起動します。

[スタート] > [プログラム] (XP の場合は、[すべてのプログラム]) > [Advanced Design System 2003C] > [Uninstall ADS] をクリックします。(インストールされている ADS のバージョンによって、プログラムグループ名 “Advanced Design System 2003C” は異なります。)

後は、アンインストーラの指示にしたがって、作業を進めていきます。

アンインストーラは [コントロールパネル] の [アプリケーションの追加と削除] からも行えます。どちらを起動しても同じようにアンインストールが行えます。

上記手順でアンインストーラが起動しなかった場合は、アンインストールしたい ADS のフォルダごと削除してください。この場合、ライセンスファイルのバックアップを忘れないようお気をつけください。

8- 6 複数のバージョンの ADS を使用する方法

[1] はじめに

この節では、複数のバージョンの ADS (例えば、ADS2001 と ADS 2003C) を起動する方法について解説します。

[2] 複数のバージョンの ADS を使用するには？

複数のバージョンの ADS を使用する場合は、インストール時のホームディレクトリの設定を異なったパスに設定する必要があります。これはそれぞれのバージョンの ADS が使用する設定ファイルなどが、同じディレクトリで共有されることによる障害を防ぐためです。

例えば、ADS 2001 と ADS 2003C を同じ PC で使用したい場合を考えます。ADS 2001 が既にインストールされており、ホームディレクトリが `C:\users\defaults\ads2001` に設定されているとすると、ADS 2001 はこのディレクトリの下にプロジェクトファイルなどを保存します。よって、同じ PC に ADS 2003C をインストールしたい場合は、ADS 2003C のホームディレクトリを、ADS 2001 用のディレクトリと異なるディレクトリ(例えば `C:\users\defaults\ads2003C`)に設定します。

この場合は、ADS 2001 と ADS 2003C をどちらも正しく使用することができます。

[3] ホームディレクトリの設定を変更するには？

ホームディレクトリの設定を ADS のバージョン毎に設定しなおすには、レジストリを変更する方法と、各 ADS 毎の起動用のバッチファイルを記述する方法があります。

以下にその方法を説明します。

■ レジストリを変更する方法

まず、古いバージョンの ADS のホームディレクトリを設定します。ここでは、ADS 2001 の場合で説明します。(ADS 2001 は、ADS Version.1.7 にあたります)

1. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] を選択します。
2. [名前] 欄に、"regedit"と入力し、[OK] ボタンをクリックします。
3. レジストリエディタが起動しますので、HKEY_LOCAL_MACHINE > SOFTWARE > Agilent > ADS > 1.7 > eeenv を選択します。
4. HOME という名前のキーがありますので、これをホームディレクトリ(例えば、`C:\users\defaults\ads2001`)に変更します。
5. レジストリエディタを終了します。

次に、新しいバージョンの設定を同様に行います。ここでは、ADS 2003C の場合で説明します。(ADS 2003C は、ADS Version.2.5 にあたります)

1. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] を選択します。
2. [名前] 欄に、"regedit"と入力し、[OK] ボタンをクリックします。
3. レジストリエディタが起動しますので、HKEY_LOCAL_MACHINE > SOFTWARE > Agilent > ADS > 2.5 > eeenv を選択します。

4. HOME という名前のキーがありますので、これをホームディレクトリ(例えば、
"C:\users\defaults\ads2003C ")に変更します。
5. レジストリエディタを終了します。
6. ホームディレクトリを変更したら、起動時にそのフォルダが開かれるように、ADS 起動用ショート
カットの作業フォルダを変更します。この作業は8-7節を参考にしてください。

■ バッチファイルを作成する方法

バッチファイルで環境変数" HOME "の値を切り替えることによって、複数のバージョンの ADS
を使用することができます。ここでは、そのバッチファイルのサンプルを掲載します。

1. ADS 2001 起動用バッチファイル

```

REM *****
REM * ADS 2001 Startscript
set HOME=C:\users\defaults\ads2001
set LM_LICENSE_FILE=27000@edasvr
set HPEESOF_DIR=C:\ADS2001
set COMPL_DIR=%HPEESOF_DIR%
set DOCS_DIR=%HPEESOF_DIR%
set TCL_LIBRARY=%HPEESOF_DIR%\hptolemy\tools\tcltk\lib\tcl8.0
set TK_LIBRARY=%HPEESOF_DIR%\tools\tcltk\lib\tk8.0
set
WBMLANGPATH=.;%HOME%\custom\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\custom\bitmaps;%HOME%\hpeesof\Yesyn\bitmaps;%HOME%\hpeesof\lapi\bitmaps;%HOME%\hpeesof\dfilter\bitmaps;%HOME%\hpeesof\dsynthesis\bitmaps;%HOME%\hpeesof\circuit\bitmaps;%HOME%\hpeesof\hptolemy\bitmaps;%HOME%\hpeesof\de\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\lapi\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\Yesyn\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\dfilter\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\dsynthesis\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\circuit\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\hptolemy\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\de\bitmaps
cd %HOME%
%HPEESOF_DIR%\bin\hpads
REM * end script
REM *****

```

2. ADS 2003C 起動用バッチファイル

```
REM *****
REM * ADS 2003C Startscript
set HOME=C:\users\defaults\ads2003C
set AGILEESOFD_LICENSE_FILE=27000@edasvr
set HPEESOF_DIR=C:\ADS2003C
set COMPL_DIR=%HPEESOF_DIR%
set DOCS_DIR=%HPEESOF_DIR%
set TCL_LIBRARY=%HPEESOF_DIR%\hptolemy\tools\tcltk\lib\tcl8.0
set TK_LIBRARY=%HPEESOF_DIR%\tools\tcltk\lib\tk8.0
set
WBMLANGPATH=.,%HOME%\custom\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\custom\bitmaps;%HOME%\hpeesof\esy
n\bitmaps;%HOME%\hpeesof\lapi\bitmaps;%HOME%\hpeesof\dfilter\bitmaps;%HOME%\hpeesof\dsynthe
sis\bitmaps;%HOME%\hpeesof\circuit\bitmaps;%HOME%\hpeesof\hptolemy\bitmaps;%HOME%\hpeesof
\de\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\lapi\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\esy\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\dfilter
\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\dsynthesis\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\circuit\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\
hptolemy\bitmaps;%HPEESOF_DIR%\de\bitmaps
cd %HOME%
%HPEESOF_DIR%\bin\ads
REM * end script
REM *****
```

3. 起動用ショートカットの作成

作成したバッチファイルの起動用のショートカットを作成します。

デスクトップ上で、マウスの右クリックをし、[新規作成] > [ショートカット] を選択します。ショートカット作成のウィンドウが現れますので、先程作成したバッチファイルを指定します。

ショートカットを分かりやすい名前に変更します。(例えば、ADS 2003C など)

以上の作業を、作成したバッチファイルの分繰り返します。

8-7節「起動時の作業フォルダの設定を変更する方法」を参考に、作成したショートカット全ての、「起動時の作業フォルダ」をホームディレクトリにあわせて変更します。

8- 7 起動時の作業フォルダの設定を変更する方法

[1] はじめに

この節では、ADS 起動時の作業フォルダを変更する方法を説明します。

[2] ADS 起動時の作業フォルダの変更

ADS 起動時の作業フォルダとは、ADS を起動したときに「File Browser」に表示されているフォルダを指します。ここは通常、ADS をインストールした時にホームディレクトリとして指定したフォルダが設定されています。

このフォルダを変更するには、ADS 起動用のショートカットの「作業フォルダ」を変更します。インストール後、ホームディレクトリを設定を変更しても、作業フォルダは変更されません。

1. 起動用ショートカットのプロパティを開く

デスクトップアイコンから起動する場合は、ADS 起動用デスクトップアイコンのプロパティを開きます。デスクトップの ADS 起動用のアイコン上で、マウスボタンを右クリックし、プロパティを選ぶと開くことができます。

Advanced Design System プログラムグループから起動する場合は、まずタスクバー上でマウスボタンを右クリックし、プロパティを選択します。詳細タブを選択すると、詳細ボタンがありますので、これをクリックします。エクスプローラのスタートメニューのフォルダが開きますので、ここから[プログラム](Windows XP の場合は[すべてのプログラム]) > [Advanced Design System] プログラムグループを開き、Advanced Design System 起動用ショートカット上で、マウスの右ボタンをクリックし、プロパティを選択します。

2. 作業フォルダを変更します

ショートカットのプロパティウインドウに、[作業フォルダ] フィールドがありますので、ここを目的のフォルダ名に変更し、[OK] ボタンをクリックします。

これで、次回起動時より ADS の「File Browser」に、先程設定したフォルダが展開されて開くようになります。

8- 8 プロセスの停止

[1] はじめに

ここでは、ADS 2003C の実行中に、何らかの問題が発生して、プロセスを終了させたい時の注意点を述べます。

[2] プロセスの種類

次の3つのプロセスは、タスクマネージャから「プロセスの終了」を行っても、安全にプログラムを終了させることができます。

hpeesofde.exe	ADS 2003C プログラムを終了させることができます。
hpeesofdds.exe	Data Display Server を停止します。
hpeesofdss.exe	Dataset Server を停止します。

次にあげるプロセスは、「プロセスの終了」は極力行わないで下さい。データ破損等の問題を発生させる場合があります。

hpeesofsess.exe
hpeesofsim.exe
hpeesofbrowser.exe
hpeesofemx.exe

[3] プロセス終了方法

1. キーボードの [Ctrl]-[Alt] の二つのキーを同時に押しながら、[Delete] ボタンを押すと、[Windows のセキュリティ] ウィンドウが現れます。[タスク マネージャ] ボタンを押して、タスクマネージャを開きます。(Windows 2000 / XP の場合には、タスクバー上で右クリックし、メニューからタスクマネージャを選択しても、タスクマネージャが開きます)
2. [プロセス] タブを選択して、プロセス一覧を表示します。
3. 目的のプロセスを選択して、マウスの右ボタンをクリックします。現れたメニューの中から、[プロセスの終了] を選択します。
4. 確認の画面が現れますので、[はい] を選択するとプロセスは終了させられます。

8- 9 デバッグモードでの起動方法

[1] はじめに

Advanced Design System プログラムの詳細なログファイルの作成方法を説明します。ログファイルは、Advanced Design System が正常に動作しない場合等に作成し、プログラムの問題点 対処法を探すために参照します。

[2] デバッグモードについて

ADS 2003C をデバッグモードで起動すると、ADS 2003C の内部処理の詳細な記録が出力されます。ログファイルは、ご使用になっている PC のルートディレクトリに保存されます。通常は、`"C:\%ads_daemon.log"` というファイルになります。

デバッグモードでの起動は以下の手順で行います。

1. エクスプローラを開きます。
2. ADS 2003C がインストールされているディレクトリの `"bin"` フォルダを開きます。
通常は `"C:\%ADS2003C%\bin"` フォルダとなっています。
3. `"bin"` フォルダに、`"hpads_verbose.bat"` ファイルがありますので、これをダブルクリックして起動します。

以上の作業を行うと ADS 2003C がデバッグモードで起動します。起動前に通常の起動時には出ないメッセージウィンドウが数個出現しますので、[OK] ボタンをクリックして、先に進みます。ADS で問題が起こる場合の手順を再現し、デバッグログファイル `"ads_daemon.log"` の内容を確認します。

ログファイルを見ても問題が解決されない場合は、ログファイルを E-Mail など EESof EDA テクニカルサポートまで送付してください。

8-10 FLEXIm ユーティリティ

[1] はじめに

FLEXIm のユーティリティの代表的なコマンドの解説をします。ユーティリティを用いると、ライセンスの供給が正しく行われているか、ライセンスファイルが正しいものかどうか等を調べることができます。FLEXIm については、GLOBEtrouter Software 社 (現在は、macrovision 社) のホームページ (<http://www.macrovision.com/>) でも情報を得ることができます。

[2] FlexImユーティリティの種類

FLEXIm ユーティリティは、<ADS のインストールディレクトリ>%licenses%bin ディレクトリ下 (agltool のみ、<ADS のインストールディレクトリ>%bin ディレクトリ下) にあります。

agltool

GUI 版 FLEXIm ユーティリティです。ADS 2003A / 2003C 専用となっていますので、ベンダデーモン名が、agileesofd のライセンスしか扱えません。

lmutil

テキスト版FLEXImユーティリティです。FLEXIm 標準のツールですので、全てのベンダデーモンに対応しています。下記のオプションを付けることにより、さまざまな機能を実現可能です。この節で解説を行う代表的なオプションの一覧が以下のリストになります。

lmstat	有効なライセンスの表示と、現在使用(占有)されているライセンスの表示が行えます。
lmdiag	有効なライセンスの表示と、使用開始日/終了日などの表示が行なえます。
lmreread	ライセンスファイル(license.lic)を再度読み込ませるときに使用します。license.lic ファイルを変更したときは必ず実行してください。
lmdown	FLEXIm のデーモン(lmgrd と agileesofd)を停止するときに使用します。
lmpath	ライセンスパスの設定を行うときに使用します。

lmgrd

次の命令は、ユーティリティではありませんが、FLEXIm のバージョンを表示できます。

lmgrd	FLEXIm の本体プログラムです。FLEXIm のバージョンを表示することができます。
-------	--

[3] FLEXIm ユーティリティを起動する前に

FLEXIm ユーティリティ起動前に、環境変数 AGILEESOFD_LICENSE_FILE を設定します。ただし、環境変数の設定をせず -c オプションでライセンスパスを指定することも可能です。環境変数の設定方法は、4 - 7 節をご覧ください。

[4] aglmtool の使い方

aglmtool を起動するには、以下の三つの方法があります。

License Information Tool メニュー

[スタート] メニューから、[プログラム](Windows XP の場合は、[すべてのプログラム]) > [Advanced Design System 2003C] > [ADS Tools] > [License Information Tool] を選択することで、License Information Tool(aglmtool) が起動します。

ADS の メインウィンドウ

ADS が起動している状態で、ADS のメインウィンドウのメニューから、[Tools] > [License Information] を選択することで、License Information(aglmtool) が起動します。

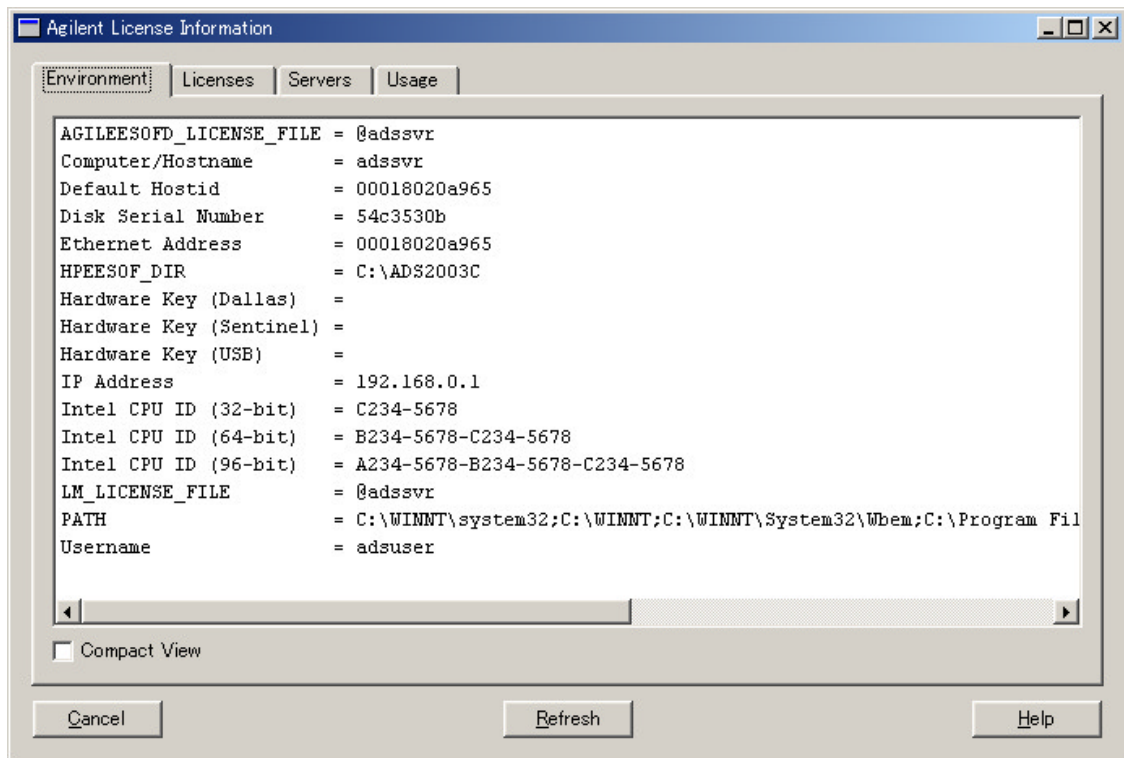
コマンドプロンプト

コマンドプロンプトを開き以下のコマンドを実行するか、[スタート] > [ファイル名を指定して実行] を開き同じく以下のコマンドを実行します。

<書式> <Installation Directory>%bin%aglmtool

<例> C:%ADS2003C%bin%aglmtool

以下のような、Agilent License Information ウィンドウが起動します。



各タブは、以下のような内容を表示します。

Environment	ユーザの現在の使用環境を表示します
Licenses	有効なライセンスがライセンス名でソートされて表示されます
Servers	有効なライセンスがサーバ毎に表示されます
Usage	ライセンスの使用状況が表示されます

[5] Imutil コマンドの使い方

Imdiag

この命令を使用することによって、ライセンスのチェックを行うことが出来ます。ライセンスファイル中の、ライセンスの名前、使用開始/終了日、ライセンス形態等の表示を行います。ただし、フローティングライセンス等、ライセンスサーバからライセンスの供給を受ける時は、ライセンスデーモンが動いている必要があります。

(1) 使用方法

1. コマンドプロンプトを起動します。
2. ユーティリティプログラムが入っているディレクトリに移動します。通常は、“<Installation Directory>%licenses%bin” にあります。ADS 2003C がインストールされているディレクトリを、“C:%ADS2003C” とすると、以下のコマンドを入力することになります。

```
<書式> cd C:%ADS2003C%licenses%bin
```

3. 以下のコマンドで、Imdiag 命令を実行します。

```
> Imutil Imdiag -c <License File>
```

“-c” 以降の、<License File> は、ライセンスファイルのパスとファイル名を示します。ライセンスファイルが、“C:%ADS2003C%licenses%license.lic” だとすると、上記のコマンドは、
“Imutil Imdiag -c C:%ADS2003C%licenses%license.lic” と入力することになります。

4. ライセンス一つ一つに関して、ステータスが表示されますので、確認します。

(2) 実行結果の見方

以下に実行結果の例を示します。

1. 正しい例(フローティングライセンスの場合)

ライセンスファイルの内容(一部)

```
INCREMENT ads_datadisplay agileesofd 2.3 08-nov-2004 2 ¥
VENDOR_STRING="7-36c70f19 : DDNLFLA WZBCYQ2 AUJXJ2E IEKCKLI ¥
WFYQNVN DNJU1YM LHYKAQC OM" SIGN="0010 18B6 3D5D F3FE 9759 ¥
4B1A 7C5C A15D 0E0B A871 7300 585B B0C0 D085 9278 DEE0 674D ¥
9E3D 2E02 CC95 26FD" "
```

結果表示

```
"ads_datadisplay" v2.3, vendor: agileesofd
License server: edasvr1
floating license starts: 1-jan-1990, expires: 31-nov-2004

This license can be checked out
-----
```

ライセンスが正しく供給されている事を意味します。

ライセンスの、形態・開始日/終了日。

サーバのホスト名

2. 間違った例(フローティングライセンスでライセンスサーバが起動していない)

ライセンスファイルの内容

```
INCREMENT ads_datadisplay agileesofd 2.3 08-nov-2004 2 ¥
VENDOR_STRING="7-36c70f19 : DDNLFLA WZBCYQ2 AUJXJ2E IEKCKLI ¥
WFYQNVN DNJU1YM LHYKAQC OM" SIGN="0010 18B6 3D5D F3FE 9759 ¥
4B1A 7C5C A15D 0E0B A871 7300 585B BOC0 D085 9278 DEE0 674D ¥
9E3D 2E02 CC95 26FD"
```

結果表示

```
"ads_datadisplay" v2.3, vendor : agileesofd
  License server: edasvr1
  floating license starts: 1-jan-1990, expires: 31-nov-2004

This license cannot be checked out because:
Cannot connect to license server

      ▲
      |
      | ... I will try to determine what the problem is...
      |
      | "telnet" port (23) on node edasvr1 does not respond
      | ->if edasvr1 is a Unix system, it's probably down
      | -----
```

ライセンスが正しく供給
されていません。

ライセンスサーバに接続できなかったために、ステータスが表示されません。

3. 正しい例(ノードロックライセンスの場合)

ライセンスファイルに, uncounted の項目がある場合は、PC単体でライセンスデーモンを起動せずに ADS 2003C を使用することができます。この場合は、他のライセンスサーバからライセンス供給を受ける場合と違って、ライセンスデーモンが起動していなくても、Imdiag コマンドを使用することができます。

ライセンスファイルの内容(一部)

```
INCREMENT ads_datadisplay agileesofd 2.3 08-nov-2004 uncounted ¥  
VENDOR_STRING="7-36c70f19 : DDNLFLA WZBCYQ2 AUJXJ2E IEKCKLI ¥  
WIFYQVM DNJU1YM LHYKAQC OM" HOSTID=FLEXID=7-36c70f19 SIGN="0010¥  
18B6 3D5D F3FE 9759 4B1A 7C5C A15D 0E0B A871 7300 585B B0C0 D085¥  
9278 DEE0 674D 9E3D 2E02 CC95 26FD"
```

結果表示

```
"ads_datadisplay" v2.3, vendor: agileesofd  
  uncounted nodelocked license, locked to FLEXID dongle "FLEXID=7-36c70f19"  
  starts: 1-jan-1990,   expires: 31-nov-2004
```

This is the correct node for this node-locked license, but
I don't know if the license-key is good or not

ライセンスが正しく供給されている事を意味します。

ライセンスの、形態・開始日/終了日。

4. 誤った例(ノードロックライセンスの場合)

ライセンスファイルの内容(一部)

```
INCREMENT ads_datadisplay agilesofd 2.3 08-nov-2004 uncounted ¥
VENDOR_STRING="7-36c70f19 : DDNLFLA WZBCYQ2 AUJXJ2E IEKCKLI ¥
WFYQNVN DNJU1YM LHYKAQC OM" HOSTID=FLEXID=7-36c70f19 SIGN="0010¥
18B6 3D5D F3FE 9759 4B1A 7C5C A15D 0E0B A871 7300 585B BOC0 D085¥
9278 DEE0 674D 9E3D 2E02 CC95 26FD"
```

結果表示

```
"ads_datadisplay" v2.3, vendor: agilesofd
  uncounted nodelocked license, expires: 31-nov-2004

This license cannot be checked out because:
Invalid license file syntax
Feature:      ads_datadisplay
License path: C:¥ADS2003C¥licenses¥license.lic
FLEXIm error: -2,134
For further information, refer to the FLEXIm End User Manual,
available at "www.globetrotter.com".
Hostid required for uncounterd feature
-----
```

ライセンスが正しく供給
されていません。

上記例では、ライセンスファイルの HOSTID の項目に間違いがあります。ライセンスが正しくチェックアウトされないため、“ada_datadisplay” は使用することが出来ません。四行目以降のエラーメッセージには、ライセンスの名前や使用されたライセンスファイル名、エラーコードなどが表示されています。エラーコードは、GLOBEtrotter Software 社の WEB ページで調べることができます。

注意 “lmdiag”命令を用いた時に、“starts:”(ライセンス開始日)が“1-jan-2025”というように、“expires:”(ライセンス期限切れ日)よりかなり未来の日付で表示される場合があります。この現象は、ご利用になっている FLEXIm のツールが ADS 2003C のものより古い場合に主に発生します。ADS 2003C のライセンスツールが使用されているか、環境変数(HPEESOF_DIR や Path) やベンダーデーモンのパス等をもう一度ご確認ください。

lmstat

lmstat 命令では、ライセンスサーバの所持しているライセンス数・発行済みのライセンス数等を調べることが出来ます。このコマンドは、ライセンスサーバに接続を行いますので、PC単体でライセンスデーモンを起動せずに使用する場合は、ご利用になれません。

1. コマンドプロンプトを立ち上げて、次の命令を実行します。

```
> cd <Installation Directory>%licenses%bin  
> lmutil lmstat -a -c <license.lic のパス>
```

2. ライセンスデーモンが動作している時はライセンス情報が表示され、動作していない時はエラーメッセージが表示されます。

<ライセンスサーバに接続できた時の表示>

```
C:%ADS2003C%licenses%bin>lmutil lmstat -a -c C:%ADS2003C%licenses%license.lic  
lmutil - Copyright (C) 1989-2002 Globetrotter Software, Inc.  
Flexible License Manager status on Man 5/26/2003 12:28  
  
[Detecting lmgrd processes...]  
License server status: 27000@edasvr1  
  License file(s) on edasvr1: C:%ADS2003C%licenses%license.lic:  
  
  edasvr1: license server UP (MASTER) v8.2  
  
Vendor daemon status (on edasvr1):  
  agileesofd: UP v8.2  
  
Feature usage info:  
Users of ads_datadisplay: (Total of 1 license available)  
Users of ads_layout: (Total of 1 license available)  
Users of ads_schematic: (Error: 1 licenses, unsupported by licensed server)  
:  
(以下省略)
```

ライセンスサーバ名と、
起動状態/バージョン

ベンダデーモン名と、
起動状態/バージョン

正しく動いているライセンス

正しく動いてないライセンス

ライセンス情報

この例では、正しくライセンスサーバに接続できています。

ただし、“ads_schematic”のライセンスが正しく発行されていません。ライセンスファイルの“ads_schematic”の行を確認する必要があります。

< ライセンスサーバに接続できない時の表示 >

```
C:¥ADS2003C¥licenses¥bin>lmutil lmstat -a -c C:¥ADS2003C¥licenses¥license.lic
lmutil - Copyright (C) 1989-2002 Globetrotter Software, Inc.
Flexible License Manager status on Mon 5/26/2003 12:40

[Detecting lmgrd processes...]
License server status: @edasvr1
    License file(s) on edasvr1: C:¥ADS2003C¥licenses¥license.lic:

lmgrd is not running: Cannot connect to license server (-15,10:10061 "WinSock: C
onnection refused")
```

この例では、ライセンスサーバに正しく接続できていません。

ライセンスサーバで、デーモンが正しく起動しているか？ライセンスファイルのパスに間違いが無い
か？ (-c オプションの後ろのライセンスファイルのパス)、ライセンスファイルのホスト名が間違えてな
いかをご確認ください。

lmreread

ライセンスファイルを変更・修正したときは、“lmreread” 命令を実行し、ライセンス管理デ
ーモンに再認識させる必要があります。この作業はライセンス管理デーモン(lmgrd)を起動し
たユーザと同じユーザで行ってください。

1. コマンドプロンプトを立ち上げて、次も命令を実行します。

```
> cd <Installation Directory>¥licenses¥bin
> lmutil lmreread -c <license.lic のパス>
```

2. 正常に読み込めたか確認します。

< 正常に読み込めた時の例 >

```
lmutil - Copyright (C) 1989-2002 Globetrotter Software, Inc.
lmreread successful    (正常に読み込めた場合の表示)
```

注意 ライセンスの有効期限切れなどで、license.lic ファイルを更新した場合は、必ず
この lmreread 命令で、その変更をシステムに認識させてください。license.lic ファイル
を置き換えただけでは新しいライセンスは使用できません。

lmdown

FLEXIm のデーモンを止めるときに使用します。FLEXIm のデーモンを再び起動するときは、lmgd コマンドを使用します。

注意 ライセンス管理デーモン起動時に、“-p” オプションを使用していない場合は、このコマンドを用いて、全てのユーザがライセンス管理デーモンを停止させることができます。「管理権限のあるユーザ」のみが lmdown コマンドを使用できるようにするには lmgd 起動時に“-p” オプションを使用してください。

コマンドプロンプトを立ち上げて、次の命令を実行します。

```
> cd <Installation Directory>%licenses%bin  
> lmutil lmdown
```

注意 冗長ライセンスサーバの場合、この命令ですべてのライセンスサーバ(通常3台)のデーモンが停止してしまいます。ある特定のライセンスサーバのデーモンのみを停止する場合は、タスクマネージャでデーモンのプロセスを確認した後、プロセスの終了で停止してください。

Impath

Impath 命令は FLEXlm のレジストリに記録されているライセンスパスを編集することが出来ます。Impath を使用することにより、レジストリに保存されているライセンスパスを変更したり、現在の設定を確認することができます。

参考 ライセンスパスは以下のレジストリに保存されています。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\FLEXlm License Manager

Impath の書式は次のようになります。

```
lmutil Impath {-status | -add | -override} {vendor_name | all} license_path_list
```

ここで、各オプションの説明をします。

- **-status**
現在のライセンスパスの設定を表示します。
- **-add**
既にレジストリ中にライセンスパスが設定されている場合は、そのライセンスパスの前に新しくライセンスパスを付け加えます。ライセンスパスが設定されていない場合には、新しくライセンスパスが作成されます。また、既に存在しているライセンスパスと同じライセンスパスを付け加えることはできません。

注意 ライセンスは、ライセンスパスが前(左側)にあるものから優先的にライセンスを取得します。例えばライセンスパスが、AGILEESOFD_LICENSE_FILE = 27000@server1;27001@server2 と設定されている場合には、まず、27000@server1 を参照し、次に 27001@server を参照することになります。

- **-override**
既にレジストリ中に存在しているライセンスパスを上書きします。このとき、空欄 ("") を使用することにより、特定のリストを消去することができます。
- **vendor_name**
特定のベンダーデーモンを指定することができます。これを指定することにより、vendor_name_LICENSE_FILE という環境変数に対する設定を行うこととなります。例えば、vendor_name に agileesofd を指定した場合には、AGILEESOED_LICENSE_FILE に設定を行うこととなります。
- **all**
すべてのベンダーデーモンに対する設定を行います。これは環境変数 LM_LICENSE_FILE に設定を行うことと同じです。

- license_path_list

ライセンスパスを設定します。Windows ではセミコロン (;) を使用することにより、複数のライセンスパスを同時に設定することが可能です。license_path_list に空欄 ("") を使用すれば、ライセンスパスの設定を削除することが可能です。また、特定のライセンスファイルを指定せず、ライセンスファイルが存在するディレクトリを指定することでもライセンスパスを設定することが可能です。このとき、同じディレクトリに複数のライセンスファイルが存在していれば、すべてのライセンスファイルを含んだ設定になります。

注意 Impath を用いたライセンスパスの設定は、環境変数が設定されている場合、環境変数のみ参照します。Impath を使用したライセンスパスの設定は、環境変数が設定されていない環境において有効です。

具体的な Impath の使用方法は以下のようになります。

1. ライセンスパスの状態の確認

現在のライセンスパスの設定を確認することができます。

- 1) コマンドプロンプトを立ち上げて、次の命令を実行します

```
> cd <Installation Directory>%licenses%bin  
> Imutil Impath -status
```

- 2) 設定を確認します。

```
Imutil - Copyright (C) 1989-2002 Globetrotter Software, Inc.  
Known Vendors:  
-----  
agileesofd:    27000@server1;27001@server2  
-----  
Other Vendors:  
-----  
                27001@server2
```

agileesofd (AGILEESOFD_LICENSE_FILE) と other vendors (LM_LICENSE_FILE) に設定がされていることが確認できます。

2. ライセンスパスの追加

ライセンスパスを追加するには、“-add”を使用します。

- コマンドプロンプトを立ち上げて、次の命令を実行します

```
> cd <Installation Directory>%licenses%bin
> lmutil lmpath -add <vendor_name> <license path>
```

agileesofd (AGILEESOFD_LICENSE_FILE) にライセンスパス 27002@server3 を付け加える場合

```
> lmutil lmpath -add agileesofd 27002@server3
```

その他のベンダーデーモン (LM_LICENSE_FILE) にライセンスパス 27003@server4 と、27004@server5 を付け加える場合

```
> lmutil lmpath -add all 27003@server4;27005@server5
```

3. ライセンスパスの上書き

ライセンスパスを上書きするには、“-override”を使用します。

- コマンドプロンプトを立ち上げて、次の命令を実行します

```
> cd <Installation Directory>%licenses%bin
> lmutil lmpath -override <vendor_name> <license path>
```

agileesofd (AGILEESOFD_LICENSE_FILE) にライセンスパス 27002@server3 を上書きする場合

```
> lmutil lmpath -override agileesofd 27002@server3
```

4. ライセンスパスの削除

ライセンスパスを削除するには、“-override”を使用します。

- コマンドプロンプトを立ち上げて、次の命令を実行します

```
> cd <Installation Directory>%licenses%bin
> lmutil lmpath -override <vendor_name> ""
```

agileesofd (AGILEESOFD_LICENSE_FILE) を削除する場合

```
> lmutil lmpath -override agileesofd ""
```

[6] Imgrd, agileesofd のバージョン確認

以下のコマンドで、Imgrd のバージョンが確認できます。

1. コマンドプロンプトを立ち上げて、次の命令を実行します。

```
> cd <Installation Directory>%licenses%bin  
> Imgrd -v
```

2. バージョンを確認します。

```
Imgrd v8.2b - Copyright 1988-2002, Globetrotter Software, Inc.
```

ベンダーデーモン(agileesofd)も同様にバージョン確認をできます。

1. コマンドプロンプトを立ち上げて、次の命令を実行します。

```
> cd <Installation Directory>%licenses%bin  
> agileesofd -v
```

2. バージョンを確認します。

```
17:17:57 (agileesofd) FLEXIm version 8.2b  
agileesofd v8.2b - Copyright 1988-2002, Globetrotter Software, Inc.
```

上記実行結果の例では、Imgrd, agileesofd 両方ともバージョンは 8.2b です。

8-11 リモートシミュレーションの設定

[1] はじめに

この節では、PC からリモートシミュレーションを使って ADS シミュレーションを行う方法について説明します。

リモートシミュレーション コマンドを発行する場合は、その前にサーバホスト側でのセットアップが終了している必要がありますのでご注意ください。

この節では“サーバ”という表現は、リモートでシミュレーションのみが実行されるコンピュータを、“クライアント”という表現は、リモートコマンドを送ってシミュレーションをさせる(ユーザインタフェースが実行されている)コンピュータを指します。

注意 Momentum リモートシミュレーションは、サーバ・クライアントが両方 PC か、両方 UNIX の場合しか使用できません。PC-UNIX 間では行えませんのでご注意ください。また、Momentum のリモートシミュレーションの方法はここでの説明とは若干作業が異なります。Momentum のリモートシミュレーションについては [8] 『Momentum での設定』をご覧ください。また、“Momentum”マニュアルの、“Performing Remote Simulation”を参照してください。

[2] サーバ・クライアントの条件

- サーバとして利用できるOS
 - Windows NT / 2000 / XP
 - UNIX

- クライアントとして利用できるOS
 - ADSのサポートされているOS本手順書では、Windows NT / 2000 / XP の場合の説明のみ行います。

注意 LSF を用いたリモートシミュレーションを行う場合は、“Using LSF Remote Simulation”をご覧ください。また、Momentum は LSF リモートシミュレーションに対応していません。

[3] サーバ側の準備

- サーバが PC の場合
 1. サーバ PC に、リモートシミュレーション用の TCP ポートを準備します。下記のいずれかの方法で設定を行ってください。
 - ADS 標準の hpeesof.cfg ファイルに記述する事でポートを設定する事ができます。
<Installation Directory>%config%hpeesof.cfg ファイルをメモ帳などのエディタで開き、下記の一行を加えてください。

```
EEDAEMON_SOCKET=1537
```

- ホームディレクトリに “<HOME Directory>%hpeesof%config%hpeesof.cfg” ファイル (例えば “C:%users%default%hpeesof%config%hpeesof.cfg”) を作成して設定することも可能です。作成した “hpeesof.cfg” ファイルに同じく下記の一行を記入してください。

EEDAEMON_SOCKET=1537

- EEDAEMON_SOCKET 変数とポート番号を設定しなかった場合は、標準値として、1537番が使用されます。

注意 モーメントムのリモートシミュレーションを行う場合は、更に次の行を加える必要があります。

書式 :MOMENTUM_SIM_PATH=<リモートサーバコンピュータ名>

詳細は “Momentum” マニュアルの “Performing Remote Simulations” を参照してください。

2. リモートシミュレーションデーモン(EMXデーモン) を起動します

コマンドプロンプトを開き以下のコマンドを実行するか、[スタート] > [ファイル名を指定して実行] を開き同じく以下のコマンドを実行します。

<書式> <Installation Directory>%bin%hpremove -d remote_sim.log

<例> C:%ADS2003C%bin%hpremove -d remote_sim.log

-d オプションは、デバッグモードをあらわすオプションです。リモートシミュレーションの実行ログを保存できますので、実行状況についてはこのファイルの内容を確認してください。remote_sim.log ファイルは <Installation Directory>%bin ディレクトリに作成されます。

注意 デーモン起動時に出現したコマンドプロンプト画面は閉じないでください。これを閉じると、リモートシミュレーションデーモンも同時に終了します。

以上で、PC サーバの準備は終了です。次はクライアント側の作業を行なってください。

■ サーバが UNIX の場合

1. リモートシミュレーションサーバにログインします。
2. HPEESOF_DIR , PATH , DISPLAY 環境変数を、ADS 2003C を起動できる設定にします。詳細は “Installation on UNIX Systems” マニュアルまたは、 “ADS 2003C アップデートインストール手順書 (UNIX版)” をご覧ください。

注意 TkPlots を用いた Ptolemy シミュレーションを実行する場合には、DISPLAY環境変数を設定しなくてはなりません。設定することにより、TkPlots をクライアントの画面で表示することができます。

3. UNIX サーバに、リモートシミュレーション用の TCP ポートを準備します。下記のいずれかの方法で設定を行ってください。

- ADS 標準の hpeesof.cfg ファイルに記述する事でポートを設定する事ができます。(この作業はroot などの特権のあるユーザで行う必要があります)。<Installation Directory>/config/hpeesof.cfg ファイルを vi などのエディタで開き、下記の一行を加えてください。

```
EEDAEMON_SOCKET=1537
```

root 権限の作業が行えない場合は、ホームディレクトリに “<HOME Directory>/hpeesof/config/hpeesof.cfg” ファイルを作成して設定することも可能です。作成した “hpeesof.cfg” ファイルに同じく上記の一行を記入してください。

注意 ポートの設定を行う場合は、使用するポート番号が他で確保されていない事をご確認ください。これは、/etc/services ファイル内に、上記例の場合は 1537 番の記述がない事を確認することで可能です。(ただし、NIS を使用している場合は “ypcat services” コマンドで確認する必要があります)。もし確保されていた場合は、他の番号(例えば 5332 番)をご使用ください。

- /etc/services ファイルに下記の例のように “eedaemon” 行を加えることで設定する事ができます。(NIS を使用している場合は、NIS サーバの /etc/services ファイルを変更します)。これは、UNIX ワークステーションの管理者権限が必要になりますので、ワークステーションの管理者までご相談ください。

```
<書式> eedaemon <ポート番号>/tcp eedaemon  
<例> eedaemon 1537/tcp eedaemon
```

- EEDAEMON_SOCKET 変数とポート番号を設定しなかった場合は、標準値として、1537 番が使用されます。

注意 モーメントムのリモートシミュレーションを行う場合は、更に次の行を加える必要があります。

書式 :MOMENTUM_SIM_PATH=<リモートサーバコンピュータ名>

詳細は “Momentum” マニュアルの “Performing Remote Simulations” を参照してください。

4. リモートシミュレーションデーモン(EMXデーモン) を起動します

```
<書式> hpremote ? d <ログファイル名>  
<例> hpremote -d /tmp/remote_sim.log
```

-d オプションはデバッグモードをあらわすオプションです。<ログファイル名> にリモートシミュレーションデーモンの実行ログが保存されます。上記例では “/tmp/remote_sim.log” に作成されます。

ここでエラーが発生した時は、“[6]エラーメッセージ”をご覧ください。

ログファイルの最新部分を確認するには、以下のコマンドを実行してください。

```
tail -f /tmp/remote_sim.log
```

5. リモートシミュレーションデーモンが実行されている事を以下のコマンドで確認します。

```
ps -ef | grep hpeesofemx
```

注意 既に他のユーザによって hpremove コマンドが実行されている時は、二つ目の hpremove コマンドは実行できません。この場合は、既に実行されているリモートシミュレーションサーバを他のユーザも利用する事ができます。

以上で、PC サーバの準備は終了です。次はクライアント側の作業を行なってください。

[4] クライアント側での操作手順

サーバ側での設定が終われば、既にクライアントPCからリモートシミュレーションが動作するはずで、以下の手順で、リモートシミュレーションを行ってみます。

注意 サーバにおいて EEDAEMON_SOCKET でポート番号を設定した場合には、クライアントにおいても同様の設定を行う必要があります。例えば、サーバー側で EEDAEMON_SOCKET=1801 と設定した場合には、クライアントは以下の方法でポート番号を設定する必要があります。

- ADS 標準の hpeesof.cfg ファイルに記述する事でポートを設定する事ができます。 <Installation Directory>%config%hpeesof.cfg ファイルをメモ帳などのエディタで開き、下記の一行を加えてください。

```
EEDAEMON_SOCKET=1537
```

- ホームディレクトリに “<HOME Directory>%hpeesof%config%hpeesof.cfg” ファイル (例えば “C:%users%default%hpeesof%config%hpeesof.cfg”) を作成して設定することも可能です。作成した “hpeesof.cfg” ファイルに同じく下記の一行を記入してください。

```
EEDAEMON_SOCKET=1537
```

1. 通常どおり ADS 2003C を起動します。
2. 既存のプロジェクトを開くか、新しくプロジェクトを作成します。
3. デザインを開くか、作成します。
4. Schematic ウィンドウで、[Simulate] > [Simulation Setup] メニューを選択します。

5. ダイアログボックスが現れますので、[Remote Simulation Host] 欄に、サーバホスト名(または、IPアドレス)を入力します。
6. [Simulate] ボタンをクリックします。

リモートシミュレーションが成功すると、ステータスウィンドウが開き、シミュレーションの進行状況が表示されます。

以上で、リモートシミュレーションの基本的な使い方は終了ですが、必要に応じて「[5] リモートホストリスト作成」作業を行ってください。また“OPEN_SIMULATOR”エラーなどが発生した場合は、「[6] エラーメッセージ」をご参照ください。

[5] リモートホストリスト作成

リモートシミュレーションサーバが複数台ある場合は、複数台のサーバに接続を行って作業を行うと効率よくシミュレーションを行うことができます。場合に応じて異なるサーバに接続したいときは、その都度接続先のホスト名を[Remote Simulation Host]欄に入力するか、下記のリストを作成することによってドロップリストから接続先ホスト名を選べるようにすることができます。

1. de_sim.cfg ファイルをメモ帳などのエディタで開きます。
de_sim.cfg ファイルは “ <Installation Directory>%config%de_sim.cfg ” または、 “ <HOME Directory>%hpeesof%config%de_sim.cfg ” の二箇所があり、どちらを編集しても構いません。
2. SIMULATION_HOST_LIST の設定を行っている行を探し次のように編集します。

```
<書式> SIMULATION_HOST_LIST=[hostname1] [hostname2] ...  
<例> SIMULATION_HOST_LIST=edarem1 edarem2 edarem3
```

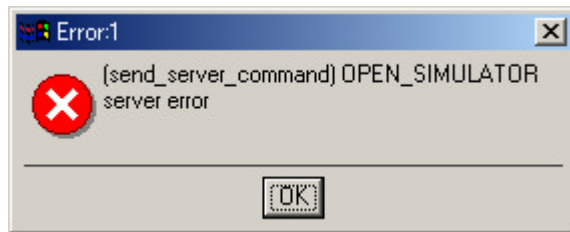
ホスト名同士の間は必ず半角スペース一つで区切ってください。

3. ファイルを保存し、ADS 2003C を起動します。
4. Schematic 画面で、[Simulate] > [Simulation Setup] メニューを選択すると、[Remote Host Selection] 欄に、先程記入したホスト名のリストが表示されます。
この中から目的のホストを選択し、シミュレーションを行います。

[6] エラーメッセージ

ここでは代表的な二つのエラーについてその対処法を説明します。

- リモートシミュレーションを行った時に次のエラーが出る場合



このエラーは、サーバのリモートシミュレーションデーモンに接続できなかったときに現れます。

サーバ側で、デーモンが正しく起動できているかどうかをもう一度お確かめください。デーモンの起動方法は、本節の「[3] サーバ側の準備」をご参照ください。

サーバが正しく起動している場合は、サーバホストが見つからない可能性があります。[Remote Host Selection] 欄で選んだホスト名が正しいかどうかお確かめください。正しい場合は、ホスト名の代わりに IP アドレスを入れてお試してください。

ホスト名も合っており、デーモンも起動できている時は、ポート番号の問題が考えられます。サーバ側のポート番号の設定と、クライアント側のポート番号の設定が異なっていないかも一度ご確認ください。ポート番号は、通常は 1537 番を使用します。

- UNIX でデーモンを起動するときに次のエラーが出る場合

UNIX をリモートシミュレーションサーバにするため、hpremove コマンドを実行する時に次のエラーが出る場合があります。

```
[1] + Stopped (tty output) -hpeesofemx -d remote.log &
```

これは、バックグラウンドで動作するプロセスが、tty(ターミナル)にメッセージを出力できない時に現れます。この場合はデーモンの起動スクリプト “ hpremove ” の内容を以下のよう編集して実行してみてください。

```
hpeesofemx 2>&1 &
```

[7] リモートシミュレーションデーモン(EMXデーモン)の終了

デーモンを終了させる前に、リモートで接続しているクライアントがないかどうかご確認ください。デーモンを終了させる方法は、

■ PC の場合

起動時に現れたコマンドプロンプトウィンドウ(HP EEsos Error Log Windows)を閉じることによって、PC のリモートシミュレーションデーモンを停止する事ができます。サーバでタスクマネージャを起動し、hpeesofemx というプロセスが無くなっていることを確認します。もし残っている場合は、[プロセスの終了]ボタンで終了させます。

■ UNIX の場合

以下のコマンドで、リモートシミュレーションのプロセス番号を調べます。

```
ps -ef | grep hpeesofemx
```

プロセス番号がわかったら、以下のコマンドでプロセスを終了させます。

```
kill -9 <プロセス番号>
```

[8] Momentumでの設定

Momentum でリモートシミュレーションを行う場合の設定と注意点について説明します。
Momentum では

- PC から PC
- UNIX から UNIX

でリモートシミュレーションを行うことができます。本手順書では PCからPC への方法を説明いたします。UNIXからUNIXへは、“ADS 2003C アップデート/インストール手順書 UNIX版”をご参照ください。

注意 Momentum でのリモートシミュレーションは、LSFをサポートしておりません。

また、MomentumのリモートシミュレーションはWindows 2000 / NT 4.0 をサポートしています。

(1) サーバ(リモート)の設定

リモートシミュレーションを行うために、以下の手順でリモートEMXデーモンを起動させてください。

1. サーバマシン でリモートシミュレーション時に使用するTCP ポートを準備します。以下のいずれかの方法で設定してください。

- ADS 標準の hpeesof.cfg ファイルに記述する事でポートを設定する事ができます。
<Installation Directory>%config%hpeesof.cfg ファイルをメモ帳などのエディタで開き、下記の一行を加えてください。

```
EEDAEMON_SOCKET=1537
```

- ホームディレクトリに “<HOME Directory>%hpeesof%config%hpeesof.cfg” ファイル (例えば “C:%users%default%hpeesof%config%hpeesof.cfg”) を作成して設定することも可能です。作成した “hpeesof.cfg” ファイルに同じく下記の一行を記入してください。

```
EEDAEMON_SOCKET=1537
```

- ホームディレクトリに “<HOME Directory>%hpeesof%config%hpeesof.cfg” ファイル (例えば “C:%users%default%hpeesof%config%hpeesof.cfg”) を作成して設定することも可能です。作成した “hpeesof.cfg” ファイルに同じく下記の一行を記入してください。

```
EEDAEMON_SOCKET=1537
```

EEDAEMON_SOCKET 変数とポート番号を設定しなかった場合は、標準値として、1537番が使用されます。

2. 環境変数 HPEESOF_DIR を設定してください。また、環境変数 PATH に %HPEESOF_DIR%\bin を加えてください。このとき環境変数 PATH の先頭にくるように設定、確認してください。

■ Windows 2000

- 1) [スタート] > [設定] > [コントロールパネル] アイコンを選択します。[コントロールパネル]中の [システム] アイコンをダブルクリックし、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
- 2) [詳細] タブをクリックして選択します。
- 3) [環境変数] ボタンをクリックすると環境変数ダイアログボックスが開きます。
- 4) システム環境変数フィールドの[新規] ボタンをクリックし、変数名に “HPEESOF_DIR” と、[変数値] 欄に ADS 2003C のインストールディレクトリのパスを入力します。通常は、“C:\ADS2003C” です。
- 5) 次に、システム環境変数フィールドから “Path” を選択し、[編集] ボタンをクリックします。
- 6) [変数値] フィールドをクリックして、フィールドの先頭に、“%HPEESOF_DIR%\bin;” と入力します
- 7) [OK] ボタンをクリックして設定を完了します。

■ Windows NT 4.0

- 1) [スタート] > [設定] > [コントロールパネル] アイコンを選択します。[コントロールパネル]中の [システム] アイコンをダブルクリックし、[システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。
- 2) [環境] タブをクリックして選択します。
- 3) [変数] フィールドをクリックして、フィールド内に “HPEESOF_DIR” と、キーボードから入力します。
- 4) 次に [値] フィールドをクリックして、フィールドに ADS 2003C のインストールディレクトリのパスを入力します。通常は、“C:\ADS2003C” です。
- 5) [設定] ボタンをクリックして、入力した内容を登録し、次にシステム環境変数フィールドの中から、“Path” を選択します。
- 6) [値] フィールドをクリックして、フィールドの先頭に、“%HPEESOF_DIR%\bin;” と入力します。
- 7) [設定] ボタンをクリックして、入力した内容を登録し、[OK] で終了します。

3. コマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行します。

```
<書式> hpeesofemx ? v ? d <ログファイル名>  
<例> hpeesofemx -v -d remote_mom.log
```

注意 デーモン起動時に出現したコマンドプロンプト画面は閉じないでください。これを閉じると、リモートシミュレーションデーモンも同時に終了します。

(2) クライアント(ローカル)の設定

Momentum をリモートで動作させるために、コンフィギュレーションファイルを作成するか、編集する必要があります。また、リモート動作させるマシンの名前(ホスト名)を書き加えるのを忘れないでください。手順は以下のとおりです。

1. 以下の場所にある hpeesof.cfg ファイルを編集します。ここで編集するファイルの保存場所で使用するリモートシミュレーションの設定範囲を規定することになります。また、hpeesof.cfg ファイルが存在しない場合には作成してください。

- ある特定のユーザのみに設定する場合
%HOME%\hpeesof¥config の下
- ADSを使用するユーザすべてに設定する場合
%HPEESOF_DIR%\¥config の下

2. hpeesof.cfg ファイルを編集します。ない場合には、hpeesof.cfg ファイルを作成してください。ファイルに以下の2行を加えます。

<書式> EEDAEMON_SOCKET=<ポート番号>
<例> EEDAEMON_SOCKET=1537

注意 EEDAEMON_SOCKET で設定したポート番号は必ずサーバ側と同じ番号を指定してください。

<書式> MOMENTUM_SIM_PATH=<リモートコンピュータのホスト名>
<例> MOMENTUM_SIM_PATH=ads_server

EEDAEMON_SOCKET は設定しなくても動作はいたしますが、設定されることをお勧めいたします。また、クライアントが Windows NT 4.0、サーバが Windows 2000 の場合には、EEDAEMON_SOCKET を 1801 に設定することを推奨します。

Momentum の場合、シミュレーション時にサーバを選択することはできません。

ここで定義したサーバマシンのみでシミュレーションを行います。

上記設定がなされていない場合は、リモートシミュレーション実行時に警告がでますので、ご注意ください。

(3) クライアント側でのHOMEの設定

Momentum でのリモートシミュレーションは substrate (基板情報)を読み込む関係上、クライアントの HOME ディレクトリにサーバからアクセスできる必要があります。そのための設定をまず、クライアント側から行います。

1. 現在使用している HOME ディレクトリを共有可能な状態にします。手順は 8 - 3 節[2]をご覧ください。
2. 共有可能にした HOME ディレクトリを そのマシン(クライアント)のネットワークドライブとして割り当てます。ここで、割り当てたドライブレターを忘れずにしてください。手順は、8 - 2 節[3]をご覧ください。

- HOME ディレクトリを 2. で割り当てたネットワークドライブに変更します。そのためにレジストリ変更します。手順は、8 - 6 節[3]をご覧ください。
- 作業ディレクトリを 2. で割り当てたネットワークドライブに変更します。手順は、8 - 7 節[2]をご覧ください。
- ADS を起動し、HOME ディレクトリ(作業ディレクトリ)が変更されていることを確認します。

注意 HOME ディレクトリの下にある substrates ディレクトリには、基板情報(計算結果)がデータベースとして保存されています。リモートシミュレーション時にはこのデータベースを利用するので、読み取り/書き込みが可能な状態にしておく必要があります。もし、その設定ができていない場合には、シミュレーション時に警告が出ます。

(4) サーバ側での HOME の設定

クライアント側で設定した HOME ディレクトリにアクセスできるように、クライアントの HOME ディレクトリをネットワークドライブに割り当てます。ここで、必ずクライアント同じドライブ名に割り当ててください。(クライアントで “W:¥HOME” と割り当てた場合には、サーバ側でも “W:¥HOME” と割り当ててください)

(5) リモートシミュレーションの終了

デーモンを終了させる前に、リモートで接続しているクライアントがないかどうかご確認ください。デーモンを終了させるには、起動時に現れたコマンドプロンプトウィンドウ (HP EEsof Error Log Windows) を閉じることによって、PC のリモートシミュレーションデーモンを停止する事ができます。

サーバでタスクマネージャを起動し、hpeesofemx というプロセスが無くなっていることを確認します。もし残っている場合は、[プロセスの終了] ボタンで終了させます。

また、クライアントの設定ファイルに “MOMENTUM_SIM_PATH” が残っていると、リモート設定していなくてもそのサーバにアクセスするため、エラーとなってシミュレーションができません。その場合は、設定ファイルの “MOMENTUM_SIM_PATH” を削除してください。

割り当てたネットワークドライブを切断しない限り、HOME ディレクトリ、作業フォルダを元に戻さなくても ADS は起動します。元に戻す場合は、8 - 6 節、8 - 7 節をご覧ください。HOME ディレクトリ(レジストリ)、作業ディレクトリの変更を行ってください。

9章 コードワード発行依頼とEDAテクニカルサポートのご利用案内

9-1 コードワード発行依頼の方法

「Agilent EEsof EDA コードワード発行依頼 FAXシート」に必要事項を正確に記入し、FAX または E-Mail でお送りください。以下、ご記入の際に必要な情報の取得法・ご注意・記入法を示します。また、EDA テクニカルサポート 日本語サポートWEB(<http://www.agilent.com/find/eesof-support-japan>)からも、発行依頼を行うこともできます。

[1] ソフトウェアの情報

	記入例	
製品名またはモデル番号	製品名	ADS 2003C
	モデル番号	E8889A (RFIC Designer Premier)
ソフトウェアのバージョン	ADS 2003C	
ライセンスの形態	ノードロック, フローティングライセンス	

[2] コンピュータの情報

パラメータの種類	使用OS	コマンド	例
モデル名	Windows	なし	HP Vectra XA
	HP-UX	uname -m	HP9000/755
	SUN OS		SUN SPARC Station 10
コンピュータ ID	Windows (ノードロックのみ)	ハードウェアキーに記載 *1)	FLEXID=8-5E700060D92A
	HP-UX	/etc/uname -i	2014460207
	Sun OS	/bin/hostid	544158c4
LAN ID (LLA)	HP-UX	/etc/lanscan	0x080009490BE7
	Solaris 2.7/2.8	ifconfig hme0	8:0:20:12:67:ca
ホスト名 *2)	Windows	4- 5節参照	edahost1
	HP-UX	Hostname	edahost2
	SUN OS		

*1) PCの場合はハードウェアキー番号をご記入ください。

*2) 製品バージョンとライセンス形態によって、必要でない場合もあります。

コードワードが記載されている紙がございましたら、必ず一緒に FAX でお送りください。また、“license.lic, license.dat” ファイルも必ず一緒に FAX でお送りください。

[3] ご記入にあたってのお願い

- 1) 文字は大きくはっきりとご記入下さい。特に、数字・アルファベットは、はっきりご記入下さい。アルファベットは筆記体をご使用にならないで下さい。また、数字とアルファベットの区別や、アルファベットの大文字と小文字の区別を明確にお願いします。

紛らわしい文字の例

数字の 0 (ゼロ)と、アルファベットの (オー)
大文字の C と、小文字の c
小文字の l (L) と、小文字の e (E)

- 2) 黒色のペン、または鉛筆を使ってご記入下さい。青色のペンはご使用にならないで下さい。
- 3) 会社名は略称ではなく、正式名を(日本語、英語とも)ご記入下さい。

会社名の書き方

良い例	アジレント・テクノロジー 株式会社 Agilent Technologies Japan, Ltd.
悪い例	アジレント(株) Agilent

- 4) お名前はフルネームでご記入下さい。
- 5) ファイルおよび UNIX の命令の実行結果をプリンタに出力したり、ファイルに出力する例は次のとおりです。

ファイル・プリンタへの出力例 (HP-UX)

ファイル プリンタへ出力	\$ lp /ads2001/licenses/license.dat
UNIX 命令の実行結果 プリンタへ出力	\$ /etc/netls/lis_stat -t lp
UNIX 命令の実行結果 ファイルへ出力	\$ /etc/netls/lis_stat -t > /tmp/FILENAME

- 6) FAX で送信する場合、紙の周囲に書かれている文字が欠けることがあります。できれば、紙の周囲(上下左右) 3cm には、何も記入しないで下さい。特に、プリント出力された UNIX の命令の実行結果などを FAX で送信する場合はご注意ください。

Agilent EEsof EDA **ライセンス (コードワード)発行依頼シート**

アジレント・テクノロジー (株)カスタマコンタクトセンタ サポートアグリーメントグループ EDAコードワード発行受付行

FAX **0120- 802- 016** TEL **0120- 802- 871**

E-MAIL : japan_codeword@agilent.com

E-mailでご依頼の場合は、上記アドレスまで、
お客様のシステムハンドル、会社名、お名前 をお知らせ下さい。
メール専用フォーマットをお送り致します。

FAX送信枚数
(本表紙を含む) _____ 枚

F A Xでご依頼の場合は、本シートに必要事項をご記入の上、
上記F A X番号までお送り下さい。

送信日 _____ 月 _____ 日

各ライセンスサーバごとに別々の用紙でご依頼下さい。

システムハンドルをご記入下さい。 この番号は、通常発送伝票左上のS / H ~に記載されております。

システムハンドル番号

今回ご依頼の、すべてのコンピュータの情報をご記入下さい。

すべてのライセンスサーバの情報をご記入下さい。

すべてのノードロックライセンスクライアントの情報をご記入下さい。

ネットワークライセンスのクライアントの場合は、記入不要です。

	コンピュータID (PCの場合はハードウェアキー番号)	ホスト名	備考
ライセンス サーバ			
ノードロック・クライアント			
ノードロック・クライアント			
ノードロック・クライアント			
ノードロック・クライアント			

ADS 2002C以前をご利用のお客様へ

ADS 2003A, 2003C のコードワード発行時は、プラットフォーム(ハードウェア)の変更を無料で承っております。

会社名： _____

ご所属： _____

お名前： _____

電子メール アドレス： _____

電話番号： _____ 内線（ _____ ） FAX： _____

ライセンスの送付手段 電子メール FAX

必要な製品とバージョン

製品名 _____ バージョン _____

現在のライセンスの有効期限 年 月 日

*** 備考欄 *** (マシン変更内容詳細/ご質問等がございましたら、ご記入下さい)

--

9- 2 EDAテクニカルサポート・サポート依頼 FAX シートの使い方

- [1] EDAテクニカルサポートへお問合せの際は、お客様のシステムハンドル番号を必ずお知らせください。システムハンドル番号がわからない場合は、受付できない可能性があります。
- [2] 『EDAテクニカルサポート サポート依頼 FAX シート』に必要事項と、継続質問の場合は受付番号(CALL ID :例=301.2345)を記入してください。
- [3] 離席されている場合が多いときは、時間指定していただくと便利です。
- [4] FAX シートに記入いただくときに、次の問題確認項目を参考にさせていただくとより早い回答を行なうことができます。
- 1) 何をしようとしていましたか。
 - 2) どうなるはずだ、またはどうなって欲しいと考えていますか。
 - 3) 何が起きていますか。
 - 4) どんなエラーメッセージ、エラー番号が出ていますか。
 - そのエラーメッセージは OS のものですか、それともソフトウェアのものですか。
 - そのエラーメッセージはどこに表示されていますか。データベースで検索するため、エラーメッセージは正確にお知らせください。
 - 5) この問題はいつから発生していますか。
 - 6) この問題はときどき発生しますか、または必ず発生しますか。
 - 7) ときどき発生する場合は、どんなときに発生しますか。
 - 8) 今まででは正常に動作していましたが、または今回が初めてのご使用ですか。
 - 9) 問題発生前に、何か変更なさいましたか。(ハードウェア、ソフトウェア、設定など)
 - 10) すでに何かの問題解決の手を打たれましたか。その結果はどうでしたか。
- [5] 参考
- 1) システムハンドル(システムID)番号とは?
お客様ごとに割り当てられた、お客様固有の番号。ユーザID番号のこと。
EDAテクニカルサポートにご質問されるときに、必ず受付にお伝えください。
システムハンドル番号を伝え忘れた場合、契約をされていないお客様として扱われる場合があります。(銀行の暗証番号のようなものです。)
この場合、EDAテクニカルサポートからの連絡は保証されませんので、必ずシステムハンドル番号を受付にお伝えください。
(システムハンドル番号の例 : 8123-71512)
 - 2) CALL ID (受付番号) とは?
ご質問ごとに割り当てられる番号。
EDAテクニカルサポートにご質問をいただいたときに、ご質問ごとに CALL ID(受付番号)を発行します。
(CALL ID の例 301.2345)
 - 3) システム名、バージョン
システム名、バージョンは正確にお伝えください。
(システム名の例 ADS (E8900) 2002C, IC-CAP(85190A) 2001)
コンピュータ名とUNIX のバージョンは、次のコマンドで確認できます。
uname -a

9- 3 EDAテクニカルサポートを有効にご利用いただくために

EDAテクニカルサポートをより有効にご利用いただくために、
お客様にお願いしたいことをまとめてみました

[1] より早くご回答をするためにお願いしたいこと

- 1) お客様のシステムハンドル番号は正確にお伝えください。
アジレント・テクノロジーでは、お客様のシステムハンドル番号をデータベース化しております。よりスムーズなご回答のために、ご質問受付時にお客様のシステムハンドル番号をお伺いしております。システムハンドル番号を伝え忘れた場合、契約をされていないお客様として扱わせていただく場合がございます。
- 2) 製品名は正確にお伝えください。
EDAテクニカルサポート受付では、1か月に約数千件のご質問を承っております。
製品名を正確にお伝えいただけませんと、間違った担当者(エンジニアグループ)にご質問が回りご回答が遅れる場合があります。そのため、ご質問の製品名は正確にお伝えください。
(製品名の例 :ADS, IC-CAP)
- 3) 同姓(同じお名前)の方が複数名いらっしゃる場合は、フルネームでお願いします。

[2] より正確なご回答をするためにお願いしたいこと

- 1) エラーメッセージは正確にお伝えください。
EDAテクニカルサポートでは、世界中から寄せられたご質問をデータベース化しております。エンジニアはこのデータベースを参照し、既に解決した問題であれば迅速にお客様のご質問に対応することができます。データベースの検索は、エラーメッセージなどのキーワードで行ないますので、正確にエラーメッセージをお伝えください。
- 2) UNIX と製品のバージョンは正確にお伝えください。
HP-UX の場合、バージョンは小数以下2桁まであります。
良い例 HP-UX 11.11, ADS 2002C
悪い例 HP-UX 11, ADS 2002C
バージョンを正確にお伝えいただけませんと、正確なご回答ができない場合があります。

[3] 1回のお電話でご質問を解決するためにお願いしたいこと

- 1) 電子メール / FAX をご活用ください。
図(システムの構成、回路図、グラフ)などは、FAX をご活用いただくとご質問内容がより正確にエンジニアに伝わります。また、エラーメッセージなども FAX でお送りいただくと、データベースの検索がよりスムーズに行なえます。
- 2) 離席されている場合が多いときは、お電話の時間指定をしてください。

[4] その他、お願いしたいこと

- 1) 受付番号(CALL ID)は控えておいてください。
EDAテクニカルサポートにご質問をいただいたときに、CALL ID を発行しております。この CALL ID はご質問ごとに割り当てられる番号ですので、控えておいてください。お客様からのご質問はすべてデータベース化され、保存されますので、再度ご質問される場合は CALL ID を受付にお伝えください。
- 2) EDAテクニカルサポート契約の更新は、1年ごとになります。ご契約いただいたEDAテクニカルサポートサービスは、1年ごとの更新となります。

EDA テクニカルサポート サポート依頼 FAXシート

宛先FAX： 0120-890-119 EDAテクニカルサポート受付 行
依頼日： 年 月 日
新規質問 継続中の質問（受付番号 ）
希望回答方法（ 電話 FAX 電子メール 指定なし ）

文字(特に数字とアルファベット)は大きくはつきりとご記入ください。

システムハンドル： (必ずご記入ください)
貴社名：
ご所属部署名：
(フリガナ)
お名前：
電話番号： 内線番号
FAX番号：
電子メールアドレス：
問い合わせ製品名： 製品のバージョン：
コンピュータ機種名：
OS名： (OSバージョン：)

お問い合わせ内容(エラーメッセージがあれば必ずご記入ください) 添付資料 枚